

祝詞作文教範

特258

307

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 1 2 3 4 5

始



特 258
307



祝詞作文教範

金光教義講究所講師
出 川 武 親 編





国文学研究



は し が き

- 一 本書はかねて金光教教義講究所に於ける祝詞作文科の教材として使用せしものを輯録編纂せるものなり。
- 一 編纂の方針は専ら初學者の爲に便好からんことを旨とし、先輩諸師の祝詞に就きその章句を引きて句例となし或は全文を掲げて文例とし、以つて拙稿の乏しきを補へり。
- 一 下編祭詞の構成に關する事項は全く編者の試案なり。偏に大方の御叱正を得、他日の改訂を期す。
- 一 附録「枕詞引用語索引」は銜糊の勞のみ。

祝詞作文教範目次

上編 祝 詞

第一章	祝詞の種類	一
第二章	祝詞の構成	一
第三章	祝詞の修辭法	三
第一節	敬語 美稱 卑稱	三
第二節	接頭語 接尾語 感動詞 副詞	九
第三節	助詞 係結 呼應 反語	一一
第四節	枕詞 序詞	一五
第五節	約音 略音 延音 添音 音通 音便	一九
第六節	假字遣ひと訓み方	一九
第六節	接續詞 其他	二九
第七節	比喻 重語重句 疊語疊句 對語對句	三三
○祝詞作文の榮		三五
第四章	祝詞の句例	三七
發端句		三七
神德		三八
感謝		四〇
由縁		四〇
裝飾		四〇
獻供		四〇
祈願		四〇
結尾		四〇
第五章	祝詞の文例	四二
一 恒例祭祝詞		四二
祓詞(一)		四二
祓詞(二)		四二
元旦祭祝詞		四三
元始祭當日祭祝詞		四三
祈念祭祝詞		四四

紀元節祭祝詞	三六
春季靈祭奏上詞	三六
春季皇靈祭遙拜詞(一)	三七
春季皇靈祭遙拜詞(二)	三七
神武天皇祭遙拜詞(一)	三六
神武天皇祭遙拜詞(二)	三六
月次祭祝詞	三六
大祭祝詞	三六
天長節祭祝詞	三六
獨立記念祭祝詞	三七
大祓奏上詞	三七
大祓々々詞	三七
五穀豐穰祈願祭祝詞	三七
教祖大祭祝詞	三七
神嘗祭當日祭祝詞	三七
明治節祭祝詞	三七
新嘗祭當日祭祝詞	三七
大正天皇祭當日祭祝詞	三七

大正天皇祭遙拜詞	三七
二臨時祭祝詞	三八
誕生命名式祝詞	三八
勸學祭祝詞	三八
成年式祝詞	三八
入營奏上詞	三八
歸休奏上詞	三八
結婚式祝詞(一)	三八
結婚式祝詞(二)	三八
結婚式教書	三八
結婚式誓詞	三八
養子縁組式祝詞	三八
養子縁組式教書	三八
養子縁組式誓詞	三八
銀婚式祝詞	三八
年賀祭祝詞	三八
教會所地鎮祭祝詞	三八
教會所新始祭祝詞	三八

教會所上棟祭祝詞	三六
教會所新殿清祓詞	三六
遷座舊殿祭祝詞	三六
遷座新殿祭祝詞(奉齋式)	三六
教會所開設祭祝詞	三六

教會所開設五十年記念祝祭祝詞	三六
青年會發會式奏上詞	三六
青年會祈念詞	三六
信徒宅祭祝詞	三六
記念碑建設奏上詞	三六

下編 祭 詞

第一章 祭詞の種類	一〇四
第二章 祭詞の構成	一〇四
第三章 祭詞の句例	一〇七
發端句	一〇七
哀悼句	一〇八
叙情句	一〇八
事理句	一〇九
比喩句	一一〇
一般的比喩	一一〇
四季の比喩	一一三
歸幽の狀況	一一五

年月の經過	一一七
諦悟句	一一七
祭事句	一一七
稱徳句	一一七
慰靈句	一一七
祈願句	一一七
結尾句	一一七
第四章 祭詞の文例	一一八
歸幽奏上詞	一一八
遷靈祭詞(一)	一二六
遷靈祭詞(二)	一二六
遷靈祭詞(三)	一二九

鎮靈祭詞(一)	130
鎮靈祭詞(二)	130
終祭詞(一)	131
終祭詞(二)	131
葬場祭詞(一)	133
葬場祭詞(二)	133
葬場祭詞(三)	134
誄詞	135
弔辭	137
葬後清祓詞	139
葬後靈祭詞(一)	140
葬後靈祭詞(二)	140
十日祭奏上詞	141
十日祭詞(一)	142
十日祭詞(二)	142
十日祭墓前祭詞	143
五十日祭合祀祭奏上詞	144
五十日祭詞	144

合祀祭詞	141
廿日祭に卅日祭四十日祭行ふ靈祭詞	142
五十日祭並に合祀祭を併せ	142
百日祭詞	142
一年祭詞	142
密葬祭詞	142
墓碑建設祭詞	142
物故者慰靈祭詞	142
布教功勞者慰靈祭詞	142
招魂祭詞	142
招魂祭々文	142
春(秋)靈祭の詞	142
祖靈祭詞	142
祖先朝暮拜詞	142
祖先朝暮略拜詞	142
祖先贊詞	142
改式祭奏上詞	142
改式祭遷靈詞	142
改式祭詞	142

改式祭墓前祭詞	160
改碑式祭詞	160

枕詞引用語索引	165
---------	-----

附錄

支那事變關係祝詞祭詞其他	
國威宣揚祈願祭祝詞	155
國威宣揚大祈願祭祝詞	156
教祖大祭祝詞	158
月次祭祝詞	160
紀元節祭祝詞	161
大祭祝詞	162
天長節奉祝祭祝詞	164
支那事變戰病死將兵弔慰祭詞	165
同戰病死將兵葬祭詞	167
弔辭(一)	169
弔辭(二)	169
招魂祭詞	170
御靈神祭々詞	173

祝詞作文教範 上編 祝詞

第一章 祝詞の種類

祝詞は神前に奏上する辭ことばにして、祭祀まつりの目的に依り、左の如き種類に分たる。

- イ 祓詞
- ロ 奏上詞
- ハ 拜詞（遙拜詞）
- ニ 祈念詞
- ホ 祝詞

恒例祭祝詞

臨時祭祝詞

尙祝詞に類するものに大祓被詞、結婚式誓文等あり。葬儀靈祭等の時靈前に奏する辭を特に祭詞と言ふ。

第二章 祝詞の構成

祝詞を構成する詞句並びに其の順序概ね左の如し。

一 發端句

發端拜詞句とも起首の句とも云ふ。祝詞の冒頭に於て先づ神名を奉稱し齋主名を謹告して爾後の詞を奏上する旨を敬白する章句なり。

二 神徳句

神徳を贊仰奉稱する章句なり。感謝の辭句を添ふる時は感謝句となる。

三 由縁句

祭典執行の理由主旨を奏上する章句にして祝詞作文上最も重要な部分なり。

四 献供句

神饌幣帛を献供する旨を奏上する章句なり。

五 祈願句

祈願の趣旨を奏上する章句にして由縁句と前後照應して祭典執行の精神を表白する重要な部分なり。

六 結尾句

發端句と照應して祝詞の末尾の臨みその終りし旨を謹白する章句なり

これ祝詞の基本様式にして、時に應じて左に示すが如く一二順序の變ることあり。或は省略さるゝことあり、又場合に依り感謝裝飾等の詞句の添へらるゝこともあり。

裝飾句

祭典の威儀として神殿の内外に特に裝飾を施し、或は齋場を新に鋪設したる時その有様を奏上する章句にして、發端句、献供句等の前に随時に添へらるゝ事あり。

- 一 發端句
- 二 神德句
- 三 由縁句
- 四 祈願句
- 五 献供句
- 六 結尾句
- 一 裝飾句
- 二 發端句
- 三 神德句
- 四 感謝句
- 五 由縁句
- 六 献供句
- 七 祈願句
- 八 結尾句

- 一 發端句
- 二 由縁句
- 三 献供句
- 四 祈願句
- 五 結尾句

第三章 祝詞の修辭法

第一節 敬語 美稱 卑稱

一 敬語

1 體言(名詞 代名詞)の敬語

(イ) 尊貴に對して其の名前を云ふ時には呼捨にせず他の語を添へて云ふ。

天皇に對して 大御前 御前 大前
 神に對して 大廣前 大前 御前
 靈神に對して 御前 前
 人に對して 公 卿 君 主 翁 大人 姫 彦 媼 刀自

(ロ) 間接に尊貴に該當する他の語を以つて代へて云ふ事もあり。

天皇に對して
 みかど(帝)(御門の意) すめらみかど
 みこと(命)(御言の意) すめらみこと

すめみまのみこと(皇孫命)
 すめらぎ、すべらぎ、すめろぎ、すべろぎ(皇)(統の意)
 おかみ (御上) うへ (上)
 一の人、おほきみ、陛下
 皇族に對して
 陛下(大皇太后、皇太后、皇后)
 日嗣の皇子
 皇儲(儲の君) (皇太子)
 東宮(春宮)
 親王 内親王
 皇子 皇女 王 女王
 殿下

人に對して
 君 公 候 卿 汝 貴 汝 翁
 大人 刀自 姫 媼
 但し天皇及神に對して他人の名前を云ふ時には、自

己と其の人との身分上の關係如何に拘らずこの種の敬語は用ゐず呼捨にしてよし。

2 用言(動詞 形容詞 助動詞)の敬語

(1) 動詞の敬語

まつる	御祭仕へ奉る
たてまつる	種々の物献り置きて
たまふ	神徳を蒙らしめ給ふ
たまはる	御恵を賜はる
はべる	御前に侍る
さぶらふ	御前に候ふ
まゐる	御前に參る
あぐ	まをしあぐ
のぼる	御前に參上る
つかふ	御祭仕へ
つかまつる	御祭仕へ奉る
ます	これの所にます

います	これの所にいます
まします	これの所にまします
おはす	

おはします	これの所におはします
めす(召す)	思召す、聞召す、知召す
仰す	おほせらる
ます	白す
いただく	戴く
うかがふ	伺ふ
うけたまはる	承る
かゝぶる	蒙る

(ロ) 形容詞の敬語

本来敬語のもの
 畏きあたり、やんごとなきあたり、九重の雲
 深き御あたり、
 御添へて敬語となるもの
 御うるはしく、御やさしく、御心やすく、御睦

じく、御いそがしく、

(ハ) 助動詞の敬語

使役の助動詞(す、ます) 受身の助動詞(る、らる)等を添へて云ふ時は敬語となる

使役

受身

歌をよます

歌をよまる

歌を作らす

歌を作らる

歌を遊ばす

歌を遊ばさる

使役と受身とを重ねて敬意を町重にする場合もあり

歌をよませらる

使役の助動詞に給ふを添へて敬意を町重にする場合もあり

御教を垂れさせ給ふ

3 特殊の敬語 その一

(イ) 神及天皇が國土を總攬統治される意味の

敬語は左の動詞を使役又は受身の相に活用

させて云ひ表はす。

使役相

受身相

見る(目) 見す みそなはす(體) 政を覽らる

聞く(耳) 聞かす 聞しめす 政を聽かる

食ふ(口) 食す 聞し食す、食す國

知る(心) 知らす 知しめす

とる(手) とらす 攬らす 政を攬らる

(ロ) 知る、敷く、の二語は敬語として次の如

き特殊の意味に用ゐらる。

天皇及神が國土を總攬統治される意

大神等の敷坐す。大神等の知坐す。

天皇及神の爲に物を作る意

宮柱太敷立て。千木高知る。

天皇及神の爲に事を行ふ意

大前を忌知り嚴知り。

(ハ) 天皇にのみ用ゐる特殊敬語

尊稱 おほみ(大御)を添ふる場合

大御位 大御祖 大御心 大御言
 大御恵 大御身 大御代(世) 大御歌(御製)
 大御使 大御典 大御光 大御饗
 大御食 大御門 大御手 大御寶
 大御床 大御船 大御馬 大御物
 大御執 大御後威 大御息所 大御親
 御 大御前 大御親

故に天皇以外に對して大祭をおほまつりと訓み或は大靈驗、大御教、大恩頼、等の語は用ゐざるをよしとす

参考 天皇に對してのみ用ゐられる漢語

○大命 大權 大位 大君 大統 大蘇 大典 大禮
 大婚 大葬 大行 大赦 大赦 大逆 大元帥
 大本營
 ○天位 天顔 天恩 天朝 天杯 天機 天兵 天覽(乙夜覽) 天長節
 ○親政 親裁 親祭 親臨 親閱 親廟 親任 親謁

親拜 親征 親衛 親藩 親兵
 ○行幸 御幸 臨幸 還幸 遷幸 巡幸
 ○皇上 皇化 皇后 皇居 皇室 皇城 皇孫 皇恩
 皇祚 皇祖 皇族 皇統 皇猷 皇運 皇澤 皇謨
 ○御「ギョ」と訓む場合
 御世 御仗 御札 御用 御名 御宇 御批 御府
 御物 御前 御苑 御食 御座 御筆 御紙 御箋
 御寢 御製 御廩 御題 御懸 入御 渡御 臨御
 還御 遷御 駕御 統御 崩御(以下は「ゴ」と訓む)
 御幸 御所 御惱 御眞影 御眞筆

○聖上 聖化 聖志 聖代 聖旨 聖作 聖君 聖政
 聖明 聖姿 聖祚 聖躬 聖恩 聖敕 聖朝 聖裁
 聖意 聖運 聖壽 聖算 聖慮 聖德 聖誕 聖叢
 聖駕 聖澤 聖論 聖斷 聖英 聖聽 聖覽 聖鑑
 聖體 歷聖
 ○宸旨 宸想 宸衷 宸眷 宸筆 宸慮 宸襟 宸闕
 宸斷 宸謀 宸翰 宸憂

.....にや。

二 美稱(尊稱・稱辭)(たたへことば)

尊敬したり或は美しく賞め稱へる爲に他の語の上に置いて用ゐるものを云ふ。其の種類極めて多きも御(み)の意味にて用ゐられること多し。

御
 おん おん答へ おんいたはしく 御取次
 ご 父御 母御 伯父御 叔母御
 み みかげ み恵 み教 御子
 神 神典 神語り 神上る 神集 神謀
 皇 皇國 皇神 皇軍
 天つ 天つ神 天つ金木 天つ清麻 天つ祝詞
 天の 天の叢雲 天の岩戸 天の八重雲
 大 大前 大道 大神 大典 大禮
 太 太敷 太知 太祝詞 太玉串 太幣帛
 高 高御座 高知 高敷
 廣 廣前 廣庭

4 特殊の敬語 その二

尊貴の上に關する事柄は故意にあからさまに云はざるを以て敬意の表現とす。

何年何月のころほひ.....
 ほのかに承るに.....
とぞ。

眞木 眞心 眞白 眞道
 玉垣 玉串 玉手筭 玉櫛筭 玉體
 豐御酒 豐御饌 豐葦原 豐國 豐年
 生日 生國 生魂 生産靈
 足日 足國 足穂 足産靈
 幸弓 幸矢 幸靈 幸男
 奇靈 奇びに… 奇しき…
 和妙 和稻 和靈
 荒麻 荒砂 荒妙
 妙なる… 妙に…
 岩戸 岩船 岩座 岩隠る
 安國 安座 安御饌 安幣帛
 靈驗 靈徳 靈鑑
 明德 明妙 明根
 照妙 照國
 細針 細女 名細し
 美日 美地 美國

三 卑 稱

茂穂 茂銚 茂宮 茂國
 嚴(稜威、伊頭) 嚴の千別 嚴の雄叫び
 全(貴、珍、宇豆) 珍の御前 貴の御子
 瑞(美豆) 瑞の御舍 瑞垣
 清 清麻
 正 正道
 直 直麻
 健 健雷 健人
 英 英靈
 速 速明津姫
 まな まなご(愛子) まなむすめ(愛娘)
 ひ ひめ(姫) ひこ(彦) ひまなこ
 (イ) 自己を卑下して云ふ場合
 をちなき 不肖
 つたなき 拙き
 それがし 某

賤 賤の伏屋 賤の男
 枉 枉庵
 伏庵 伏屋

第二節 接頭語 接尾語

感動詞 副詞

一 接頭語

單獨にては用をなさぬ語が或る語の上に結びついて居るものを云ふ。

(イ) 語の調子を良くし或は強める爲のもの

あ あざやか あまねく
 い いく い渡る い輝る
 いち いち早く いち著く
 うち うち拂ふ 打渡す
 か か弱し か細し
 かき かきあぐ かき曇る かき撫でる
 け けだるし
 さ さ迷ふ さ中 さ夜

やつがれ 奴がれ

しこ 醜の御楯

わらは 妾

弱 弱腰 弱肩 手弱女

(ロ) 相手を蔑んで云ふ場合

醜 醜國 醜草 醜の軍人 醜女

荒 荒草 荒男

弱 弱音 弱蟲

鬼 鬼子 鬼夫婦

犬 犬侍 犬死

腐 腐雞

小 小賢し 小智恵

生 生學問 生兵法

戯 戯業

痴 痴者

亂(狂)亂夫 狂夫

(ハ) 自他に通じて用るるもの

さし さし昇る さしまねく さしたてる

す す早く す通り

そ そだたく そ知らぬ

た たなびく た易し たくらぶ

たち たちあがる たちのぼる

て て短 て早く 手長 手旗

と とまどふ

ひ ひ弱し ひまなご ひだるし

もち もちあつかふ もちあぐ

(ロ) 賞美又は純粹の意を含むもの

け け高し

き き娘 きそば

ま ま澄 ま中 まほら ましろ

まん まん巾 まん圓

み み吉野 み山

も も中

す す直

(ハ) 輕蔑の意を含むもの

こ こ賢し こ利巧 こ細工

こ こ金 こ智恵 こ馬鹿

二 接尾語

單獨にては用をなさぬ語が或る語の下に結びついて居るものを云ふ。

(イ) 物の程度其他の意味を含むもの

み 厚み 深み 嬉しみ 辱なみ

て 右手 左手 上手 下手 旗手

まく いきまく

すがら 夜もすがら

めく ときめく きらめく

がてら 散歩がてら

がまし をこがまし

(ロ) 謙遜の意味を含むもの

ひ 底ひ

ら 私ら

ども 私ども 身ども

たち 私たち

(ハ) 輕蔑の意味を含むもの

づれ 匪賊づれ

ばら 奴ばら

三 感動詞

心に強く感動した時に思はず發する語をいふ。

おゝ

あゝ

あはれ

あはりや

あな

四 副詞

動詞、形容詞及他の副詞の上に在つて其等の意味を限定する爲に用ゐられるもの

(イ) 動詞の上に在るもの

彌榮えに榮え

直進みに進み

夢忘るな、夢々忘るゝ勿れ

(ロ) 形容詞の上に在るもの

綾に長き

いと尊く

彌高に彌廣に

(ハ) 他の副詞の上に在るもの

甚も甚も尊き

第三節 助詞係結呼應反語

一 助詞

語句と語句との間に在つて前後の關係を現はし、或は語句の終に添うて他の意味を添へる爲に用ゐられるものを云ふ。

(イ) 前後の關係を現はすもの

し 今日し、月次祭仕奉りて

しも 今日しも、月次祭仕奉りて

はも 今日、はも、月次祭仕奉りて

はしも 今日はいしも月次祭仕奉りて
 はや 今日はや月次祭仕奉りて
 とも まめなとも信心の油断をすな
 ども 不肖けれども某御前に仕へ奉る隨々
 ど 言卷は畏かれど我大神等の
 だに 人の情の温きをだに知らず
 すら 鳥すら恩を知る況んや人をや
 さへ 神徳を受け人徳をさへ得させ給ひぬ
 「だに」「すら」は物を比較してその軽いものをあ
 げて重いものを言外に含める時に用ゐる「さへ」は
 あるが上にもものゝ重なり添ふ時に用う
 で 夜も安らに眠り給はでひたすら…
 も 畏み畏みも白す
 い 何某い此度…
 (ロ) 語句の終に在りて他の意味を添ふるもの
 感動の意味を添ふもの
 かも 尊きかも辱きかも
 かな あな悲しきかな

疑問の意味を添ふるもの
 や ありやなしや
 か あるか無きか
 禁止の意味を添ふるもの
 な まめなとも信心の油断をすな
 な……そ
 手な觸れそ な来そ
 春な忘れそ なせそ
 なかれ 慾得にふけりて身を苦しむる事なかれ
 奨勵(命令)の意味を添ふるもの
 よ 神徳を受けよ人徳を得よ
 我心得我身を救ひ助けよ
 意味を強める爲に添ふるもの
 ぞ 信心して靈験のなき時は是ぞ不思議なる
 事ぞ
 ぞや 我身が我自由にならぬものぞ
 信心は本心の玉を研くものぞや
 神信心の無き人は親に孝の無きも人の道

二 係結び

ぞい 学者が年をとつても眼鏡をかけて本を讀むやうなものであらうぞい
 ちや 可愛と思ふ心が神心ちや
 (イ) 「ぞ」「なん」「や」「か」の係結び
 「ぞ」「なん」「や」「か」「こそ」等の助詞が文の上
 に在る時は之を結ぶのに一定の法則あり之を「係結
 び」といふ。
 「なん」 貴きことの極にぞありける
 奥城の奥深くぞ神隠れ給ひける

(正) 不思議なる
 ありける 時
 給ひける
 (誤) 不思議なり
 ありけり 時
 給ひけり
 「や」 人や出づると外にて待ちうけたり
 「か」 雪か降れる
 (正) 出づる 時
 降れる
 (誤) 出づ 時
 降り
 (ロ) 「こそ」の係結び
 文の上に「こそ」がある場合には「ども」と云ふ助
 詞に接続する言葉遣ひ(動詞、形容詞、助動詞、の
 已然形)を以て結ぶ。
 物をこそ云はね花にも心あるべし
 時節をこそ待てと論し給ひぬ
 辱きことの極にこそありけれ
 (正) 云はね ども
 待て ありけれ
 (誤) 云はぬ ども
 待つ ありけり

(ハ) 「なん」「こそ」は時ごして結びを省略する
ことあり

貴きことの極になん
云はん術爲ん術も無き事にこそ

三 呼 應

受身は受身と呼應す

神徳の廣く厚きを論されて迷の雲を晴らされたり

使役は使役と呼應す

不肖某をして御前の事に仕へしめ給ふまに

自動詞は自動詞と呼應す

御教明らか道正しく

他動詞は他動詞と呼應す

御教を明らかにし道を正しく行ふ

時の呼 應

現在 今日しも御祭仕へ奉る

過去 昨日しも御祭仕へ奉りぬ

未來 明日はしも御祭仕へ奉らむとす

副詞の呼應 (祝詞の中には用ゐらるゝ事極めて
稀なるも参考の爲に之を掲ぐ)

打消しの言葉を以て結ぶもの

をさ／＼ をさ／＼怠らず

ゆめ ゆめ忘るな

ゆめ／＼ ゆめ／＼忘るゝ勿れ

いさ 人はいさ心も知らず

必ずしも 必ずしも……ならず

猥りに 猥りに……するを禁ず

猥りに 猥りに……すべからず

「ことを」の語を以て結ぶもの

恐らくは 恐らくは……ならんことを

……ならん」とも云ふ

恨むらくは 恨むらくは……ことを

庶幾くば 庶幾くば……ことを

「とは」を以て結ぶもの

豈はからんや 豈はからんや……とは

はからざりき はからざりき……とは
思ひきや 思ひきや……とは

「べし」を以て結ぶもの

宜しく 宜しく……べし

すべからく すべからく……べし

當に 當に……べし

其他

將に 將に……せんとす

況や 況や……おや

宜なるかな 宜なるかな……こと

宜なるかな 宜なるかな……や

四 反 語

か 誰か神恩の洪大なるに感激せざるべき

誰か神恩の厚きに感激せざる

何ぞ 何ぞ感激せざらむ

いかでか いかでか救恤を停むべけんや

やは 口にこそ云はね心にやは忘るゝ

かは 悲しくやはあらぬ
誰かは泣かざらむ

第四節 枕詞 序詞

一 枕 詞

通常五音よりなりその下に連る語句に從屬して聲調
を助け或は修飾の用を爲すものを云ふ。稀には三音
四音六音七音のものもあり。

1 枕詞の性質

(イ) 觀念の聯合に基くもの

性質 安見しゝ わが大君

高光る 日の皇子

みなわなす 脆き命

ちはやふる 神

やきがまの 利心

習性 犬じもの 道にひれ伏し

鴨じもの 水に浮き居て

鹿じもの 膝折伏せ

光景 はふくすの いや遠長く

まこもかる 淀

芦がちる 浪速

材料 荒妙の 藤

かた糸の 緒(を)

しきたへの 床

音調 ちゝのみの 父

はゝそばの 母

よしの川 よしや世の中

濱楸 久しく

部属 いそのかみ ふる

にはつどり かけ

野つどり きぎす

水鳥の 鴨

くれなるの いろ

秋の田の いね

すゝか山 伊勢

うぐひすの 春

(コ) 観念の伴生を目的とするもの

うまさけ 三輪

空みつ 大和

うまし國 吉備

八雲立つ 出雲

玉藻なす よりねし妹

玉垣の 内

唐衣 きる

青柳の 糸

(ハ) 思想の轉換を目的とするもの

ぬば玉の 夜 闇 黒

玉櫛筒 函 二見 三室 開

あま雲の ゆきのまに

一、一部分にのみかゝるもの

水たまる 池田の朝臣

秋の田の 因幡の山

青柳の いと定めなき

一、體言にかゝるもの(形容詞的枕詞)

蒨さす 日

久方の 天

さく鈴の 五十鈴の宮

朝露の いのち

一、用言にかゝるもの(副詞的枕詞)

ぬば玉の 黒き

つがのきの いやつぎ

秋霧の 晴るゝ時なく

つゝじ花 匂へる君

菅の根の 長き

一、主語の位置にあるもの

2 文法上より見て

一、語の上にかゝるもの

あかねさす むらさき

あまさかる ひな

うちひさす みやこ

一、他の語を隔てゝかゝるもの

玉梓の 君が使を…

(使にかゝる)

一、句全體にかゝるもの

つるぎばの 身を切りくだく

山鳥の ひとりし寝れば



燈火の 明石の浦
あきのはの 匂に照れる
若草の ほのかに見てし

一、客語の位置にあるもの

兒等が手を 卷向山
君が世に 逢阪山
妹に戀ひ 吾が松原
わかごもを かるちの小野
春の田を かへすがへす

3 修辭上より見て

比喩 雲居なす 遠き
鴨じもの 水に浮き居て
やくしほの 辛き戀
もちどりの かゝらはしも
入日なす 隠れにし
頭韻 はゝそばの 母
ちゝのみの 父

二 序 詞

他の語句の上に在りて聲調を助け下の語句を修飾するものを云ふ。

(イ) 形容詞的序詞

水鳥の鴨の羽色の 春山の
橘の蔭ふむ道の 八衢に
飛彈人の打つ墨繩の 一筋に
夏野去く小鹿の角の 東の間も
雲隠り鳴き往く鳥の 音
荒鹽の鹽の八百路の八鹽路の 塩の八百會
梓弓手に取持ちて丈夫の幸矢手挿み立向ふ 高圓山
(ロ) 副詞的序詞
飛彈人の打つ墨繩の すみやけく
打拂ふ幣のさやぎの さやさやに

足引の山に生ひたる菅の根の ねもごろ
伊勢の海寄る重浪の 立榮えしめ
豊榮昇る朝日子如す 彌榮えに榮えしめ
春の海原 平らに
秋の月の さやかに
琴の調 豊かに
白雲のたなびく山の 高々に
安積香山影さへ見ゆる山の井の 淺き心
足引の山鳥の尾のしだり尾の 長々し夜
夏の野の繁みに開ける姫百合の 知らえぬ
茅花抜く淺茅ヶ原のつぼすみれ 今盛りなり
海の底沖つ白浪 立田山

二 略 音

てあらひ たらひ
くにうち くにち
もちいひ もちひ
ながあめ ながめ
にぎたへ にぎて
やまあがた やまがた
とほつあふみ とほたふみ
かはうち かはち
あぜはなち あはなち
うちそと うちと
そとづくに とづくに
みやじろ ゐやじ
ひろきもの ひろもの
さきもの さもの
あをきやま あをやま
たかきやま たかやま

第五節 約音 略音 延音 添音 音通 音便 假字 遣ひと訓み方

一 約 音

三延音

カ行延音	かふ	受く	祝ぐ	白す	白さく	いつみく	うろつく	ごたつく	手つき	顔つき	顔	手	つき	ナ行延音	なふ	賄ひ	諸べ	敵	遅
	受けがふ	祝がふ													まひなふ	うべなふ	あだなふ	おそなふ	

なく	言はぬ	有らぬ	言はなく	有らなく
----	-----	-----	------	------

ハ行延音	はく	曰ふ	曰ふ	幸	業	氣	生む	遅なふ	清む	忌む	くるふ	もとふ	いき	ころ
	曰はく	曰はく	曰はく	さちはふ	なりはひ	氣はひ	忌みはふ	遅なはる	清まはる	忌まはる	くるほす	もとほす	いきほひ	ころほひ

忌はふ

四添

マ行延音	まふ	忌む	隠す	禮	掛け	言ふ	待つ	恥づ	たむ	云ふ	老ゆ	奉る	音	兄	姉	梅
	忌まふ	隠まふ	ひやまふ	ひやまふ	掛けまく	言はまく	まつらふ	恥ぢらふ	ためらふ	云へらく	老いらく	奉らく		あに	あね	うめ

お	馬	母	野	咲く	枕	くす	ことく	こく	こく	ぼた	をがむ	野	尾	兒	爲	良し	呉れ	直
うま	おも	野ら	さくら	まくら	まくら	くすり	ことり	こくり	こくり	ぼたり	をろがむ	野ろ	尾ろ	兒ろ	爲ろ	よろし	呉れる	なほび

奇 奇ひ

五音通

五十音圖の同じ行の内で變る場合

手枕	たまくら
船歌	ふなうた
白雲	しらくも
みやまふ	うやまふ
和稻	にこしね
齋場	ゆには
野	ぬ
神術	かむわざ
和稻	にこしね
大宮内	おほみやぬち
奉られ	奉らえ

五十音圖の他の行の間にて變る場合

一三二

紫宸殿	ししいでん
清涼殿	せいろうでん
善悪	ぜんなく
因縁	いんねん
わ	あ
われ	あれ
わが	あが
わたくし	あたくし

訛語(なまり)も普通の一種なるが賤しき言葉遣ひなる故用ひざる様注意するを要す。

例へば

正	訛語
ひ(火)を	し
ひ(日)を	ふ
い	え
え	い
ら	だ

六音便

(イ) 動詞の音便

イ音便	書きて	を	書いて
	咲きて	を	咲いて
	仰きて	を	仰いで
其の他	況して	を	まいて
	榛原	を	はいばら
ウ音便	慕ひて	を	慕うて
	思ひて	を	思うて
其の他	(慕ふて、思ふて、と書いては誤なり)		
	食ぶ	を	たうぶ
	葬る	を	はうぶる

撥音便

八日	やうか		
死にて	を	死んで	
學びて	を	學んで	
讀みて	を	讀んで	
其の他	(撥音んを讀むで止むでと書いては誤なり)		
童	を	わらんべ	
昨夜	を	よんべ	
思ひ計る	を	おもんばかり	
備後	を	びんご	
促音便	勝ちて	を	勝つて
	持ちて	を	持つて
	有りて	を	有つて
其の他	欲りす	を	欲つす

一三三

貴し を たつとし

引き下ぐ を ひつさぐ

備中 を びつちう

(ロ) 形容詞の音便

イ音便

美しき心 を 美しい心

悲しき哉 を 悲しい哉

欲しきまゝ を 欲しいまゝ

ウ音便

良くこそ を 良うこそ

お早く を お早う

お芽出度く を お芽出度う

(良ふこそ、お早ふ等と書いては誤なり)

(ハ) 副詞の音便

ウ音便

全くす を 全うす

辱くす を 辱うす

齋主 (いわいぬし)

仰き (あをぎ)

阿波禮(噫、嗚呼)(あわれ)

(ロ) 訓讀について

音讀による漢字の振假字と訓讀による國語の假字遣ひとはその形似たれどもその成立は全く逆なり。漢語の振假字は漢字が主にて假字は従なり、國語の訓讀は假字遣が主にて漢字は客なり。

神舎を訓讀にてみあらかと訓むはみあらかはみありかの變化したるものにて御在處の意なり。「神のおはしますところ」と云ふ國語の意味を漢字を以つて神舎と當て書きしたるものにて、漢字にては其の他に次の如く數種に書き表すことを得るなり。

神 殿 神 社 御 殿 御 舎
みあらか みあらか みあらか みあらか

のりとはのりときごとの略音にして祭式に際し神前に奏上する詞なり。その義により漢字を以て祝詞、祭詞、祭文、又は諄辭と當て書きす。祝、祭又は諄

七 假字遣ひと訓み方

(全ふす、辱ふすと書いては誤なり)

(イ) 漢字の振假字及び國語の假字遣ひと夫等の發音(音讀及び訓讀)とには區別ある事を

辨へ唱ふる時には普通の發音通りに讀む事

漢字の音讀

金光 (こんこう)

孝行 (こうこう)

學校 (がっこう)

天皇 (てんのう)

皇大神宮 (こうだいじんぐう)

王子 (おうじ)

三條 (さんじょう)

大廣前 (おおひろまえ)

教祖 (をしえのみおや)

今日 (きょう)

給ひ (たまひ)

給ふ (たまふ)

國語の訓讀

にのりの、詞、文又は辭にとの音も義もあらざるなり故に古より在りし事物を云ひ表はす語句は訓讀し、新らしく出來し語句はそのまゝ音讀するを以て大凡の基準とせば可ならん。

軍艦をいくさぶね、大砲小銃を おほづゝ、こづゝと訓むは良しきも、機關銃飛行機は音讀するを可とすそれを強ひて訓讀するは却つて聞苦しかるべし。教會所は音讀しても「をしへどころ」「をしへや」と訓讀しても良し、しかるを殊更に「をしへま」とひところ」と訓み或は衆議院議員を「くにのまつりごと」ものまをすひと」など、訓まは可笑しかるべし。

(ハ) 俗稱を用ゐぬこと

正	二十四	俗	ふたじふよん
	四十二		よんじふふたつ
	七十九	稱	ななじふきう
	九十七		きうじふなな

ニ 略稱はなるべく用ゐぬ事

- 金光中學校 (金中)
- 無線電信 (無電)
- 地方聯合會 (地聯)
- 國防婦人會 (國婦)
- 輕機關銃 (輕機)

昭和十三年四月十五日 (十三年四月十五日)

ホ 公に定まれる稱號其の他の語句は特に正確に書き又讀む事肝要なり

- 天地金乃神
- 大祖神
- 教祖生神金光大神
- 眞道乃心得
- 道教乃大綱
- 信心乃心得

年月日その他の訓み方

一	日	ついたち(朔)
二	日	ふつか
三	日	みつか
四	日	よつか
五	日	いつか
六	日	むいか
七	日	なぬか
八	日	やうか
九	日	こゝのか
十	日	とをか
十一	日	とをかまりひとひ
十二	日	もちのひ
十三	日	はつか
十四	日	はつかまりみつか
十五	日	なかのよつか
廿	日	すゑのいつか

三十日	みそか
晦日	つごもり
四十日	よそか
五十日	いそか
八十日	やそか
百日	もゝか
八百日	やほか
一年	ひととせ
十年	ととせ
二十年	はたとせ
二十五年	はたとせまりいつとせ
三十四年	みそまりよとせ
三十五年	よそまりいつとせ
四十五年	いそまりむとせ
五十六年	むそまりなゝとせ
六十七年	なゝそまりやとせ
七十八年	やそまりこゝのとせ
八十九年	

一月	陸月	むつき
二月	更月	きさらぎ
三月	彌生	やよひ
四月	卯月	うづき
五月	皐月	さつき
六月	水無月	みなづき
七月	文月	ふみづき
八月	葉月	はつき
九月	長月	ながつき
十月	神無月	かなづき
十一月	霜月	しもつき
十二月	師走	しはす
一歳	ひとつ	
二才	ふたつ	
三才	みつ	
四才	よつ	
五才	いつ	

六才 むつ
七才 なつ
八才 やつ
九才 こゝのつ
十才 とを
十三才 とをまりみつ
二十才 はたち
廿五才 はたちまりいつつ
三十才 みそち
四十才 よそち
五十才 いそち
六十才 むそち
七十才 なゝそち
八十才 やそち
九十才 こゝのそち
百才 もゝとせ
百廿才 もゝあまりはたち

百廿七才
一 人
二 人
三 人
四 人
五 人
六 柱
七 柱
八 柱
九 柱
十 柱
十六 柱
一百八十一 柱
四百五十六 柱
四百六十七 柱
三百三十八 人
三百九十九 人
三百玖拾玖 人

ひともしはたちまりな
ひつ
ひとり
ふたり
みたり
よたり
いつたり
むはしら
なゝはしら
やはしら
こゝのはしら
とはしら
とをまりむはしら
もゝやそまりひとし
ら
よちいほむそまりな
はしら
ふたもゝみそまりやた
り
みもゝまりこゝのそま
り
さんびやくくじふく

二八

壹百捌拾肆
貳百壹拾伍
一昨(昨年)
去(昨年)
今(今年)
來(今年)
再(今年)
一丈二寸
四尺一寸
九尺二寸半
九百七十丈

東
八
十
十三
十五
三十
四十
五十
六十
七十
七十
八十八

東
東
東
伏
學
立
惑
命
順
稀
壽
米
壽

壹百七拾九萬貳千四百七拾余歲
一昨日も昨日も今日も見つれども
明日さへ見まく欲しき君かも

第六節 接續詞其他

一 接續詞

まに (任)

まに (隨々)

天皇の大稜威の任皇大御國の御榮は……

年毎の例の隨々教祖大祭仕奉る

大廣前に仕奉る隨々みかけ蒙る者等

大道の開け進み行く隨々今回これの教舎を

神幸蒙る事を嬉しみ辱み奉る隨々今日はも

信心は本心の玉を研くものぞやとの神訓の隨々愈

々益々真心の道を……

つゝ

みかけ蒙る信徒の多くなりつゝ教會所の彌榮え行

くは

ものから

天皇陛下の大稜威によるものから又大神等の靈徳

を蒙らずては

家にも身にも大きみかけを蒙りしものから遂には

……

禮なき舉動の重なるものから天皇には

からに

其の名世に聞え重く用ゐられしからに或は……

ほどに(間に)

大廣前に仕へ奉る間に、廣く厚きみかけ蒙る……

なかに(中に)

みかけ蒙る信徒等のいと澤なるが中に、これの

べく

高き神徳を仰がしむべく、夜の守日の守に

と

大神等の恩頼を畏み仰ぎ奉ると、不肖某が

として

神恩の千々の一つをだに報い奉らむとして、今日は

しも

で

夜も安らに眠り給はで、ひたすら勤み給ひしものを

大船の思ひ頼みてありけるものを、何とかもけるが

我道の信徒となりましけるが、素より忠實にければ

良く家業を勤みましければ、家内和び睦み故(かれ)(そこでの意)

實にや

然るに

かくて
殊に
かく仕奉るによりては
辭別けて白さく

其の他
に、にして、ば、ど、ども、を、て、とて、また

二 数字の意味

或は、等皆持續詞として用ゐらる。

國語の中で用ゐられる数字は數學的に正確に數を表はす場合と、多いとか少いとかの意味で用ゐられる場合とあり。多くは後者の場合なり。

(イ) 少數の意味で用ゐられる場合
脱れて還るもの三人のみ

中には一二然らざるものあり
千々の一つ 千重の一重

百千の一つ 千萬の一つ
(ロ) 多數の意味で用ゐられる場合

三人寄れば文珠の智恵
石の上に三年

大八州 八十枉津毘神
八十日はあれど

八百日往く濱の眞砂はつくれども
千代に八千代

八百萬の神

五十鈴

七難八苦

百貨店

八百屋

細鉢千足國

五百箇眞神

文武百官

百姓

第七節 比喻 重語重句 疊語

疊句 對語對句

一 比喻(物事に比喻へて云ひ表はす語句)

皇國の礎は大和島根の動きなく

家業は門毎に刺す若松の彌繁に

家門も嚴彌久榮の如茂久榮に

鶉如す、い這ひ回ほり

鹿自物、膝折伏せ

常磐に、堅磐に、

朝の御霧夕の御霧を朝風夕風の吹掃ふ事の如く

二 重語重句(同じ語句を繰返すもの)

島根の、若松の、の如、如す、自物、常磐に、等何れもの如くの意味に用ゐる比喻へて言へるなり。

神集へに集へ 神謀りに謀る

ありとある 作りと作る

願ひと願ふ

罪と云ふ罪

云ふに云はれぬ

あるにあられぬ

輝きに輝き

彌勤めに勤めしめ

彌勤みに勤ましめ

彌進みに進ましめ

使役の相にて語を重ねる時は上の語は連用形(中止形)にて止め、最後の語だけに使役の助動詞を添ふ

勤め(マ行下二段) 故に 連用形 勤めに勤めしめ

連用形

勤む(マ行四段) 故に 勤みに勤ましめ

進み(マ行四段) 故に

進め(マ行下二段)

進みに進ましめ 進めに進ましめ いづれにてもよし

四 對語對句

(彼此事物を相對して述べるもの)

大 祓 詞

高天原に神留ります 皇親神漏岐の命以ちて八百萬神等を神議りに議り給ひて我皇御孫の命は豊葦原の水穂國を安國と平らけく 知し食せと事依し奉りき

かく 依し奉りし國中に荒振る神等をば

神間はしに問はし賜ひて 語問ひし樹立根を

神掃ひに掃ひ賜ひて 草の垣葉を

も語止めて天の磐座放ち 天の磐座を伊頭の千別に千別て 天降し依し奉りき

かく依し奉りし四方の國中と大倭日高見の國を安國と定め奉りて 天津磐根に宮柱太敷立て 皇御孫之命の美頭の御舍仕へ奉りて 日の御蔭と隠りまして安國と平けく知しめさむ國中に成出てむ天の益人等が過ち犯しけん種々の罪事は

三 疊語疊句(同じ意味、又は類似の語句を繰返すもの)

生日の足日

佳日の美日

天津祝詞の太祝詞

安幣帛の足幣帛

天津御食の長御食の遠御食

天足し國足しに満足はし

天輝し國輝しに照り輝かし

國の八十國 島の八十島

常磐に堅磐に

千代に八千代に

天津罪と

畔放、溝埋、槌放、頻時、串刺、逆刺、生剝、逆剝、屎戸

許々太久の罪を天津罪と法り別けて

國津罪とは

生膺斷、死膺斷、白人が母を犯せる罪、己が子を犯せる罪、母と子と犯せる罪、子と母と犯せる罪、畜犯せる罪、長虫の災、高津神の災、高津鳥の災、畜仆し、蟲物せる罪

許々太久の罪出でむ

かく出では天津宮事以て

大 中 臣 天津金木を本打切りて千座の置座に末打斷ち置足らはして天津菅曾を本刈斷ちて八針に取辟き末刈切りて

天津祝詞の太祝詞事を宣れ

かく宣らば

天津神は 天の岩門を押ひらきて 天の八重雲を伊頭の千別に千別て 聞食さむ

國津神は 高山の末に上りまして 短山のいほりをかきわけて 聞食さむ

かく聞食しては 皇御孫の命の朝廷を始めて 天の下四方の國には

罪といふ罪はあらじと

科戸の風の天の八重雲を吹き放つ事の如く

朝のみ霧を朝風の吹き拂ふ事の如く

天津邊に居る大船を 船解き放ちて 原に押放つ事の如く

彼方の繁木が本を燒鎌の紋鎌もて打拂ふ事の如く

遣る罪はあらじと

破ひ玉ひ 清め玉ふ ことを

高山の末より佐久那太理に落たきつ速川
短山の末の瀬にます

瀬織津比咩といふ神

大海の原に持出てなむ

かく持ち出でいなば

荒鹽の鹽の八百道の八鹽道の鹽の八百會に
ます

速開津比咩といふ神

持ちかゝのみてむ

かくかゝのみては

氣吹戸にます

氣吹戸主といふ神

根の國底の國に氣吹放てむ

かく氣吹放ては

根の國底の國にます

速佐須良比咩といふ神

持佐須良比失ひてん

かく失ひては

天の下四方には罪と云ふ罪はあらじと

被ひ給ひことを
清め給ふことを

天つ神 平らげく 聞食せと白す
八百萬の神等 安らげく

祝詞 作文の 栞

(一) 被詞に於ける祈願句は罪穢の清祓のみ奏すべきものなり。然るに間々祭典の麗はしく奉仕さ
るゝ旨を祈願する詞を添ふる者あれどこは過ぎたる誤なり。

(二) 「掛卷も畏き」或は「畏み畏みも白す」「恐み惶みも白す」等の語句は天皇又は神に對する時に
のみ白すべき極めて鄭重なる言葉遣なり。

故に其他の場合には通常用ゐざるを可しとす。祭詞の部の句例文例等について心得べし。

(三) 祝詞の中に於て姓名を唱ふる時は姓と名との間に助詞「の」を添へて云ふを正格とす。

例 藤原鎌足

橋 諸兄

その他 佐藤教師

畑 宿老

不肖某 と云ふ場合の某は必ず自己の名(姓にあらず)を唱ふるものなり

不肖 正雄

不肖 花枝

總じて自己を言はんとする時は代名詞(己、某、私、妾等)を以つてするよりも名を唱ふ
るを可とす。

(四) 月次祭、大祭、記念大祭等祭典の大小に應じ措辭の長短輕重等を適はしくするを要す。
(五) 比喩を引き或は光景を叙べて文を修飾する場合、季節外れや場所違ひとなり、又は事實に無き
ことを語句にのみ有るが如く言ひて偽事にならざる様注意する事肝要なり。

- (六) 遷霊詞の發端句にては未だ何某の靈と云うては呼ばず。
 - (七) 葬儀靈祭の場合齋主と故人との生前の地位身分年齢等の關係一様ならず。敬語の用ゐる様其他の言葉遣など夫々適はしうすることにつとむべし。
 - (八) 歸幽前後の狀況を述ぶる場合故人の徳を稱へる爲の他、病名や病狀などあからさまに述べざるものごとす。
 - (九) 徳識、功績を稱ふるは過ぎても可なり。不徳不行狀は見直し言直して、靈の安定を乞祈み死者を恥じめざる様心懸くべし。
 - (一〇) 一年祭以後の靈祭は故人の祭日なれば徒に哀悼にのみ流れず、その徳識功績などを追慕讃稱することを主とすべし。
 - (一一) 奏上するに際しては言語は正確明瞭に音聲は壯重に、緩急宜しきを得、抑揚高低は自然に任せて故意に作爲せざるを可とす。
 - (一二) 認め方
 - 大奉書 縦 七ツ半折 半を中にして卷く。
 - 第一折は餘白としその外側（裏）左上に〇〇祭祝詞（祭詞）と認め、第二折より天地を六四に空け一折目毎に二行づゝ認め、長文の場合は繼いで用ゐ、最後に年月日を記入す。
- 書體は楷書の事

第四章 句 例

發 端 句

- 掛卷も畏き天地金乃神の大廣前教祖生神金光大神の珍の御前に「職名姓名」畏み畏みも白さく
- 言卷も畏き……
- 言擧げ奉るも畏き……
- 是の神床に齋ひ奉り鎮め奉る掛卷も文に畏き天地金乃神の大廣前教祖生神金光大神の珍の御前に齋主「職名姓名」度み敬ひ畏み恐みも白さく
- 是の新神殿の中央を拂ひ清めて招奉り鎮め奉る掛卷も畏き……
- 眞金吹く吉備の國白髪つく木綿崎山の山本を朝日の日照り夕日の輝く美處と齋ひ定めて瑞の神舎仕へ奉りて鎮め奉る掛卷もかしこき……

○此の何の里の下津岩根に宮柱太敷立て高天原に千木高知りて稱辭竟へ奉る掛巻もかしこき……
 ○此の岡に年経る松の高々に神さび座す掛巻も畏き……
 ○八十日はあれど今日を生日の足日と齋定めてこれの神床に鎮め奉る掛巻も畏き……

神 德 句

○今更に言擧げ奉らむは畏かれど我大神の御恵はし久方の天と高く輝り渡り荒金の土と
 廣く満ち足らひ鳥羽玉の夜となく茜刺す晝となく神幸へ守り給ひて
 ○久方の廣く大きな天の御恵はや荒金の厚く妙なる地の恩頼はや此の御恵此の恩頼に
 依りて物皆は自ら其の所を得人皆は努めて其の則に副はましと在り經る中に我生神は
 出顯まして畏くも神の御心を宣傳へ給ふまにまに神は我本體の大祖にして我身は神德
 の中に生かされてあることを悟り得る者國の内外を問はず日に月に多くなりまさるこ
 そ尊けれ

○言巻も畏き人力威乃命と神號は申して稱辭竟奉る神の命はしも吳竹の世の憂き節につ
 け迷へるを導き病の苦瀬に落ちて惱めるを救ひ給はむと清く雄々しき御心を振起し坐
 して彌高き神格に到り給ふ大神德のまにまに眼なきものには眼を給ひ足なきものには
 足を給ひて世には大き御功を立て人には廣き御恵を蒙らしめ給ひしは天つ星數へもつ
 きず

○高光る日月の伊照らん限り守らせ給ふ大神神の稜威を脊に負ひ荒金の地の及べる極み
 恵ませ給ふ生神の恩頼を頂に捧げ奉る我御教事はし雲の八重垣彌深く年々に進み潮の
 八百路の彌廣く月々に開け行きて日に異に神幸蒙り奉る信徒のやゝゝに蕃殖り行く
 が中に

○大神等の御神德はし天照日影の伊照輝き恩頼はし天津水の伊往き渡らひつゝ其の輝き
 に生き其の霑ひに蘇生る者は濱の眞砂の計へも盡きぬが中に
 ○言巻も畏かれど我教祖神と仰ぎ畏み奉り生神と稱へ尊み奉る神の命はや御代の年號を嘉永安政
 と稱へし頃ほひ世間の人等が中世以來我國に傳はり來て普く蔓りし陰陽道てふ日柄方位の吉凶
 を論ふ邪道に踏み迷ひ人心は自由を失ひて困じ果てなむとせるをいと憐れ思召し歎かせ給

ひ天の恩の廣きを仰ぎ地の恩の厚きを尊み時の惠の妙なるを畏み奉りつゝ一向に信神の一念を凝し給ふ随々安政五年七月十三日には大祖神の神憑りを受けさせ給ひ同六年六月十日には御神號を金子大明神と賜り文久二年十一月二十三日には金光大明神と改り元治元年十月二十四日には金光大權現と進み明治元年九月二十四日には御神傳の随々生神金光大神と改めさせ給ひその立置給ひし御教は開け進み行く大御代の魁となりしこそ最も尊く最も畏き極みなりけれ

○あはれ我教祖神と仰ぎ奉り生神と稱へ奉る人力威乃命はや信神の一念を凝らし心行を積ませ給ひて去にし安政六年にしも神宣により大神の御心を直々に氏子に傳ふるの道を開くと言立給ひ吉備の國なる木綿崎山の麓大廣前の内只一間にまじながら飛彈人の打つ墨繩の一筋に眞道を開き信徒諸々を教導き説諭し社會を救ひ人草を助け給ひつゝ御教を立て本教の基礎を固め置き給ひて明治十六年十月十日にしも木綿崎山の奥城の奥深くぞ神隠れ給ひける

○天地日月の廣く厚く明るく久しき眞こそは我大祖神の稜威にしてその眞を感じその眞を道に現はし給ひし生神の恩頼は天地日月に類ひて満ち足らひ輝き渡りまして汚し奉らむ業もなく蔽ひ奉らむ術もなきこそ尊けれ

○拜み奉れば久方の天と高き我大神等の神威はや仰ぎ奉れば御空行く日月と赫き我大教會所大廣前の神比禮はや夜と晝との差別なく遠き近きの隔なく物皆を守り惠ませ給ふ大祖神の御恵を畏み奉らせ給ひ信心する人は何事にも眞心になれよ今月今日で一心に信頼め靈驗は和賀心にあるとの御神訓を辱み奉らせつゝ只管に神勤めに貫き坐します大神徳の随々教派の紀綱引緊り教風彌々顯揚りて奇しく妙なる靈驗蒙る信徒等の天の益人益々に蕃殖り行けるは實に辱き極になむ

感謝句

○今更に言擧げ奉らむは畏かれど天地に滿渡らせ給ふ大神等の恩頼を畏み仰ぎ奉ると不肖「某」が大廣前に仕奉る随々廣く厚き御蔭蒙る信徒の多くなりつゝ教會所の彌榮えに榮え行くは最も尊く又忝き極なりけれ

○かくて教の旗手彌著く道の光の彌明く照り輝き今は金光の御名の四方八隅に轟きて天地の開くる音に眼を開かざるもの無きまでに至りぬるは忝き極になむ

○此の家の主「某」を始めて家族諸々手人召使に至るまで入紐の同じ心に眞の大道を履みしめつゝ勵み勤しむ随々商業は爲すがまゝに立榮え家内富足らひ饒び樂しましめ給へるは専ら大神等の恩頼によるものと禮び奉らるゝぞかし

○此の教會所はや何某教師が何年何月何日立設けしより以來日に異に御前の事仕奉れば御蔭蒙る者等の次々に殖り榮え行く随々廣前の廣らに新らしく築き建てむと信徒諸々と相謀りて去にし何年何月何日其の工事を起したりしが何月何日にしも上棟仕奉り何月何日早船の早くも工事竣へぬるは最も尊く最も忝き極みにこそ

○信徒諸々が日に異に神幸蒙ることを忝み奉り嬉しむ奉る随々今日はも月次祭仕奉りて恩頼の千々の一つをだに報い奉らむと

由縁句

○(大祭) 今日はしも年毎の例の大祭仕奉らむとして

○(謝恩祭) 故其の神恩の千々の一つをだに報い奉らむとして今日を吉日の美日と齋定め神壽ぎに壽ぎ豊壽ぎに壽ぎ稱へて報賽祭仕奉る

○(地鎮祭) 今回此の何某が子孫の永く隠ろひ住むべき家居を新しく建てんと此の地の

荒草刈除き木根鬚拓き大石小石取平して地鎮御祭仕奉る

○(地鎮祭) 此の「何某」が家はしも年普く雨風の進びに酷く損ね行くからに改造らむと古き屋を取壊ち忌嶽忌嶽以て土引き均し石播埋め小竹指立て注連繩引延て今日の生日の足日に地鎮祭仕奉る

○(新始祭) 此の「某」家の家造に取用うる物と此所彼處より良はしき木の大小悉に

選び集めたるを以て定めたる日取の随々今日の佳日の美日に手斧始祭仕奉る

○(起工式) 今度の此の處に何々組の請負にて何々會社社屋建築の工事を始めむとして黒金の鐵セメントを始め遠山近山に生立る大木小木を齋ひ取寄せ諸々の工人等を御前に召集へて今日の生日の足日に起工式の神業仕奉る

○(上棟式) 此の「何某」主の家を造設けんと先づ頃より工人等諸々朝夕に心を籠め打墨繩の一筋に打振る手斧の敏く成遂げむと勤み務めて有る間に今日の生日の足日に棟上式執行ふことゝなりぬるを以て御前を忌知り嚴知り

○(上棟式) 此の「某」家の家造事始めてしより大神等の廣く厚き御恵に依りて日に異に事執行へる工人等が手の躑足の躑に過つ事なく今日しも如斯棟上美しく成し畢へぬる事を嬉み奉り辱み奉るご御前を忌回り清廻り

○(落成式) 曩に我大神等に乞祈奉りて造事始めにし是の「何某」の家の新築の工事は大神等の高く尊き恩頼の随々三枝の三端四端の殿造り落つる事なく漏るゝ隅なく悉に美しく竣工ぬ故今日の生日の足日に新宅祝の御祭仕奉ると

○(學校増築落成祝祭) 吾大君の大詔を以て國に物學ばぬ民無く家に物學ばぬ人無かれと言依し給へりし任々其旨を畏み奉りて兼て學舎を建設し教子等を集へて年普く學業を勤に勤め勵みに勵みて在けるが年々に教子等の甚多に殖にたれば此の里の里人等思ひ慮りて心を合せ力を盡して如斯も美はしく潔く廣く堅く學舎を造り設け置へたるは甚も愛度く喜ばしき事になむありける故今日の生日の足日を以て來賓教師 事務員教子等打集ひてその祝祭 仕奉る

○(創業祭) 此度これの「何某」い負氣無くも大船の思ひ慮りて此の處に何々の業を起し始めんと爲て今日の佳日の美日にその事の由を奏上げ前途の神幸を乞祈奉る創業(開

店 起工) の祭 執行はんとす

○(竣工祭) 此の「何某」い去し何年何月の頃より大船の思ひ慮りて大神等に乞祈奉りつつ某の事業を起し創めてしより奇しく妙なる靈驗を蒙らしめ給ひ事業の上にも與り勞苦ける人等の上にも障る事なく滞る事なく進み捗りて今年某月某日になむ完く成し畢へぬ阿奈尊きかも阿奈辱きかも故今日の生日の足日にその報賽祭 仕奉る禮代のもの

○(道路開通式) 是の何國何村なる何街道より何國何村に往復通路はも古よりの狹隘路にしてあらぬ方に遠く迂廻のみかは最嶮岨くして今の世の人車の通ふに便利悪しかりしを畏き哉開け行く大御代の隆昌と公の御掟に依りて最も近く又廣く平坦なる道となすべく去し何年何月より事起して在しが大神等の廣く厚き神幸の隨々今其の業を事麗はしく成竣ぬれば今日の生日の足日に開道の祝典を行ふとして事に預れる人々夜晝となくその設備を調へ縣知事を始め村長紳士等此の里の男女に至るまで諸々寄り集ひて御前に

○(鐵道敷設起工祭) 萬の物事の日に月に開行く天皇の大御代に便宜き事澤なるが中の便宜き事

と鐵道敷き列車走らせ人をも物をも積み成して百里千里も時の間に往來する事は一人二人の小利にあらず即て大御國の大き公益にしあればいかで此業興さざらめやと某等奥津藻の最も深く思起して諸人を説誘ひ力を協せ官の御許を請得今日を生日の足日と齋定めて事始爲してむと御前に

○(鐵道開通式) 天地の榮ゆる時の中今の嚴の大御代はしも年に月に御榮に行きて吳竹の世の狀は夏草の最繁く千種の花の種々に色を競へる事の如く開け進み行く隨々鐵道も日の經緯に開けにたれど何市より何町に行還ふには未だその設なく最も便利惡しかりしを「何某」等いと他かぬ事に思ひて前の年より主務省に請ひて許を得何々鐵道會社といふを設立し何年何月より工事に取懸り足引き山の岩ヶ根打碎き水溜る池に小川に橋打渡し高きを削り低を埋めて笹蟹の最も巧に鐵道を布き延へ竟へぬるを以て今日を始めて汽車の轍の音も轟に往復すこといはなりぬ故是の何々驛の前の眞廣場を嚴の齋場と注連繩引廻し坐せ奉り鎮め奉りて開通祝祭仕奉る

○(進水式奏上祭) 曩に此の何造船所にて何汽船株式會社の事依しの隨々龍骨据付け船造の工の業事始めたりし大船はしも大神等の奇しき靈驗を蒙りて船工等諸々過つ事なく怠る事なく造り勵みてある間に今しその工程の半を終へぬるを以て今日の生日の足日の良き潮時を測定めて船

打清め○○丸と命名て進水式(船下式)執行はむとす故この業に預れる限りの人々を御前に召集へその事の由を奏上奉らくを滿ち來る潮の漲はしく聞食し諾ひ給ひて

○(渡初式) 是の何々の橋はしも去し何年の頃に架設けて在りしが荒玉の年尾長く經るまゝに水に触み雨に朽ち嵐の風に傾く許りに成りて往還の人も荷運ぶ馬も車も危き許りに損はぬるを以て此の里人等見畏み議定めて公の許を得大神等に乞祈奉りて前の年何月何日より事起したりしが今年何月何日を以てかく美しく堅固く嚴しく架渡し竟へぬ故今日を生日の足日と齋定めてその祝祭仕奉り併せて古よりの例の隨々世の長人世の遠人と稱へ崇まへらるゝ此の里の「何某」翁の家の眞名子孫等三枝の三夫婦の打揃ひて在るを珍の夫婦と推し貴みて渡初の式仕奉らむとする狀を平しく安けく聞召し給ひて

○(公設運動場開場式) 言卷も畏かれど我皇御國はしも遠祖の御代より國人の性勇猛く雄々しくして骨格固く力量勝れたらん益良夫は日本男子の葦原醜男と稱へ重みらわ我教祖神も體の丈夫を願へ體を何れ何事も體が元なりと御教垂れさせ給ひ世の諺にも健全なる精神は健全なる肉體に宿るといひならはせり日に進み月に開け行く大御代の證と萬の物事悉に繁立榮へ行くが中に理を究め智を研く學の道はしも外國に勝ることも劣るまじき迄に開け進みにたれど國民の體格のみは

之に同伴はず却りて往昔に甚く劣れるのみかは年々に悪様に低下る心地のせらるゝこそ飽かず口惜しき極なればしも天下四方の國々は交互に其國人の力を彌進めに進め智識を彌開きに開き如何で如何で他國に侮らわめや負めやと工業商業の道は更なり國防の備へに至るまで心を潜め思を凝らして一向に相競ひてあり日本男子とあらむもの如何でか徒に過してあるべきこれの何々市はも市長を始め市の重たてる人等い寄集ひてこの事の態を遠く思ひ深く慮りて今度體育場を開き種々の設備を撰り整へ市民の爲に明星の光る朝は更なり水無月の照りはたたく眞晝霜月のふり氷る夕にも稜威の男心振起して球打ち槍投げ競べなご種々の技練り習はせ身體を鍛へ正しく勇々しき心を養ひて事しあらば君の御爲國の御爲に身も棚知らに勇み競ひて高き功績と清き名を顯揚げしめんごこの土地を取擴げ荒草かり取り土引均して廣庭作りしつらへけるが此度その事竣へぬれば八十日はあれご今日を生日の足日と齋定めてその庭びらきの式仕奉るご

○(記念講演會開催奏上祭) 進み行く大御世の隆につれて世の狀の事繁く人の行も賢しく成り行けば之に伴ふ用意は一層の烈しみを要むる事にして貴きも賤しきも悉に事の條理物の區別をも心得ずては協はぬ事なるを以て今回金光教青年會何地方聯合會はその創立何年記念大會の催として今日此の市の公會堂に學術に造詣深く知る事の明らけき「何某」主を招きて講演を聞かむとする狀を奏上奉らくと御前に

○(宅神祭) この何家はしも主人某を始めて家人諸々召使に至るまで櫛の實の一つ心に眞心の道を守り行ひつゝ家の業恪しく勤め勵む隨々商業は年々に繁立榮わて里人の信用も厚く家内富足らひ饒び樂しましめ給へるは専ら大神等の恩頼に據るものと辱み奉り嬉み奉るものから今日の生日の足日に親族家族道の友垣打集ひ感謝祭仕奉る禮代の幣帛は

○(酒造祭) 味酒美和こそは上代に皇神等の醸み成す事を創め給ひ其の術を教へ給ひし珍の神酒にして上古より齋瓶を齋穿据ゑて大神に献奉り相互に酌交しては顯現蒼生の歡喜なる貴き食物にぞある故これの某家はし遠祖の頃より其業を受繼ぎて持傳來し此里に古き酒造家にして當主某は夙くより我眞の道に入信り篤く大神神の神徳を禮奉るものから年毎に造りと造る御酒を美酒の甘酒に醸み成さしめ給へと大神等に乞祈奉り來し年毎の例の隨々

○(開業記念祝祭) この何家はや主人「某」が我大道を履みしめつゝ彌先立ちて家業を勵み務むる隨々家門高く店の名廣く年々に賑び榮わ行きて今の商業を營み始めしより瑛の年を重ねて今年は何十年にもなりぬれば今日の生日の足日にそが祝祭執行はむと御前を抜ひ清めて

○是の處を嚴の齋場と祓ひ清めて荒砂の眞砂を敷きつめ忌竹差立て注連繩引渡して招奉り齋奉る掛卷も畏き

○此れの處を宇豆の磐境と祓ひ清め神籬立繁し眞榊の枝も多和々に木綿垂て掛け右左に差立て、齋奉り鎮奉る掛卷も畏き

○神舎の内外を清に祓ひ清めて御前には奥山の五百枝眞榮木の枝も登遠々に五色の帛を目も綾に取垂ていすくはし鯨の幕を長々と玉垣の内の限り張り回し

献 供 句

○禮自の幣帛は由貴の御酒餅飯の鏡を始め海川山野の種々の味物を色々に取揃へ机代に置き足はして献げ奉らくを平げく安けく聞召し諾ひ給ひて

○奉る禮自の物は御酒は瓮の上高知り瓮の腹滿並べ大野原に生ふるものは甘菜辛菜青海原に住む物は鱈の廣物鱈の狭物奥津藻菜邊津藻菜時の木の實と柑子柿栗に到るまで忌机の上も撓に置高なして捧げ奉らくを樂員が奏つる琴の調豊かに立舞ふ乙女の姿安らに聞召し諾ひ給ひて

○御饗物と御酒に御饗心ばかりの幣帛献げ奉らくを慈し愛しと聞召し受諾ひ給ひて

○信徒諸々が赤く清き眞心と遠方の海近方の山打越えて持參來し海川山野の種々の物を横山の如御前に置高成して献らくを安幣帛の足幣帛と御心も多志に聞召し諾ひ給ひて

○御前には遠近より信徒等が村肝の心盡して持參來し由貴の御酒鏡なす餅飯を始め海川山野の種々の味物を取揃へ笛吹き琴掻きなで遊の業をも仕へて神意を歡嬉し奉らくを春の海原平らに聞召し諾ひ給ひて

○御饗には荒潮の汐の八百路を大船の八十船競ひ持運び來し美し豊御酒を嚴の小甕に満多々へ五百代の小田の長田に御民等が汗掻垂れ唐臼の小臼に志良げし美し足御饗を嚴の高杯に盛上げ朝潮に浮べる鯛夕浪に躍れる鯉月清き澤邊の鶯眞萩咲く大野の鶉を始めとして甘菜辛菜沖津藻菜邊津藻菜木造の菓子御水御鹽に至るまで忌廻り清廻り取設け備へ齋員諸々手長の彌列々に手越しの彌高々に擎げ奉らくを

祈 願 句

○(月次祭) 今も往先も不肖「某」が教導く事等は太祖神の神慮に違ふ事なく教祖の神訓

に逆く事なく彌廣に彌遠に布施さしめ給ひて皇朝廷の大御惠の千重の一重をだに報い奉らしめ給ひ信徒諸々は信心して壯健て家業を務めよ君の爲なり國の爲なりとの御教の任々彌々益々家業を勤め勵みて子孫の彌次々に嚴彌木榮の如立榮えしめ給へと

○(大祭) 掛卷も畏き天皇陛下の大御壽は手長の大御壽と千代に八千代に守幸へ給ひ皇御國の大稜威は富士の高嶺の彌高に八州の海の彌廣にい照り渡らしめ給ひ我大道の御榮は國の八十國島の八十島漏るゝ事なく落つる隅なく布施さしめ給ひこれの教會所はし不肖「某」が朝夕に仕へ奉る神業を輔ひ助け給ひて教の條々説過つ事あらしめず御前に願ひと願ふ事どもは速かに聞召し諾ひ給ひこれの齋場に參來拜む信徒は更なり得參來ずて山の端々野の末に立ちて遙に御神號を稱へて拜む人等に至るまで家にも身にも枉神の枉事あらしめず子孫の末遠永く廣く厚く神幸へ守恵み給へと

○(教會所開設祭) 今ゆ後不肖「某」が仕奉る神業は大神の神慮にも副ひ日に月に開け進み行く世の状態にも相伴ふべく説き諭さしめ給ひ信徒惣代を始め役員諸々は入紐の同じ心に力を協せ將末かけて其の發展を計り信徒諸々は信神の道を神進みに進ましめ給ひて各々が家業をば勵み勤しみ皇國の爲に功しく皇朝廷に忠誠しく子孫の八十續に至るまで嚴彌木榮の如茂久榮に立榮えしめ給へと

○(國威宣揚祭) 他國の人々をして皇國の公明なる論を容れ正大なる行爲を悟らしめ給ひ又滿洲の野北支那の山の其處彼處に我皇軍人等に敵なひ挑み戦ひつる醜の匪賊共をば遣る隅なく攘ひ討退けしめ給ひて東洋は更なり天下四方の國を安國の樂しき國と成幸へ給ひ外國々との誼は舊よりも尙深く交へつゝ皇御國の大稜威を彌益々に輝かさしめ給へと

○(武運長久祈願祭) 皇御國の眞の精神を覺らず皇御軍の正しき道の行手に手向ひ逆ふ頑強なる仇人あらば劔太刀打懲し打罰めんものと日本魂彌堅き心を定め身をも生命をも捧げて氷閉す滿洲の曠野に北支那の山河に出征駐屯せる我皇軍人等又浪風荒き支那の海の北に南に行廻れる海軍人等又軍屬人々等の勇心を慈しみ嬉しみ給ひ夜晝落ちず長久に守幸へ給ひて病む事なく煩ふ事なく忠に健に仕奉らしめ給ひ皇朝廷の大稜威を天足し國足しに満足はし皇御國の大御光を天輝し國輝しに照輝かしめ給へと

○(武運長久祈願祭) 大君の醜の御楯と出征益良夫等が額に矢玉負ふとも背には負はじと言擧ぐる大和心の雄心を緩む事なく怠る事なく各も各も其の任の務に勤み締りて疫病時疫飲料水の煩に罹る事なく鐵如す身は彌健かに在らしめ給ひ皇大御國の稜威を蔑さむ醜の奴の在らむには山の尾毎に追伏せ川の瀬毎に討伏せて許すことなく懲罰め天皇命の大稜威を彌輝しに輝かし奉り皇大御國の名譽を彌擧げに擧しめ給へと

○(戰捷祈願祭) 海原は軍艦の安らけく國原は軍隊の平らけく軍人等は身健に心剛く彌勇みに勇み彌健びに健びて向ふ處靡かぬ方なく進む處服はぬ者なく戦へば勝ち攻むれば取りて速く敵なふ國を討罰め平却けて皇大朝廷の大稜威を彌赫しに赫かしめ給ひ皇大御國の大御榮を彌足ひに足はしめ給へと

○(地鎮祭) 此の新墾の家地堀廻せる溝の彌著く築立てし磐境の彌堅く雨降り風吹き地震揺るゝとも淫み傾き崩損ふ事なく平に安らに千代萬代に立榮えむ家地と夜の守日の守に守恵幸へ給へと

○(新始祭)(起工式) 今ゆ後工人等諸々に手の躓足の躓あることなく打墨繩の打違ひ取る御量の差誤りあらしめず行ふ業の麗しからむ事は打つ斧の音の事々に總ての事に障無からむ事は劉り行く木に悪しき節無きが如く行惱む事なく滞る事なく安く平けく此家造り竣功しめ給へと

○(上棟祭) 空高く上げし棟木の彌高に立添へし幣の木綿垂嚴に打掛し綱手の綱の長く久しくあらしめ給ひ取上る棟木掛渡す桁梁は吹荒ぶ風の害ひ降頻る雨の障りなく常磐に堅磐に立榮ゆる家と守り恵まひ給へと

○(新築落成祭) 築立てし柱引渡せる桁梁戸牖の錯動き鳴る事無く打堅めたる釘の緩び取葺ける葺の亂なく科戸の風の害迦具土の災なく堅磐に常磐に守り幸へ給ひ家族諸々睦み和ぎ手人召使に至るまで家の掟を過つ事なく已が勤を怠る事なく彌勤しみに勤ましめ給ひて家業は爲すがまゝに立榮えしめ給へと

○(道路開通式) 今ゆ後通り開けし此の道の破るゝ事なく架渡せる橋の損無く築上げし堤の緩み切り下げし坂路の崩れ雨風の障もあらしめす天下の公民諸々が百千の業に西に走せ東に馳ける幾許の勞きを助け給ひ萬の利益を得しめ給ひて世間の幸と成らむ事はこの道の幅の廣きよりも廣

く長く久しく有經む事はこの道の行手の長きよりも長く味通の佳通と榮行くべく守恵み幸へ給へ

○(鐵道開通式) 今ゆ後架渡せる鉄橋は搖來む地震にも傾く事なく積上げし石垣は溢るゝ水にも崩るゝ事なく敷延じ鐵道の一筋に並め列ねし枕木の平けく常磐に堅磐に守幸へ給ひてこれの何鐵道會社の社員職員を始め數多の従業員諸は己が任務の大なるを辨へ責任の重きを覺り定めし規則の條々弛緩む事なく怠る事なく彌繁りに緊り勤めしめ給ひ日毎夜毎に乗りつ降りつの旅人は驛々の彌續々に往還の夢も安らけく焚き上ぐる汽關の煙の彌高に世の生業を立榮む人の利益を擧げ得しめ給へ

○(渡初式)(開橋式) 今より往前この橋を良き橋の嚴じき橋と齎し給ひてこの橋の東の西の往通ふ諸人の往くさ來るさの便を得しめ給はんことは白すも更なり重荷積運ぶ馬車の類滿續くとも破れ崩るゝことなく霖雨降りしき洪水溢るゝとも流れ傷はるゝ事なく三枝の三夫婦の彌續に長く久しく平に安に守給ひ幸給へ

○(公設運動場開場祭) 今ゆ後これの大庭雨にも地震にも搖ぎ毀ふ事なくこの場に朝夕に來寄集ひて身體を練らむ諸人は精神は健く男々しく手の躓足の躓あらしめず骨格固く肉締り信心して壯健で家業を務めよ君の爲なり國の爲なりと神訓垂れさせ給へる事の如く己が務を斷み勤み生業を豊に立榮むしめ給ひ種々の競技に優勝し功績を擧ぐるは更なり萬の業にこの市の譽を高く輝かし御國の光に添ひ奉らしめ給へ

○(進水式奏上祭) 今ゆ後次々に艦裝ひ行かむ工の業はも過つ事なく躓く事なく船室々々の設備裝飾も美はしく齒車の徹の廻轉も圓滑に直く正しく造り成さしめ給ひ艦裝竟へて就航の日は波の通路平かに港々の泊も安らけく内海を彼方此方するは更なり八重の潮路を遙々と外國々に通ふとも積入れし種々の貨物も恙なく乗降の旅人にも乗組員にも障なく暗礁に觸れ風の荒び火の災に遭ふ事なく進來る船の行合ひもあらしめす幸く眞幸く在榮むしめ給へ

○(學校校舍改築祝祭) 引据し五百箇石礎動く事なく築建し百八十柱傾く事なく日に異に授くる教事の明らけく教子等が朝夕に勤む身の健かに廣く物の道理を辨へたる人となり國家社會の爲に有爲の士ともなりて皇御國の御光を輝かしめ給ひ親族家族諸々も己が眞名子の學事に思を深め意を込めて獎まさしめ給ひて此の學校の彌榮に榮む事は打上る煙火の光よりも灼く其の譽は軒毎に掲ぐる旗の靡きよりも高く彌遠永に守恵み幸へ給へ

○(記念講演會奏上祭) 此の講演の主旨を明かに聞取らしめ給ひ會員を始め來寄集へる諸々は各が

じし心を研き智識を廣めて日に日に生きる信心のよすがと爲さしめ給ひ且つは己が營む業の随々身を盡し力を極めて世の爲國の爲に大き功績を立つる精神の糧となさしめ給へど

○(開業祭)(宅神祭家業繁榮祈願祭等准之) 今ゆ後世人の爲又生業の爲良品を選び價を低くし町内村里の隔無く來て求むる華客の限 侮らす欺かず萬實意に親切を盡して商賣せしめ給ひ夜となく晝となく購求むる人の數は置列ねたる品々の數よりも多に時を經年を積む隨々店の名は遠く廣く陸路遙に聞か行きて家門は掲げたる看板 よりも高く茂し八桑枝の如立榮わしめ給へど

△(開業祭) 進み行く世界の情勢に後るゝ事なく營業に智深く有らしめ給ひて世間の利益ともなり又世人の便宜ともなりぬべく事成就げ功績擧げしめ給へど

△機業 織女等が手元も綾に織機の千筋の糸の亂るゝ事なく經糸の正しく緯糸の並善しく通はず梭の障る事なく箆の響の彌高に立榮わしめ給へど

△養蠶業 辭別けて白さく是の邊の里人等い古より副業として春より秋にわたり養蠶を勵み營む慣あり今し其の時節に當りぬれば朝には桑葉摘込み夕には蠶坐取替へ愛で飼ふ蠶はも時候の遠なく霖雨疾風の障なく桑の進みも安らかに齡も起るも健全に蕃殖り生育ちて白玉なす可美繭を營み美はしき糸を獲させ給へど

△製絲業 今ゆ後これの何會社の製糸の業はも打廻る梓の端無きが如く長く久しく萬代に動きなく在らしめ給ひ年々に收めむ利益は小車に掛けて繰出す絹糸の繁きが如く彌遠長に茂久榮に立榮わしめ給へど

△金物業 日に異に勤しむ此の家業は鐵の彌堅く白銀の最も清らに銅の赤き心を持って各も真心の道を辿り進みつゝ己が務に勵み勤ましめ給ひ家をも身をも守幸給ひて黄金の花の咲き匂ふ家と立榮わ皇御國の大御光に添ひ奉らしめ給へど

△製紙業 生立る大木小木の繁み榮ゆる事の如く其業を彌榮わに榮わしめ給ひ据付けし機械に廻る齒車の止まず廻れる事の如く手人諸々彌勵みに勵ましめ給ひて天聳る煙の突より吹出す煙の彌高に絶ゆる事なく立榮わしめ給ひ工場の内外は諸々の災なく夜の守り日の守りに守り幸へ給へど

△陶磁器製造業 陶磁器の原料となるべき石塊粘土の類の盡くる事なく絶ゆる事なく恵み幸へ給ひて焼き凝らす甕の煙の彌高に賣廣むる華客の筋の彌廣に産業の道を立榮わしめ給へど

△染物業 染草の藍もて絞る古き術は更なり紅の濃くも薄くも好き好きに薬品もて染分くる新しき今の法に至るまで染出す梓の糸の甚長く家業を倍み勤めしめ給ひ絞り綾成す廣幅の彌廣に店の名を廣め榮わしめ給へど

△旅館業 汽船に汽車に東の西の往來の旅人の旅路も安くこれの市に下り立つ人のいと澤にこれの旅館に出入の客の足繁く宿泊者の寝も安らかに種々の障もあらしめず和氣梅の和やかに旅の疲を癒さしめ給ひて世人の活動を助け利益を増す便宜となりぬべく立榮はじめ給へど

△酒造業 酒造兒等が日に異に勤み勵みて釀成す御酒を事那具斯惠具志に成幸へ坐して八十禍津神の枉事なく子孫の彌續々に置並る酒槽に湛わし地酒の豊かに香はしく造り仕へしめ給へど

△旅行安全 辭別けて白さく此の家の「某」い何の任務を負持ちて某國に行くと去し何日遠の旅路に朝立ちしぬれば陸路は大船に乗れるが如くいそ平けく大海原は浪風穩に鉄道を行く車の如く安らけくい行き渡りて目的港に泊しめ給ひ彼の國に在りては身は壯健に病じき事なく煩はしき事なく任務の事は味らに美はしく成就遂げ竟へしめ給ひて速けく復命さしめ給へど

△出産 辭別けて白さく此の家の長男「某」の妻何子い天地日月の恵によりて何月の頃より妊娠てありしが今し臨月に當りぬれば日足り月満ちて安く穩ひに健けき裔子を産ましめ給ひ母子諸共に身にも心にも病ましき事なく恙ましき事なく麗はしく日經ちゆかしめ給へど

△入學試験 辭別けて祈白さく此の家の長男「某」い大神等の神幸の隨々今度何中學校を卒ふる事となりぬるが將來家業を承繼がむ時進み行く世界の情勢に後るゝ事なく一層の發展を計ること現

代の青年のなすべき責務なれど嚴の雄心ふり起し家業に縁深き「某」學校に入學せんものをと寢食も忘るゝ許り勉學びてある態を慈し愛しと見し諾ひ給ひて神扶ひ助け給ひの隨々學問の條々よく覺りよく辨へしめ給ひて逝く水の淀みなく若竹のすくゝこそその願を叶へさせ給へど

結 尾 句

- 畏み畏みも白す
- 畏み畏みも祈願奉らくと白す
- 鶉なす伊這ひ回り庭雀宇頭須麻利居て畏み畏みも白す
- 鹿自物膝折伏せ鶴自物頸根突抜きて畏み畏みも白す
- 職名姓名畏み畏みも祈念奉らくと白す
- 嚴牙の中取持ちて畏み畏みも白す
- 天の彌平手拍ち上げて稱辭竟奉らくと白す
- 神壽ぎに壽ぎ稱へ豊壽ぎに壽ぎ添へて畏み畏みも白す

第五章 文 例

六二

(一) 恒例祭祝詞

祓 詞 (一)

掛巻も畏き祓戸大神等の御前遙に畏み畏みも白さく
今日はしも之の教會所の月次祭仕奉らむとす故教師を始めて參來集へる信徒諸々が
過犯しけむ罪穢の有らむをば天津菅宇の清々しく祓ひ給ひ清め給へと畏み畏みも白す

祓 詞 (二)

掛巻も畏き祓の事知食す皇神等の御前遙に畏み畏みも白さく
今日の生日の足日に是の教會所に於て年毎の例の教祖大祭を執行はんとす故猷る机
代物の穢は更なり御祭仕奉る齋主齋部を始めて遠近より參來集へる信徒諸々が不意も過
犯しけむ罪事の有らむをば打祓ふ麻の喧ぎのきやくに祓ひ得しめ清め得しめ給へと畏

み畏みも白す

元旦祭祝詞

掛巻も畏き天地金乃神の大廣前教祖生神金光大神の御前に「職名姓名」畏み畏みも白さく
新玉の年立還る今日の朝日の豊榮登に年の初の御祭仕へ奉らくと奥山に生茂る眞賢木の
枝に木綿取垂て五百枝さす小竹と共に御門に飾奉り御前を忌回り清回りつゝ由貴の御酒
に餅飯の鏡を始め天の眞名井の眞清水を千代の若水と玉琿に汲み充て種々の御食津物を
忌机の上も多和々に献らくを豊明に聞召し給ひて恐かれど天津日嗣の大御隆は天地の共
無窮に動くことなく變ることなく皇御國の大御稜威は差昇る初日の光と諸共に天輝し國
輝しに輝き渡らしめ給ひこれの教會所はも不肖「某」が朝夕に仕へ奉る御手代の神業はし
道の眞に違ふ事なく彌緊りに緊り勤めしめ給ひ大教を彌廣に押廣め彌篤く布施さしめ給
ひ信徒諸々は家にも身にも枉神の枉事なく家業は門毎に差す若松の彌繁に家門も嚴彌久
榮の如茂榮に立榮えしめ給へと恐み恐みも白す

元始祭當日祭祝詞

六三

掛卷も畏き天地金乃神の大廣前教祖生神金光大神の珍の御前に齋主「職名姓名」謹み敬ひ惶み恐みも白さく

一月三日の今日はしも遠皇祖の大御代より大皇命の御代御代受傳坐して知食し來る天津日嗣の高御座の大元始を歲首に言壽奉ると爲て言卷も畏き明治天皇の創め給ひ掟給ひし隨々大宮内にて親祭仕へさせ給ふ佳日にしあればこれの御前を齋知り嚴知り御酒御饌種々の物を献奉りて御祭仕奉らくを平らけく安らけく聞召し諾ひ給ひて天皇命の知食す天津日嗣の大御座は天地の共無窮に動くことなく變ることなく齋奉り幸奉らせ給ひ我が眞の大道は國の涯々島の岬々落つる隅なく漏るゝ事なく押廣め布施さしめ給ひ信徒諸々は信心して壯健で家業をつとめよ君の爲なり國の爲なりこの神訓の隨々家にも身にも枉神の枉事なく各々もが爲し務むる業事を日に異に繁み立榮わしめ給ひて皇大御國の大御祭を天足らし國足らしに足はしめ給へと恐み恐みも白す

祈年祭祝詞

掛卷も畏き天地金乃神の大廣前教祖生神金光大神の珍の御前に「職名姓名」畏み畏みも白さく

阿波禮食物は皆人の命の爲に天地乃神の作り與へ給ふものぞとは我教祖の御教になむ故今日はしも皇朝廷にては石上古き昔の神事と祈年祭執行はせ給ふが故に是の御前を祓ひ清めて献る禮自のものと御酒は甕の上高知り甕の腹滿並べ御饌は和稻荒稻を始めて大野原に生ふるものは甘菜辛菜青海原に住む物は鱈の廣物鱈の狹物奥津藻菜邊津藻菜に至るまで置足らはして献らくを安御饌の足御饌と平らけく安らけく聞召し給ひて百姓が手肱に水泡搔き垂り向股に泥搔寄せて取作らむ奥津御年を始めて田に畑に作りと作る物共を悪しき風荒き水に遭はせ給はず八束穂の茂穂に成幸へ初穂をば千穎八百穎に奉らしめ給へと乞祈奉らくを慈し愛しと聞召し諾給へと鹿自物膝折伏惶み畏みも白す

紀元節奉祝祭祝詞

掛卷も畏き天地金乃神大廣前教祖生神金光大神の珍の御前に「職名姓名」畏み畏みも白さく

是の二月十一日はしも言卷も畏き神日本磐余彦天皇の高く嚴しき大御徳を以て食國天の下を平定和し給ひて大和國畝傍の樞原の底津岩根に大宮柱太敷立高天原に千木高知りて

肇國知食す大禮行はせ給ひし佳日にして皇朝廷にては紀元節として大御祭仕奉らせ給ひ
國內悉に大御代を言壽ぎ奉る美日にしあればこれの大前を拂ひ清めて禮自の御酒御饌種
々の味物を横山の如置足はし献らくを菅の根のねもごろに聞召し諾ひ給ひて天津日嗣の
大御位は天地と共に久しく月日と共に明らかに皇御國の大御陵威は天の壁立極國の退立
限り彌遠に隆えますべく神幸ひ守り給へと鶴自物頸根突ぬきて恐み畏みも白す

春季皇靈祭奏上詞

掛卷も畏き天地金乃神の大廣前教祖生神金光大神の珍の御前に「職名姓名」恐み畏み白さ
く

鶯の春の最中の今日はしも掛卷も畏き大宮内にては年毎の例の随々歴代の天皇等の
神靈の御前を齋ひ奉らせ給ひ大孝を申べさせ給ふ佳日にしあればその尊き大御式に倣
ひ奉り畏き大御掟に准へ奉ると是の教會所にも故の教會長の靈を始めて所屬教徒諸
々の御靈等の御前を齋き慰め奉らむとする状を見し諾ひ給ひて靈等が現世の限り蒙りし

高き神徳の任々靈の位をも進ましめ給ひて各々が家の神氏の神と齋き奉られつゝ子孫の
爲に幸魂の眞幸く奇魂の奇びに家の柱を鎮め立て世の生業を守り助けしめ給へと御酒御
饌種々の机代物を献げ奉らくを春の海原平らに安らに聞召し給へと恐み畏みも白す

春季皇靈祭遙拜詞 (一)

掛卷も畏き皇靈殿の大前を遙に拜み奉らくと白す

春季皇靈祭遙拜詞 (二)

鳥啼く東京吳竹の千代田の大宮内に齋奉る掛卷も畏き歴代の天皇の大御靈の大前を慎み
敬ひ恐み恐みも遙に拜み奉らくと白す

神武天皇祭遙拜詞 (一)

掛卷も畏き畝傍山東北陵の大前を遙に拜み奉らくと白す

神武天皇祭遙拜詞 (二)

大和國畝火の樞原神宮に齋奉る掛卷も畏き神日本磐余彦火々出見天皇の大御前を恐み恐みも遙に拜み奉らくと白す

月次祭祝詞

掛卷も畏き天地金乃神の大廣前教祖生神金光大神の珍の御前に「職名姓名」畏み畏みも白

言擧げ奉らむは畏かれど我大祖神の神徳はし久方の天津大空涯しなく教祖の恩頼はし荒金の大地の底ひ極みなく物皆を守り恵ませ給ふが中にこれの教會所の比禮いや高に輝き渡り信徒諸々が家にも身にも大き靈顯を蒙り奉る事を嬉しみ辱なみ奉ると今日はしも月次の御祭仕へ奉りて御恵の千重の一重をだに報い奉らむとして御酒御饌種々の味物を御前に置足らはし供奉らくを平らけく安らけく聞食し諾ひ給ひて今ゆ後不肖「某」が朝夕に仕奉る教務に過あらしめずこれの教會所の御榮は奉る眞榊の常磐に堅磐に繁立榮えしめ給ひ信徒諸々が爲し務むる生業の道は爲すが任に富足らひつゝ子孫の彌次々に家門高く立榮えしめ給ひ今より例の隨々教筵開き奉れば葦鴨の伊群集へる信徒諸々聞き僻む事

なく教の正道眞細に履行ひて教祖の神慮に副ひ奉り神と皇上との大恩に應へ奉らしめ給へと鶴自物頸根突抜きて畏み畏みも白す

大祭祝詞

掛卷も畏き天地金乃神の大廣前教祖生神金光大神の珍の御前に「職名姓名」虔み敬ひ恐み惶みも白さく

今更に言擧げ奉らむは畏かれど高光る日月と共に明らけく逝く水の時の流れと悠久しき我大神等の神徳はや山の退海の涯に至るまで満足らひ輝き渡らせ給ひて日に異に廣く厚き靈驗を蒙らしめ給ふを嬉しみ奉り辱み奉る隨々今日はも年毎の例の大祭仕へ奉りて恩頼の千重の一重をだに報い奉ると神舎の内外を清に被ひ清め齋員諸散齋の致齋に忌回りつゝ豊御酒豊御饌種々の味物を忌机の上も撓に置高成し献奉らくを安幣帛の足幣帛と御心も多志に聞食し諾ひ給ひて言卷も畏かれど皇朝廷の大稜威は豊榮昇る朝日子なす彌赫しに耀き渡しめ給ひ我が眞の大道は潮の八百路の八潮路かけて至らぬ隅なく押擴め布施さしめ給ひこれの教會所にて不肖「某」が朝夕に仕へ奉る取次の神業はも大神等の神扶

ひ輔け給ひの任々教祖生神の御取次を直仰ぎに仰ぎつゝ大祖神の神比禮を愈々顯著に輝き顯現さしめ給ひ信徒諸々は何事にも眞心の誠を貫徹して各々が家業を恪しく勤め子孫蕃息り家門廣く祖の名を擧げ氏の名をも現はし金光教信者とある眞の救済を享受け以て神と皇上との大恩に應へ奉らしめ給へと鹿自物膝折伏せ恐み惶みも稱辭竟奉らくと白す

天長節奉祝祭祝詞

掛卷も畏き天地金乃神の大廣前教祖生神金光大神の珍の御前に「職名姓名」畏み畏みも白さく

八十日日はあれど今日の生日の足日はしも明御神と大八洲國知食す天皇の生出坐しゝ愛たき美日と百敷の大宮内を始めて天下四方の國は青雲の靄く極み白雲の向伏す限り落つる事なく漏るゝ事なく言壽ぎ祝ひ奉る佳日にしあれば大神等の御前に御酒御饌種々の味物を置足はし信徒諸々御前に集ひて御祭仕奉らくを平らけく安らけく赤丹の穂に聞食し諾ひ給ひて聖壽は手長の大御壽と白玉の大御白髮坐し赤玉の御赤らび坐しつゝ彌還若にみ若え坐し皇御國の大稜威は富士の高嶺の彌高に八洲の海の彌廣に伊照り渡らしめ給へ

と畏み畏みも白す

獨立記念祭祝詞

掛卷も畏き天地金乃神の大廣前教祖生神金光大神の珍の御前に「職名姓名」畏み畏みも白さく

阿波禮此方は參つて尋ねる所がなかつたと神語り給ひし事の如く新肝のあられぬ固き御心行を積せ給ひて遂に神は我本體の大祖にして信心は親に孝行するも同じ事と論させ給ひ家業出精五穀成就牛馬に至るまで身の上の事何なりと實意を以て願へと神と人との通路を開かせ給ひてより大神等の御神徳は彌耀きに耀き眞の道の教事は吳竹の世の進み行く随々内に整ひ外に擴りて去にし明治三十三年と言ふこの月の今日はしも神意のまゝに檜の實の獨立つべき教派となり今は教の旗手高らかに打靡きて海の外の國々に至る迄金光の御名の轟き渡るに至りしは實に畏くも忝なき極みになん故今日はしもそが記念の神祝の御祭仕へ奉ると御前に御酒御饌種々の味物を置高成し獻奉らくを平らけく安らけく聞食し諾ひ給ひて教祖神が御教を立て給ひ開き給ひし神意に准據りて掟給ひ定め給へる

教派の紀綱は神務教務の差別なく大元社出社の區別なく梓弓本末かけて張り緊り教師を始め信徒諸々は入紐の同じ心に直く厳しく眞の大道を踐み行ひ末の末まで御取次を仰ぎ乞祈みつゝ金光の教子とある神幸を享受け國家社會の進運に寄與し以て天皇命の赤子とある實を擧げ得しめ給へと畏み畏みも白す

大被 奏 上 詞

掛卷も畏き天地金乃神の大廣前教祖生神金光大神の珍の御前に「職名姓名」畏み畏みも白

年毎に執行ひ來し古事の例の随々今年六月（十二月）の晦日の夕日の降の大被にこれの教會所に所屬の教師を初めて教信徒諸々を御前に集へしめ被物を置座に置足らはして被事仕へ奉らくを見し諾ひ給ひて今日より始めて罪といふ罪は残る事なく漏るゝ隅なく瀬織津姫のいと速く佐須良媛のさすらひ失はしめ給ひて各々が家にも身にも要なく事なく生業をも彌進めに進ましめ給へと種々の机代物を獻げ奉りて畏み畏みも白す

大 被 被 詞

是の齋場に集侍はれる教信徒諸々聞食せと宣る言卷も畏かれど罪穢は我心で犯すこともあり被ふ事もありとの御教の随々教信徒諸々が過犯しけむ雑々の罪事を千早振る神代の古き神事もてこれの六月（十二月）の晦日の大被に被ひ清むる事の由を諸々聞食めせと宣る

五穀豊穰祈願祭祝詞

掛卷も畏き天地金乃神の大廣前教祖生神金光大神の珍の御前に「職名姓名」恐み恐みも白

天の下の百姓が人の生命の爲に大祖神の依し給ひ恵み給へる食物と田に畠に作りと作る五種の穀物を八束穂の嚴穂に成し幸へ給へと年毎に乞祈奉る夏の御祭を今日の生日の足日に仕へ奉ると御前に御酒に御水堅鹽を始め海川山野の種々の味物を横山の如置き高成して献奉らくを慈し愛しと聞召し諾ひ給ひて是の教會所に所屬へる信徒等の勞き作る田畑は更なり大倭日高見國を押しなべて照りと照續かむ旱天に沸出てむ昆虫の殃なく降りと降り布かむ雨に生出てむ羽虫の害ひなく田津物畠津物を始めて山縣に蒔ける青菜の類

に至るまで照枯さむ事なく伊降り腐さむ事なく瑞穂國の名に負ふ豊けく饒はしき年と榮えしむべく夜の守日の守に守り恵み幸へ給へと恐み惶みも白す

教祖大祭

掛卷も畏き天地金乃神の大廣前教祖生神金光大神の珍の御前に「職名姓名」謹み敬ひ畏み畏みも白さく

言擧げ奉らんは畏かれど我教祖神はしも信心する人は何事にも眞心になれよと神教垂れさせ給ひし神慮の随々あるは口性なき里人より信心文と嘲笑らえ或は賢らする世間の人達より變人よと愚笑はえつゝも眞心の一念を貫徹して大祖神に仕へ又人と交りつゝ萬の事とり行はせ給ひてしより現身ながら彌高き神徳を受け彌篤き人徳を得させ給ひやがては大祖神より直々に御裁傳を受け憂瀬に陥ちて病み苦しみ迷ひ惱める氏子共に大靈験を取次ぎ數多の畏き御教を垂れさせ給ひて最早此方世に在らずともこの道は失はれざるべしと宣ひ言ち金光大神は形が無うなつたら來て呉れと云ふ所へ行つてやると仰せ給ひて明治十六年十月十日安藝守山明け行く空にぞ神上り上りましぬるかくてこれの某教

會所はし不肖「某」いおふけ無くも教祖神の御手代りと取次ぎの神事仕へ奉りてしより前に立ち後に添ひつゝ扶ひ輔け給ふ生神の恩頼の随々奇しく妙なる靈驗蒙る信徒等の彌増しに増し教會所の基礎も彌堅く發展え行かしめ給へるは實に辱き極みになむ故其の恩頼に禮び奉り神徳に應へ奉ると今日を生日の足日と齋ひ定めて年毎の例の大祭仕へ奉る禮自の幣帛は由貴の御酒に餅飯の鏡を始め海川山野の種々の味物を取揃へ机代に置足はして献奉り笛吹き琴彈き遊の業をも仕へて神慮を歡樂し奉らくを平らけく安らけく聞食し諾ひ給ひて言卷も畏かれど皇朝廷の大稜威は高光る日月と共に輝き渡らしめ給ひ皇御國の大御隆は大内山松の緑の常磐堅磐に立榮えしめ給ひて世界を擧げて非常時の眞中に在る今にして東洋の鎮とある實を顯現さしめ給ひ又我が眞の大道は天地を貫きます教祖神の大神徳をそのまゝに繼承ぎて渝らせ給ふことなき大教會所大廣前の神比禮の隨々國の内外を問はず彌廣に彌遠に布擴らしめ給ひこれの教會所はし不肖「某」が日に異に爲し務むる取次の神業に過あらしめず廣前の神比禮高く厳しく輝き渡らしめ給ひ今日の御祭を待ち得て祭場に庭雀なすうすすまれる信徒諸々が家にも身にも喪なく事なく神幸

蒙らしめ給ひ將得參來ずて海山かけて遙に拜み奉る信徒等に至るまで他し道に惑ふ事なく赤き心の眞心に勤め締りて家内饒に富足らひ生子は神域の松の廣く蕃息り立榮えしめ給へと鶴自物頸根突抜て恐み恐みも白す

神嘗祭當日祭祝詞

掛卷も畏き天地金乃神の大廣前教祖生神金光大神の貴の御前に「職名姓名」惶み惶みも白

さく

十月十七日の今日はしも言擧げ奉るも畏き天皇陛下の天命以て神風の伊勢國拆鈴の五十鈴の川上に神ながら鎮座す天照皇大神の大御前又度會の山田原に稱辭竟奉る豊受大神の大御前に神嘗の大幣帛奉出し給ふと大御使遣し大宮内にしては遙に拜み給ひ且つ賢所の大前に親祭仕へさせ給ふ佳日にして天下の公民諸々も遙に大神の宮居を拜み己が自志大き恩頼を恐み奉り仰ぎ奉る美日にしあればこれの大前を忌知り嚴知り大御酒大御饌種種の味物を横山成置高成して獻奉らくを平らけく安らけく聞食し諾ひ給ひて皇大御代を手長の御代の嚴御代と守幸はへ給ひ天下の公民諸々を喪なく事なく長く平けく守り恵ま

せ給ひて皇大御國を彌浦安に伊勢海寄る重波の立榮えしめ給ひ皇大御稜威を彌高々に神路山登る朝日の照耀かしめ給へと恐み恐みも白す

明治節奉祝祭祝詞

掛卷も畏き天地金乃神の大廣前教祖生神金光大神の珍の御前に「職名姓名」虔み敬ひ畏み畏みも白さく

言卷も畏き遠皇祖の大御代より天皇命の御代御代受傳へ來坐せる序の隨々天津日嗣の高御座に坐して食國天下の大御業を恢給ひ皇大御國の大御隆を進め給ひし明治天皇の大御徳を尊み奉り嚴しき大御代を仰ぎ奉ると御在世當時天長節として壽ぎ奉り親しみ奉りし十一月三日を明治節と齋ひ定め給へる今日の佳日の佳辰に是の大前を忌廻り清廻り御酒御饌種々の物を捧奉りて稱辭竟奉らくを平らけく安らけく聞食して畏かれど教祖神が「體を作れ何事も體が元なり」と神教を垂れさせ給へる神慮に神ながら合致て國內を擧げて今日を體育日として各が自志體の丈夫をはかる事に意を用ゐる力を盡すをあな殊勝と見し諾ひ給ひて心は忠實に身は健康に各々その職務に恪勤みつゝ明治の新代の大御蹟を

彌繼々に恢弘めしめ給ひて皇大朝廷の大稜威を天の壁立極國の退立限彌高に伊照り輝か
しめ給ひ我が道の教信徒は言ふも更なり天下の國民諸々に至るまで五十榎八桑枝の如立
榮えしめ給へと恐み恐みも白す

新嘗祭當日祭祝詞

掛卷も畏き天地金乃神の大廣前教祖神金光大神の珍の御前に「職名姓名」謹み敬ひ惶み恐
みも白さく

今日の生日の足日はしも言卷も畏き天皇命が天津御食の長御食の遠御食と齋田の御年を
新嘗の相嘗に聞食さむとして大宮内にて新嘗祭執行はせ給ふ美日にしあればこれの大前
に大神の依し給ひ恵み給へる八束穗の秋の初穂を御酒御食に仕奉り和稻荒稻を千穎八百
穎に献げ奉り山野の物は甘菜辛菜海川の物は鱈の廣物鱈の狭物奥津藻菜邊津藻菜に至る
まで置足はして献奉り報賽の御祭仕奉らくを豊明に聞食し諾ひ給ひて天皇命の大御代を
嚴御代の足御代と萬千秋の長五百秋に平らけく安らけく齋奉り幸へ奉らせ給ひ教信徒一
同は更なり天下の國民悉に家をも身をも守り幸へ各々が子孫の八十續に至るまで嚴彌

木榮の如立榮えしめ給へと恐み恐みも白す

大正天皇祭當日祭祝詞

掛卷も畏き天地金乃神の大廣前教祖生神金光大神の珍の御前に「職名姓名」畏み畏みも白
さく

師走の末の五日の今日はしも言卷も畏き大正天皇の御祭日にしあれば其の御聖徳を畏み
奉り辱み奉る隨々此れの大前を齋知り嚴知り御前に豊御酒豊御饌種々の御食津物を捧げ
奉り信徒諸々水鳥のい群集ひて拜み奉らくを平らけく安らけく聞召し諾ひ給ひて畏かれ
ど明治天皇が王政を復古し智識を廣く世界に求めて専ら國利と民福とを念ほし召して
萬政給へりし叡慮と其の大御業とを正しく受繼がして直く傳へ末廣に恢弘め給ひし先
天皇の聖旨とを大御心として萬機を禱します今上天皇の大稜威を彌益々に打耀かし四
方の國々に照り渡らめし給ひ大御代を手長の御代の嚴御代と堅磐に常磐に守り給ひ幸へ
給へと恐み惶みも白す

大正天皇祭遙拜詞

掛卷も畏き多摩陵の大前を遙に拜み奉らくと白す

(二) 臨時祭祝詞

誕生命名式祝詞

掛卷も畏き天地金乃神の大廣前教祖生神金光大神の珍の御前に「職名姓名」畏み畏みも白さく
年頃これの教會所に參來拜み真心の道に志篤き何某主の妻何子いかねて懐妊てありしが教祖神
の御理解の随々神の氏子が我が胎内に宿りしものと厳しく重み念ほしつゝ平らけく安らけく産出で
む事を祈願奉りてありしに神随守り幸へ給ひて今月何日障る事なく安々と産出でしめ給ひぬ故今日
の生日の足日に名をば何々と負せぬる事を奏上奉ると御前に御酒御饌種々の味物を献げて拜み奉ら
くを相諾ひ開食し給ひて今ゆ後母子共々日経ちも良敷く生の緒長く玉の緒久しく山松の千歳をかけ
て縁加はる事の如く若竹の直く正しく生立たしめ給ひ成人ては君の御爲國の御爲に功なき名を掲げ
家門高く氏の名香はしく立榮おしめ給へと畏み畏みも白す

勸學祭祝詞

掛卷も畏き天地金乃神の大廣前教祖生神金光大神の珍の御前に「職名姓名」惶み畏みも白
さく
之の教會所所屬信徒何某の何男某を始めて幾人の者等い今回小學校に入るべき歳とな
りぬるを以て今日の生日の足日にその學齡兒を始め保護者等諸々御前に參來集ひて此の
年月喪なく事なく生ひ育ちし恩頼を嬉み辱み奉り來らむ四月より學校に入學て後の神
幸を更に乞願奉ると御酒御饌種々の味物を献奉りて御祭仕奉らくを慈し愛しと聞召し諾
ひ給ひて入學兒童等が幼心にも真心の道を眞似び辿りて行正しく身は健全に學業には智
深く學の師の教の随々能く從ひ能く守りて國に定め教育全く卒へしめ給へと畏み畏み
も白す

辭別けて白さく同信徒等の内何某々々等何人は今回小學校を卒へて何中學校に又何某は
中學校を卒へて更に何學校に入學し學の道の奥處を究め世に立つ基礎を固めむと勉勵て
ある事の狀をあなうむがしと見し諾ひ給ひて各がじゝその志をとげしめ給ひ彌深き學徳
を積み得させ給へと畏み畏みも白す

成年式祝詞

掛卷も畏き天地金乃神の大廣前教祖生神金光大神の珍の御前に「職名姓名」畏み畏みも白さく
 石上古き昔の習慣と近き世まで執行ひ來し益良男子の加冠の禮典に准據ひて今の世にては二十才
 に滿つる年齢を以て丁年と定め成人の列に入らしむる掟にぞある故これの教會所々屬の信徒
 何某い今年の今月の今日こそその年のその日に當りぬれば今日を生日の足日と齋定めて成年式典
 仕奉るご御前を忌知り嚴知り御酒御饌種々の味物を忌机の上も撓に献奉らくを平らけく安らけく聞
 食し諾ひ給ひて今ゆ後某が身體は壯健に福く眞幸く在經しめ給ひ國法をよく守り社會の掟によく遵
 ひつゝ何事にも眞心になれよこの神訓の隨々家業は更なり萬の業を恪しく勤めて忠孝の大道
 を身に具現さしめ給へと畏み畏みも白す

入營奏上詞

掛卷も畏き天地金乃神の大廣前教祖生神金光大神の珍の御前に「職名姓名」畏み畏みも白
 さく

大神等の廣く厚き恩頼を蒙りし何某い今回國民の義務として軍隊に入る可き壯丁の擇び
 に漏れずして言卷も畏き大元帥陛下が御肱とも御股とも思ほし食すと詔らせ給ひし軍人
 の列に加へられ陸(海)軍何兵何聯隊に入ることとなりぬ故その事の由を奏上奉ると今日
 を生日の足日と齋定めて御前を忌回り清回り御酒御饌種々の味物を献奉りて拜み奉らく
 を平らけく安らけく聞食し諾ひ給ひて某が心は忠誠しく身は健康に軍務に勵ましめ給
 ひ戰場に出征ては山行かば草生屍海行かば水漬屍と古の人の立てし言立に恥る事なく任
 の隨々進みに進み健びに健びて千名の五百名に稱はしき勳功を樹てしめ給ひ家に残れる
 父母は更なり兄弟等諸々より始めて家業に至るまで心にかゝる禍事なく安く穩に賑び
 榮えしめ給ひて現役を終へて歸來む日を待ち迎へしめ給へと畏み畏みも乞願奉らくと白
 す

歸休奏上詞

掛卷も畏き天地金乃神の大廣前教祖生神金光大神の珍の御前に「職名姓名」畏み畏みも白
 さく

これの教會所々屬信徒何某い往し何年何月より兵役の徴し上げらえ何兵何聯隊(何
 鎮守府)に參向ひてしより大君の醜の御楯と勇み立ち五ヶ條の勅諭の旨を心の守と時の

間も忘るゝ事なく持ち頂き軍紀の随々夜晝となく身も棚知らに赤き心の誠心もて軍務に勵みてありし程に年月は早船の早くも過ぎて定め期限満ち御暇賜り恙なく故郷に歸り來にけりかく眞幸く歸り來しは全く大神等の廣き厚き御恵に依る事と辱み奉り禮び奉るものから今日の生日の足日に御前を祓ひ清めて御酒御饌種々の味物を献奉らくを平らけく安らけく聞食し諾ひ給ひて今ゆ後愈々益々眞心の道を辿り進みつゝ心は直く身は壯健に家業をいそしく勤めし給ひ郷にありては忠良なる臣民となりと仰せ賜ひし勅諭の大御旨に副ひ奉るべく神幸へに幸へ給へと畏み畏みも白す

結婚式 祓詞

掛卷も畏き祓戸大神等の御前遙に畏み畏みも白さく
 今日生日の足日に是の教會所の教子何某い何の家長女某子を迎へて結婚の禮式仕へ奉らむとす故新婚者を始めて御前に列れる親族家族諸々が過犯しけむ事どもの有らむをば科戸の風の祓ひ給ひ清め給へと畏み畏みも白す

結婚式 祝詞

是の處を嚴の神床と祓ひ清めて招奉り座奉る掛卷も畏き天地金乃神の大廣前教祖生神金光大神の珍の御前に「職名姓名」畏み畏みも白さく
 大神等の奇びに妙なる神縁の随々是の何家の長男某何家の長女某を迎へて妹背の契をなさむと親族家族諸々御前に並居列り華燭の禮典仕奉る禮代の幣帛は由貴の御酒御饌を始めて海川山野の種々の味物を机代に置足らはし献奉らくを平らけく安らけく聞食し諾ひ給ひて夫妻の契は咲く花の移らふ事なく高砂の松の相生に信心は家内に不和のなきが元なりとの御神訓を心に銘り身に行ひ家内歡樂に陸合ひつゝ將來爲務むる家業は世々祖等の御心其儘に時勢の變遷に後るゝことなく勵み勤み産出でむ愛子も蕃息りつゝ家門廣く親の名高く擧げしめ給へと乞祈奉らくを夫妻諸共に打上ぐる八平手の音高々に聞食せと畏み畏みも白す

教師結婚式 祝詞

掛卷も畏き天地金乃神の大廣前教祖生神金光大神の御前に「職名姓名」畏み畏みも白さく
 今日生日の足日に「職名姓名」の媒酌にて是の教會所副教會長「職名姓名」い某教會所々屬「職名

姓名」と婚姻の禮典執行はむご請はしめ随々「某」齋主として細録の中取りつゝ妹背の契は彌堅く家門の榮は彌長久にご誓ひて供奉る種々の禮代を慈し愛しと聞食し諾ひ給ひて信心は家内に不和の無きが元なりこの御教の随々家内安く平らけく將來爲務むる教事は大祖神の神慮にも協ひ教祖の御神訓にも違ふ事なく過つ事なく勤しむ務めて教師とある本分を勵み進まじめ給ひ産出でむ愛子も蕃息りつゝ月々に賑ひ年々に榮わて教會所の繼嗣堅く千歳の松の齡久しく在らしめ給へご畏み畏みも白す

教書

新夫 何 某

新婦 何 某

汝等深遠なる神慮の随々天地の像に則り茲に妹背の契を結ぶ夫れ夫婦の道は天地自然の大理に基づく生成化育の本源にして人倫の基幹たり宜しく生神の教示に遵ひ敬愛互助して苦樂を共にし父祖に孝養を盡し子孫を教養して偕老の壽を全うし業務に勵精して家門の榮を圖り以て國家社會の進運に寄與し臣子の分を

竭さむことを致むべし

年 月 日

金光教 教會長

職級 何 某

結婚式誓詞

掛卷も畏き天地金乃神の大廣前教祖生神金光大神の御前に「職名姓名」新婚者二人に代りて畏み畏みも白さく
 今しも大前にてかく盡結せし上は御教の随々力を協へ心を一せ父祖には孝養を盡し家の業には力を致し己が本分を勵み勤しむ仕奉らくと誓ひ奉り契り奉らくを聞召し諾ひ給ひて隨神守り幸へ給へと畏み畏みも白す

養子縁組式祝詞

掛卷も畏き天地金乃神の大廣前教祖生神金光大神の珍の御前に「職名姓名」恐み恐みも白さく
 是の何某い其の後を繼がすべき生の子の無きが故に今回何某が媒人にて何國何郡何村に住める何某

の何男某を乞請けて親子の契を結固め家督を續がしめんご八十日はあれど今日の生日の足日に某細矛の中執持ちて大前に御酒御饌を始めて海川山野の種々の味物を献奉りてその禮典仕奉る状を平らけく安らけく聞召し諾ひ給ひて今ゆ後千代に八千代に生涯相睦び相翼けて恐かれご信心は家内に不和の無きが元なりこの御神訓の随々父祖の意を心として家業を繼ぎ家の基を固め氏の名をも擧げしめ給ひて櫻の木の彌次々に遠永く世々の御祖の御祭美しく仕奉らしめ給へご畏み畏みも白す

養子縁組式教書

教書

父 何 某
養男(女) 何 某

卿等深遠なる神徳の随々茲に親子の契を結ぶ夫れ家は之を父祖に承けて祖靈を祀祭し父母に孝養を竭し子弟を慈育し以て之を子孫に傳ふる道徳生活の搖籃にして親子の情は實にその樞軸たり孝悌友和の道こゝに實踐せられ上下の別長幼の序自ら明らかに敬愛信賴の義其の間に長養さる我が教祖の教示し給ふところ亦こゝに存す卿等克くこの義を悟りこの理

を辨へ相依り相扶けて報效の至誠を業務の勵精と家門の繁榮とに具現し以て國運の隆昌發展に寄與し神と皇上との大恩に報い奉らむことを期せよ

年 月 日

金光教

教會長

職 級

何

某

養子縁組式誓詞

掛卷も畏き天地金乃神の大廣前教祖生神金光大神の珍の御前に何某等親子に代りて「姓名」畏み畏みも白さく

大神等の奇く尊き神縁の随々何某を此の某家の相續人と定めてかく親子の契を結びし上は上下の位を紊すことなく苟且にも親子の道に違背く事なく力を協せ心を一つにして家業を恪しく勤め末々親にかゝり子にかゝりあいよかけよで立行くこの御教の随々相睦み相輔けて家門高く廣く祖先の名をも擧ぐべく勉め勵まむと誓約ひ奉らくを平らけく安らけく聞食し給ひて隨神守り幸へ給へご畏み畏みも白す

銀婚式(金婚式)祝詞

掛卷も畏き天地金乃神の大廣前教祖生神金光大神の珍の御前に「職名姓名」恐み惶みも白さく

此の何教會所々屬の信徒何某い去に何年何月何日に妻何子を婚取りて妹背の契を結びしより大神達の高き貴き恩頼に依りて心安く樂しく睦び語りひつゝ家業を勤み勉め 璞の年月を經行く隨々愛しき眞名子共を次々に生出でしめ給へるのみかは孫共に至るまで茂り蕃息らしめ給ひ家門も彌益々に立榮わ行きて今年は早くも日々並めて二十五年(百不足五十年)といふ年を迎ふる事となりぬるを嬉しみ奉り辱み奉りて今日の生日の足日に子孫親族家族又相識れる道の友垣を招き集へて銀(金)婚式の御祭を執行ふご御前を祓ひ清めて奉る禮自の幣帛は由貴の御酒鏡の餅飯を始めて海川山野の種々の味物を撰調へ御前に置高成して献奉らくを平らけく安らけく赤丹の穂に聞召し給ひて今ゆ後幸人等二人の身にも疾しき事なく恙しき事なく高砂相生の松の緑の彌深く吳竹の世の長人と常磐に堅磐に立榮わしめ給ひて子孫は樛の木の彌續に延葛の彌遠永に蕃息りつゝ家の名不汚家内平穩に販び樂しましめ給へど畏み畏みも白す

年賀祭祝詞

掛卷も畏き天地金乃神の大廣前教祖生神金光大神の珍の御前に「職名姓名」畏み畏み白さく
 吳竹の憂節繁く朝には夕を計り難く老少定めなき人の世を常なき世と云ひこのひと道は貴きも賤きも遂に脱れ得ぬことにしてこそを現身の定めとは云ふめれど金光大神の道は無常の風が時を嫌ふぞと

御理解給ひし御教事違はず是の何某が現世に生出來しより 璞の年まねく我大道を辿りつゝ在經る間に大難は小難小難は無難に守り恵み幸はへ給ひて家門高く子孫安らかに今年はも六十一歳をなむ迎へにける故空蟬の世の習慣によりて今日はもそが祝筵開かむと御前を忌回り清回り禮自の幣帛は由貴の御酒鏡の餅飯を始めて種々の味物を百取りの机代に置高成して献奉り常磐なる榊葉に白髪つく木綿取垂て報賽の御祭仕奉らくを聞食し諾ひ給ひて今ゆ後某が身は猶も壯健けく生の緒長く氏の名廣く家業繁に立榮ゆべく守り給ひ恵み給へど畏み畏みも白す

教會所地鎮祭(定礎式)祝詞

是の所を嚴の磐境と拂ひ清めて忌竹差立注連繩引廻し招奉り座奉る掛卷も畏き天地金乃神の大廣前教祖生神金光大神の珍の御前に「職名姓名」畏み畏みも白さく
 言卷も畏かれど我大神等の高く尊き恩頼の隨々之を教會所の神比禮日に顯れ月に輝き參來拜む信徒等の年々に蕃息り行くを以て廣前の彌廣に高殿の彌高に教會所を築建てむと今回はの所を朝日の日照り夕日の日差す美所と齋ひ定め忌鎌以て荒草刈拂ひ忌鎌以て木根攀開き石切取り土搔き均して今日の生日の足日に地鎮祭執行ふ禮自の物と御酒御

九二二
饌種々の味物を献奉り乞祈白す事の狀を熟らに聞召し給ひて踏み平す土の平らけく曳据
うる石の彌堅く雨降り風吹き地震揺るゝとも動き傾むき崩え損ふ事なく常磐に堅磐に守
り幸へ給へと恐み惶みも白す

教會所新始祭（起工式）祝詞

是の美し神地に注連繩引廻し荒砂の眞砂を以て敷き清め神籬立繁し招奉り座奉る掛卷も
畏き天地金乃神の大廣前教祖生神金光大神の珍の御前に「職名姓名」畏み畏みも白さく
是の某教會所の新築の工事はしも去し某月某日の美日に地鎮祭事美はしく仕奉りてし
より大神等の神慮にも愛て給ひ諾ひ給ひけむいささ群竹いささかも淀む事なく滞る事な
く荒金の是の大地平らけく置並る百千の石据ゑ動かず傾かず平し終へぬるを以て奥山の
大狭小狭に生立ちし大木小木の本末打切りて中間を持參來番匠を始め諸々の工人等を
召集へ今日を生日の足日と齋定めて手斧始めの御祭仕奉る禮代と御酒御饌種々の味物を
供へ奉らくを平らけく安らけく諾ひ給ひて手人諸々が仕奉る工事は手置帆負置御量に
狂ひなく彦狹知引墨曲に歪なく勤しみ務めて木築の柱彌堅く揚ぐる棟門彌高く打墨繩の
速けく竣工しめ給へと畏み畏みも白す

教會所上棟祭祝詞

是の小床に齋奉り鎮奉る掛卷も畏き天地金乃神の大廣前教祖生神金光大神の珍の御前に
「職名姓名」畏み畏みも白さく
畏しや我道の道開きは實にや貴き随神なるかも御手代の取次は生神の現しき神業なるか
も去し某月某日には是の教會所新築の工事起してしより大神等の奇しく妙なる御配慮を或
は御用材の購入に覗ひ或は手人等の立働の上に畏みつゝ信徒諸々が赤き心の眞心を本津
柱と築き立て日々に蒙る大き靈験を桁梁と引き渡して營み仕奉り來し程に今日しも珍の
棟木を取揚げむと朝日の豊榮登に棟上の御祭執行ふ禮自の物と由貴の御酒鏡の餅飯を始
めて種々味物を御前に置足はして献奉らくを打槌の音のけさやかに聞召し諾ひ給ひて不
慮も過犯しけむ罪穢のあらむをば神許しに許し給ひ神祓ひに祓ひ清め給ひて尙も畏き神
慮のまに／＼天の御陰日の御陰と穩り座すべき之の神舎千年八千年揺るゝ事なく動く事
なく手人諸々に手の躓足の躓あらしめず引揚ぐる綱手の繩の一筋に緊り勤めて速かに大

殿造り成し竣へしめ給へと畏み畏みも白す

新殿清祓詞

掛卷も畏き祓戸皇神等の御前遙に畏み畏みも白さく
曩に我が大神等に乞祈奉りて造營事始めにし是れの教會所新築の工事はし大神等の高く
尊き御神徳の随々差がふ事なく過つ事なく大殿造り悉に竣工故今日の生日の足日に
遷座祭(奉齋祭)仕奉らむとして其の清めの祓執行ひ奉らくを聞食し諾ひ給ひて諸々の
工人等が不慮不識過穢せる罪事のあらむをば落つる事なく漏るゝ隅なく幣の木綿風さや
さやに祓ひ給ひ清め給へと畏み畏みも白す

遷座舊殿祭祝詞

掛卷も畏き天地金乃神の大廣前教祖生神金光大神の珍の御前に「職名姓名」畏み畏みも白
さく

言卷は畏かれど我大神等の恩頼はし久方の天と高く輝り渡り荒金の地と深く布き到り我
が眞の大道の次々に開け進み行く随々是の教會所はし不肖某が日に異に御手代仕へ奉る

間に靈驗蒙る信徒等の彌益に蕃息行くを以て廣前の彌廣に高殿の彌高に改め造り仕奉ら
むと往し某年某月某日より某地を美處と齋定めて新殿作り仕奉り來しを此の某年某月某
日に到りて瑞の殿舎神ながら厳しく麗はしく築き造り仕へ奉り畢へぬ故こゝを以て今日
の今宵の吉日の吉辰に恐み惶みも遷奉り渡坐奉らくと齋主齋員諸々忌廻り清廻りつゝ御
尾前仕へて遷し奉り信徒諸々神幸む道の行手に犬白物伏し拜みつゝ渡奉らくを阿奈うむ
がしと聞食し給ひて安らけく靜けく遷幸ませと禮代の御酒御饌種々の味物を御前に置高
成し獻奉りて畏み畏みも白す

遷座新殿祭祝詞(落成祝祭祝詞)

掛卷も畏き天地金乃神の大廣前教祖生神金光大神の珍の御前に「職名姓名」畏み畏みも白
さく

畏かれど本教の教會所は氏子の願ひ禮場所として大祖神が教祖神に神許し神依し給へり
し嚴の齋場にして信徒諸々は生神の教諭の随々照降の區別なく常住に參來集ひて眞の道
を辿り進まむよすがと信心の稽古を勵み恪む珍の廣前にぞある故是の教會所はし去

し某年某月より教舎を廣らに新らしく築き仕奉ると其の工事を起してしより夜となく晝となく神幸へ守り給ふ奇しく妙なる神比禮の随々今し其の工事竟へぬれば新殿祝仕奉ると神殿の内外を忌知り嚴知り坐奉り齋奉りて禮自の物と由貴の御酒鏡の餅を始めて海川山野の種々の味物を取揃へ忌机の上も多和々に置足らはし笛吹き琴彈き遊の業をも仕へて神慮を歡がし奉らくを甘らに安らに聞召し諾ひ給ひて不慮も過犯しけむ事等のあらむをば見直し聞直しに神許し神解かせ給ひ築固めし礎堅く科戸の風の害加具土の荒びなく打堅めたる釘の緩び建上げし柱引渡せる桁梁戸牖の錯動き鳴る事なく堅磐に常磐に守り幸へ給ひ今ゆ後金光の御名の四方八隅に轟くべく恩頼の彌増しに道の眞の彌廣に押弘め布施さしめ給ひ信徒總代を始め役員諸々は入紐の同心に力を協せ斯道の爲に其の發展を謀り信徒諸々は眞心を凝らし信心の道を彌進めに進め子孫の末遠永く教傳へて彌益々に高き神徳を仰がしめ給へと鶴自物頸根突き抜きて畏み畏みも白す

教會所開設祝祭祝詞

掛卷も畏き天地金乃神の大廣前教祖生神金光大神の珍の御前に「職名姓名」畏み畏みも白

今更に言擧げ奉らむは畏かれど我が眞の道の教事はし天地乃神と同根に坐ます教祖生神の恩頼と慾を離れ私を虚うして一向に神前に仕へ奉らす大教會所神前御奉仕の神比禮とに依りて年々に拓け月々に進み行くが中にこれの某の里に住める信徒等が御教を畏み奉り神比禮を仰ぎ奉るとひたぶるに乞祈奉るものから一昨年春のころよりこれの家居を布教所として某い負氣なくも御手代りの取次仕奉りつゝありへし間にかねて差出しつる願書の随々今回地方廳の認可をも得たりければ今は朝霧の晴れたる教會所として教旗高く掲げ奉ることゝなりぬるを以て今日の生日の足日にその祝祭執行ふ禮自のものは由貴の御酒鏡の餅飯を始めて此の里に生出てし甘菜辛菜種々の御饗物を忌机の上も撓に置高成して献奉らくを熟らに安らに聞召し諾ひ給ひて今ゆ後不肖「某」が日に異に爲し務むる教導は神慮に違ふ事なく神訓の筋を過つことなく美教の正道を彌廣に彌遠に布き擴めしめ給ひ信徒諸々は眞心の誠を心に懸け身に行ひ家門高く氏の名芳はしく御國の爲にも

世の爲にも金光の信徒とある譽を輝かしむべく大き靈驗を蒙らしめ給へと鹿自物膝折伏
せ畏み畏みも白す

教會所開設五十年祝祭祝詞

掛卷も畏き天地金乃神の大廣前教祖生神金光大神の珍の御前に「職名姓名」虔み敬ひ恐み
惶みも白さく

木綿崎山松の操の彌堅く揚げし教旗のいや高き我大教會所大廣前の神比禮はや教祖神が
生神とはこゝに神が生れるといふことと皆もその通りに御蔭が受けられると仰せ給ひし
御理解の如疑を去り慾を離れて只管に神勤めに勤め貫徹坐して遂には教祖生神さなが
らに神比禮著く嚴しく輝き渡らせ給ふ神徳の隨々その比禮を仰き奉ると國々地々に御手
代仕奉る教師の数は四千に余り出社の數も千余り五百に満ちぬるが中にこれの某教會所
はし去にし明治何年何月何日の朝日の豊榮登に故教會長某大人がこれの里に道の
醜草刈掃ひ教筵開き始めてしより白眞弓春去り來れば咲く花の匂ふが如くに賑び榮
え紅葉の秋さり來れば月影の澄めるが如くに本心の玉を研きて吾身の神徳の中に活かさ

れてある事を禮奉り人生の幸を壽奉る信徒の年々に蕃息り行きて教會所も日に月に榮え
つゝ今年はも日日並めて春は五十度秋は五十回して五十年の御祭仕奉るへき年とはなり
ぬ故是を以て今日を生日の足日と齋定めて記念祝祭仕奉ると齋主を始めて齋員諸々は
散齋の致齋に忌回り清回りこれの教會所に所屬信徒は更なり手續の出世に至るまで今日
の佳日を待ち侘びて泣く子如す慕ひ寄り來て各々が赤心に持參來し海川山野の種々の味
物を横山の如置高成して獻奉らくを春の海原平らに安らに聞食し諾ひ給ひて言卷は畏か
れど皇朝廷の大御榮は大内山松の緑の彌榮に皇御國の大稜威は富士の神山の高く嚴しく
外國人も仰ぎ畏むべく隆昌しめ給ひ我道の教事はし天の益人益々に押擴め至らぬ隅なく
布施さしめ給ひこれの教會所の神比禮愈々益々輝き渡りて信徒諸々は家にも身にも枉神
の枉事なく子孫の八十續きに至るまで末通りたる靈驗を蒙りて信神の徳を顯はさしめ給
へと畏み畏みも白す

青年會發會式奏上祭祝詞

掛卷も畏き天地金乃神の大廣前教祖生神金光大神の珍の御前に「職名姓名」畏み畏みも白

さく

言卷は畏かれど天皇命の皇儲と坐まし、時下賜へりし令旨に國運進展ノ基礎ハ青年ノ修養ニ須ツコト多シと宣給ひ又我教祖神も青年に信心の道を守り行くべき事を強く訓へ諭し給ひき故これの教會所はし不肖「某」が負氣なくも生神の御手代と取次の神業仕奉りてしより廣く厚き靈驗蒙る信徒等の年々に蕃息り行けるが中に先づ頃より青年信徒の誰彼居寄り集ひて青年會を設立ることを互に相談らひつゝありへしに神扶ひ助け給ひの隨々若竹のすく〜と纏り行きて今度聯合本部の承認を得規約に適合へる我道の青年會となりぬるを以て今日を生日の足日と齋定めてその發會式執行ふ事の由を奏上奉らくを慈し愛しと見し諾ひ給ひて今ゆ後會員諸々共勵親睦しつゝ綱領の旨を心に鑲り身に行ひ上は令旨に應へて忠良なる國民とあり且は神訓に遵ひて眞の氏子とある譽を擧げしむべく三色の旗の色著く道の若葉の香はしく立榮えしめ給へと御酒御饌種々の味物を獻奉り置きて畏み畏みも白す

青年會 祈念詞

掛卷も畏き天地金乃神の大廣前教祖生神金光大神の御前を拜み奉りて白さく

大祖神の限りなき神徳に生まれ生神の比なき御教に導かれ御恵の深く厚きを嬉しみ忝なみつゝ日毎に捧げ奉る我等の祈念を聞召し給へ惟神なる寶祚の御榮は天地の輿窮みなく皇國の礎は大和島根の動きなく國民千萬は忠誠篤く仕奉りて我が日本の御光を四方の海に輝き渡らしめ給ひ尊き生神の御教は國の内外に布き弘まり天下の氏子は眞の大道に慕ひ寄り來て高き御蔭を仰ぎ奉らしめ給へ我等若き教徒は眞心の道を迷はず失はず今月今日一心に辿り進みて生神の御迹に神習はしめ給ひ過てるは宥じ及ばざるは導き給ひて心は直く身は健かに己が業務に勵み勤しみ相共に國のため世のため力を盡して神と皇上ごの大恩に報い奉り金光教青年たる本分を完うせしめ給へと白す

宅 祭 祝 詞

これの某の家の奥の眞床に齋奉る掛卷も畏き天地金乃神の大廣前教祖生神金光大神の珍の御前に「職名姓名」畏み畏みも白さく

大祖神の高く尊き神徳を仰ぎ畏み奉り教祖神の深き厚き恩頼を蒙り辱み奉る家庭の多かる中にこれの某の家はし當主某主を始め家内の者手人召使に至るまで入紐の同心に眞心の道を履行ひ

つゝ家業を恪しく勤め家内豊に饒び榮む行くことを嬉しむ辱み奉ると今日はもこれの御前を祓清めて御酒御饌種々の味物を置足らはして献奉り親族家族を初めて相識れる道の友垣寄集ひて拜み奉らくを平らけく安らけく聞食し諾ひ給ひてこれの家の商の業はも優良き品の多く調へる店にして應接の實意丁寧なる商人と里人の信用も篤く華客の出入の足の彌繁に立榮むしめ給ひて郷にありては良き市民と重みらね教會所に詣ててはよき信徒總代と用ゐらねつゝ道の爲め世の爲めに生涯力を盡し家門廣く父祖の名高く輝き顯はさしめ給へと畏み畏み白もす

記念碑建設奏上祭祝詞

此の處を嚴の齋場と注連繩引廻し神籬立繁し招奉り坐奉る掛卷も畏き天地金乃神の大廣前教祖生神金光大神の珍の御前に「職名姓名」畏み畏み白さく
 在りし昔の功を偲び後の世の龜鑑として其の事柄を碑に鏤み後世まで語り繼ぎ言ひ繼ぎ行かんよすがとして彰し示すことは之を望み見る人自然に心感けて又世に有功者を出す教の本なれば今回之の某の里に住める何某等主唱へて志厚き人等と相議ひ相協へて此の丘に何々の事を記してその記念碑を建て設け今その工事竣へぬるを以て今日の生日の

足日にその祝祭仕奉ると縣知事代理を初め市長郷人男女諸々葦鴨のい群集ひ由貴の御酒御饌種々の味物を献奉りて拜み奉らくを平らけく聞食し諾ひ給ひて碑の石の朽る事なく動く事なく高く嚴しく据り聳えて郷人諸々をして朝に仰ぎては其の功を稱へ夕に偲びては心に誓ひつゝその業を勵みその務に恪ましめ給ひて郷黨先覺の大き功に應へ奉らしめ給へと畏み畏み白す

下編 祭詞

第一章 祭詞の種類

葬儀靈祭等の時靈前に奏する辭を祭詞と云ふ。左の如き種類あり。

- イ 遷靈祭詞
- ロ 鎮靈祭詞
- ハ 終祭詞
- ニ 葬祭詞 (告別式祭詞)
- ホ 葬後靈祭詞
- ヘ 靈祭詞
- 旬日祭詞
- 式年祭詞
- 靈神祭詞
- ト 合祀祭詞
- チ 招魂祭詞

リ 改式祭詞
 ス 慰靈祭詞
 尙祭詞に準ずるものに誄詞 祭文 弔辭等あり。

第二章 祭詞の構成

祭詞を構成する詞句並に其の順序概ね左の如し。

- 一 發端句
- 二 哀悼句
 歸幽を哀悼する章句なり。哀悼の意を表はすに左の如き方途あり。
- 叙情
 哀悼の情を直接に叙べるもの。
- 事理
 世の中の道理物の情をのべ人事と對比せしめて哀悼の意を表はすもの。

比喩

一般的比喩

一般的事物にたとへて哀悼の意を表はすもの。

四季の比喩

春夏秋冬の風物に喩へて哀悼の意を表はすもの。

歸幽の状況

歸幽前後の状況を述べて哀悼の意を表はすもの。

時日の経過

時日の経過せしことを述べることにより哀悼の意を表はすもの。

三 諦悟句

死は人力の及ぶところに非ざることを悟り、諦めの意を表はす章句なり。

四 祭事句

祝詞の裝飾並に獻供句に相當し、夫々の祭事の次第様子等を述べる章句なり。

五 稱徳句

故人の徳識功績等を稱ふる章句なり。

六 慰靈句

死は幽玄なる神意による旨を述べ、生死を通じ大祖神の神徳を蒙るべき事を論じて靈を慰め靈を安定せしむる章句なり。

七 祈願句

靈の安定を乞祈み、子孫の爲家の爲に靈幸を祈願する章句なり。

八 結尾句

以上各句の取捨並に順序は、祭詞の種類により或は時と場所に依り一樣ならず。左にその一例を示さん。

- 遷靈祭詞
 - 一發端句
 - 二哀悼句
 - 三稱徳句
 - 四誦悟句
 - 五祭事句
 - 六祈願句
 - 七結尾句
 - 鎮靈祭詞
 - 一發端句
 - 二哀悼句
 - 三稱徳句
 - 四祭事句
 - 五祈願句
 - 六結尾句
 - 終祭詞
 - 一發端句
 - 二哀悼句
 - 三誦悟句
 - 四祭事句
 - 五祈願句
 - 六結尾句
 - 旬日祭詞
 - 一發端句
 - 二哀悼句
 - 三稱徳句
 - 四祭事句
 - 五祈願句
 - 六結尾句
 - 葬場祭詞
 - 一發端句
 - 二哀悼句
 - 三稱徳句
 - 四哀悼句
 - 五慰靈句
 - 六祭事句
 - 葬後靈祭詞
 - 一發端句
 - 二哀悼句
 - 三祭事句
 - 四祈願句
 - 五結尾句
 - 招魂祭詞
 - 一發端句
 - 二稱徳句
 - 三慰靈句
 - 四祭事句
 - 五祈願句
 - 六結尾句
 - 慰靈祭詞
 - 一發端句
 - 二祭事句
 - 三慰靈句
 - 四祈願句
 - 五結尾句
 - 改式祭詞
 - 一發端句
 - 二祭事句
 - 三慰靈句
 - 四祈願句
 - 五結尾句
- 七祈願句
八結尾句
- 靈神祭詞
- 招魂祭詞
- 慰靈祭詞
- 改式祭詞
- 一年祭以後の靈神祭は故人を祭る祭日なるが故に、その哀悼句は單に年月の經過をのべて追慕の情を表せば足るものとす。

第三章 句 例

發 端 句

- 何某翁の御前に度みて告白さく
- 言卷も忌々しき何某大人の靈の御前に「職名姓名」敬ひて白さく
- 仰ぐも悲しく拜むも息突かしき何某翁の柩の御前に度みて白さく
- 此の奥床を假の喪屋と注連曳き回し菅薦敷きて座奉り鎮奉る何某大人の柩の御前に「職名姓名」敬ひて告白さく
- 玉鉾の道の長手をくれくと物思ひ續けて御供仕奉り來て此の葬場に暫し昇据ゑ安め奉る何某彦の柩の御前に何某度みて白さく
- 是の小床に安め奉り座せ奉る何某姫の靈臺の前に白さく
- 是の祖靈舎に鎮奉り座奉る何家の遠祖世代祖親族諸々の靈神等の御前に「職名姓名」敬ひて告白さく
- 此れの何の丘の松風の清める處を千世の住處と天驅り鎮り坐す何々の靈神等の御前に

「職名姓名」謹みて白さく

哀悼句

叙情

○阿波禮汝翁の爲に此月の今日是の所にして葬の式執行ひ祭事仕へんとは木綿手次掛けても思ひ渡らざりき汝翁も「某」が葬の詞を幽冥より聞かむとは尙思ひ渡らざりけむ

○あはれ現身の人の世の状ははかなきものと知りつれど昨日に變る今日の態を見れば悲しとも悲しき極にこそ

○安波禮汝大人の御柩を護り送り参來て今ほと／＼に奥城に埋め奉らんとして仕奉る是の齋場の御祭は實に現身の一世の終の大き御式と思ふものから過にし年月遙かに思出列ねて深く忍び高く仰ぎ奉るべき由あり

○現身の人の世は實に定難く量難きものなるかも今此御柩を奥城の底津岩垣深く埋め奉らむとするに是や汝大人が現身の終一世の別の期ならむ如是思へば更に又心亂れ涙落ちて留め難きを暫忍びて汝大人の爲に現世の一世間の功の條々を且々言擧げ稱へて忍

奉り治め奉らむ

○あはれ君と相語らひし人々は今尙斯く在れど君が佛は見えず君が慈み給ひし子等は此の席に侍れども君が姿は在らずあな悲しあな忌々し

○秋山の野邊の小菊も漸々に花咲き満てど君し坐ねば折る甲斐も無く白玉の露装ひし朝貌の花は香へど君し愛てねば見る甲斐も無きを悲しとや虫も鳴くらむ阿波禮とや蟬も鳴くらむ

事理

○汝若子はまだ甚幼く座しつれば大方の世の理物の情をも良くは知食し分ざりけむ然は云へども其の靈は惟神なるものと奇しく尊く今は大祖神の御許に還り教祖神の鍾愛をも享け座しませば自然にも知食らむ

○嗚呼現世は術なきものかも現身の人の世は悲しき物かも病の憂瀬に落ちては貴きも賤しきも老いたるも若きも其の差別なく是を治むる醫師の術も亦限ありて治め得ぬ極に到れば更に如何にともせむ術なく惜この世を去りて幽冥の一道に向ふ外なし

○現身の人の靈は皆大祖神の授給ひ依し給へる物にして生れては人とあるべき眞の大道を悟しみ勤め死りては幽冥の御掟の任々復大祖神の御蔭に隠ろひ遠長く神の位に鎮るべきものなり此の理は貴きも賤しきも老いたるも幼きも差別なく命の限の或は早き或は晩きも亦遂に人の力以ては争ひ難き事になもある

○噫吉事には禍事い繼ぐてふ現世にやあらむ

○安波禮現身の此の世の中に去らぬ別の無くもかなと歎きて親の命を千世もと祈るは昔も今も人の子の眞心にして遂に往くべき此道の免れ得ざる理は誰も誰も甚能く知りて在る物から今はの際の期となりては昨日今日とも思はざりし我身の上を思ひ歎くも亦現身の心の常にして奇しみ咎むべき事に非じ

比 喩

一般的比喩

○池波に放てる魚も主戀ひて岸に喰ひ小垣内に養ふ百鳥も君戀ひて音にや啼くらん鳥虫も魚獸も親を忍び子を思ふ心の誠は負那々々悲しきに現身の人と在りては何時の世に

かも親を忘れむ孰の時にかも子を悲しまざらん

○汝若子がまだ若草の緑兒と垂乳根の御親の君等に齋ひ養され且々も笑片設け勾加はる乳子の容儀の愛の盛の時にしも吹巻く雲の朝風に其初花の碎けて落つる事の如く果敢なくあへなく身失せ座しぬることはや

○御齡もまだ二十五ばかり瑞枝さす梢の若葉うら若く座しながら雨雲の絶間の月の行方も知らにい隠る成りて神上り上り給ひぬ

○眞名子男女の主等諸々は烈風吹く沖の海中に大船の寄らむ鳥曲を雲に見失ひし事の如く山中の闇の夜道の標示すと挿る松火を嵐に消たれし事の如く思ひ迷ひ歎き悲しむ事状は汝靈も然こそ悲しと思ほすらめ如何にあはれと見給ふらむ

○指建列らねし御旗の影には心なき野山の草木も依りて靡きて枝葉を垂れ哀しく吹澄ます物の音には何やらむ林の鳥も諸聲に泣きてぞ御柩を送り奉れる

○阿波禮甚飽かず口惜しき事なるかも御子等親族諸々は然こそおよづれと思ひ惑はすらめ然こそたわごとと息衝き歎かすらめ

四季の比喩

(春の比喩)

- 朝風の吹くや野末の薄霞消行く事の如く夕風の誘ふ岡邊の梅花散り行く事の如く
- 垣本の春の淡雪日影に消ゆる事の如く池の面の春の薄氷風に亂るゝ事の如く果敢なく消入り失坐ぬるは尙春の夜の夢かとのみ思惑へる
- 阿波禮花ならば含める儘に散るとや云はむ木草ならば張もあへずて枯るとや云はむそも花ならば又來む春を待ちてあらむ木草ならば又來ん春を頼みてあらむを二世は往かぬ人の身の一世をだに全く竟すて過坐けるは惜しと思ふにも心餘り悲しと言ふにも言葉足らず唯あはれと長息するより外に爲む術こそなかりけれ
- 咲香ふ春花の盛には口惜しき雨風の亂有り愛仰ぐ秋の月の空にはゆくりなく群雲の立騒ぐ事多き慣の如く悲しきは現身の病の憂瀬なり悔しきは現世の命の限になんる
- (夏の比喩)
- 散過し花を尋ぬる鶯の青葉に惑ふ事の如く影消し月の跡問ふ子規雨に啼渡る事の如く

短夜の假寢の夢の覺めがちに忍奉り戀奉りつゝ

- 躑躅花匂ふ盛を速雨の打散す事の如く朝づく日昇る御影を黒雲の覆ひ隠す事の如く幽冥の神の御列に入り給ひぬ

- 夏の野に咲匂ふ躑躅花香はしき名を留め置きて若鮎の登る小川の川水の返らぬ方に退りましぬ悔しきか悲しきかも

- 夏草の千種の花は吹風に散て又咲き夏の夜の夜渡る月は村雲に消えて又出づ玉緒の絶えて再び還り來ぬ此の現世の人の身は言はむ術なく爲む術知らに悔しくし悲き事になむある

- 知々の實の父の命母葉の母の命は朝夕に塵をも据ゑじと撫子の花の盛りを待給ひ銀も金も及ばぬ掌中の白玉とのみ愛てうつくしみ生し立てつゝ座つる御心を知らずとや過ましつる背くとや退給へる梅雨の空さへ暗き百不足八十の隈路を獨や出坐らむ淋しくや迎り坐らむ是を思へば足引の山子規空も轟に誰かは音に啼かざらむ誰かは悲しみ哭かざらむ

○短夜の窓の燈火朝風に消えて跡無き事の如く玉柏若葉の露の夕風に敢なく零るゝ事の如く御齡さへまだ若竹の十余り一二にして惜しくも身失給へるかも惜しくも身退り給へるかも

(秋の比喩)

○春霞薫れる野邊の姫小松生先籠れる若緑を山風の折し事の如く置露の白玉飴る園の菊今咲出てむ花の含みを村鳥の居枯し散せる事の如く

○小林の梢の蟬も去年戀ふと照日の空に音鳴き暮し雲居吹く初秋風も淋しみと月の影にや吹き明すらむ

○小山田の稻穂を登る朝露の日影に落つる事の如く大空の月の光をゆくりなく雲立覆へる事の如く其靈は久方の天路遙に翔り給ひぬ露ならば朝に消えて夕には又も置くべし月ならば今宵隠れて明日の夜又も出づべし

○山の端に匂ふ紅葉を木枯の嵐の風の吹落す事の如く天原渡らふ月を群雲の時雨の雲の横切隠す事の如く

○まだ甚稚くか弱き御身に重き御病遂にも得耐給はざりけらし盛待つ間の菊の露敢なく消失坐けるは長息の狭霧吹棄つべき方だに知らず唯一向に惜み奉る外ぞなき

(冬の比喩)

○大方の世の状を申さば久方の天より降る雪も消ては本の水と爲り荒金の地に咲出でし花も散りては本の根に還る事の如く大祖神の神慮に因りて現世に生出てし顯見蒼生の死れば本津幽冥に復り入るは尙同じ理になむある

歸幽の状況

○現世の人の命の限しあれば此の一日二日の間いささかに心地悩み給ふとせし間に果敢なくも此世を過ぎて遙けき幽冥に出立ちましぬ

○昨日までも物學ふと學校に通ひ坐すところ見しか一日二日の間御病有りと聞つるに遽に御病の状變り垂乳根の御親の君等を初め家人諸々の篤き看護も醫師の術も其暇なく甲斐なくも幽冥の神の御許に神上り上りましぬ

○去年より惱みつゝ在りし病彌重りに重り彌篤しれに篤しれて其名聞ゆる醫師の術も力及ばず遂に此の某年某月某日を現世の別として幽冥の神の列に入給ひぬ

○汝姫い去年の某月の此より身體不平病煩ひ給ひしに依りて心を凝して大神に乞祈奉り醫藥の術に種々力を盡していかていかて今一度は病癒え心地平きて家内を治め給はむ由もかと天津水仰ぎ乞祈たりしを漸々に篤しれ重りのみ座して終に此の何月何日を現世の限と百不足八十の隈道に退り座しぬ

○現見蒼生の病の憂瀬命の限は貴きも賤しきも男も女も遂に免れむ道なく留めむ由無き理には有れど烈しく暴なる疫病時氣に遇ひて日をだに經ずて退り行くばかり敢果なく口惜き物はあらじ又其骸を收め奉るにも御掟ありて親族家族の心の随々ならず故野邊の煙の下むせぶ思ながらに遣れる骨を拾ひ集めて更に今日葬の儀は仕奉らむとす

○御心は春花の匂美はしく御性は秋の水の眞青に清く坐つれば妹脊の陸びも比無く次々に御子等も生れ出てて家内賑びに富足らひ坐つるを如何なればか卒に御身惱しくなり坐して只三日四日ばかりの間に御齡も若草の二十餘り八つを以て此の何月何日を現世の限と幽けき幽冥に神上り上りましぬ

時日の経過

○昨日こそ御病の形變りぬと親族家族心も空に驚き惑ひて若竹に吹く朝風の騒ぎ立ちしか昨日こそ玉緒の緒絶坐しぬと家人は爲む術知らに悲しみ歎きて雲居行く山子規叫び哭きしか日波はし梅雨に水嵩増れる谷川の早く流れて今日はしも汝大人の幽冥知らせる其日より日々並めて十日と言ふ日にも成にけり

○汝翁思の外に身退給ひしより親族家族諸々晝は日の盡々夜は夜の明くる極みうらさび歎き物思ひつゝ在る間に十日も過ぎて今日は早二十日と言ふ日に成りぬ

○山城の淀の川門の水車廻る月日の淀みなく十日を過ぎ二十日と流れて今日は早や玉櫛笥三十日の御祭日と成りぬ

○汝大人の御葬儀に御柩の御供仕奉りし日はまだ此頃の心地して忘るゝ暇もあらぬ間に三十日四十日も疾く來經去りて今日は既に五十日の御祭の日なりけり

○夕立の雨の亂のあわたゞしく昨日かも濡らし袖のまだ乾かぬに村雨に蟋蟀鳴きて秋寒き夕の風に驚きてかき計ふれば甚早くも汝命の身退給ひし其日より百不足五十日といふ日になりけり

○青山に日が隠ろへば奴婆玉の月は出でなむ久堅の日が來經れば天傳ふ月も來經行く昨日こそ早苗取りしか秋近き風吹そよぐ今日にして名細じき汝姫はや宵々に匂加はる三日月の果敢なく落ちて雲隠り給ひしより十日二十日は昔と遊り三十日四十日も昨日と過ぎて今日は早や百不足五十日と云ふ日にもなりけり

○朝風に木末動もす蟬の音に驚かさえて川添の櫻の並木列々に思ひ渡せば其の花の移ろふ如く其の水の返らず成りて汝彦が此の現世を遊り坐しはまた昨日今日の心持するに早くも百日と言ふ日になりけり

○汝靈の爲に葬儀仕奉りし時には久方の天霧ひ降る雪こそ木毎の花と見わしか日を經て整ほり來し春日に咲出し眞の花も遂に果敢なく雪と消れて今は若葉の緑の梢を吹風に驚かさわて更に思へば今日は百日の御祭の日にありけり

○月波は立も返らず時雨降る外山の雲の遠方に移ろひ遊り日波は淀も敢へず木枯に紅葉散り浮く山

川の早く流れて此の某月某日は汝翁の身退り坐してより百日と言ふ日なりけり

○今はとて常世遙に天翔り行く春の雁つらくに思ひ返せば汝老翁い此の現世を見果て給ひその靈の出來し本つ幽冥に歸り坐ししは去年の此の月の今日なりけり

○壁草に蟋蟀啼きて秋風の身にしむ音に驚きて川水の過來し方を思ひ渡せば今日はしも汝大人の幽冥に退坐ぬる去年の其の日なりけり

○梅花咲きて移ろひ天津雁來ては歸らふ春秋も三度廻りて今年昭和何年何月何日はしも汝大人が此の現世を退給ひし其の日より日々並めて玉筐三年の月日も回來ぬ

○この見ゆる大江に浮ぶ大船こそ見る間に影消ゆれ眞金敷く道行通ふ小車こそ近づく即て遠避れ悲しくも汝大人の雲隠坐て後一年過ぎ三年も昔と遠避れれば五年の御祭仕ふる今日さへ即て過て復らぬ空となるべし世の中は何か常なる物皆唯かくのみに遷り易きを昔を恐びて忘れぬ心ぞ今尙海原の雲と共に立去らず陸路の煙と共に結ばほれたる

○新玉の年の十年も過ぬれば大方世の在状も移り變るものぞと遠き昔より世の諺に云ひてあり過來し年月の間を反省思へば各々我相識れる人々にして既に世に亡き昔の人

と成ぬるも少からず又世の中の事等の案外に變り來ぬるも種々あれど我も人も身の老ぬるは知らず思へば心は變らぬものにして昔を思ひて忘れぬ心も然ながらに十年は今の心知なもする

諦 悟 句

○然はあれど今更に爲む術無き事にしあれば

○思へば口惜しき事なるかも言へば息衝かしき事なるかも然は言へど現世の慣と爲む術なき事にしあれば

○親族家族の人等の心には斯くなから仕へ奉る御前の事猶飽かず思ふものから現世の慣と限しあれば今日はも葬儀仕へ奉るとして

○かく飽かず口惜しく歎きむせび思ひ惑ふ心には御骸をだに今暫と留めも奉らま欲からむを現世の慣と日數の限もあるが上に一度出離りし神魂の再び還らぬを如何にせむ

○然は言へども今は昔の年月久に道の爲世の爲に念ほし碎けし御心盡しの條々を憶ひ又七十年にも間遠からぬ御齡を思へば今は我世の事竟て幽冥に入坐すべき期到り坐るに

もやあらむ兎にも角にも唯愕き慨み奉りてのみ在經べきにあらねば

○然は有れども青人草の此の現世に生出づるも退出づるも榮ゆるも衰ふるも皆幽冥の神の御心と議り給ふ事にしあれば人の力の及ぶべき事にあらず只神の御心に依奉り靡き奉りて畏みつゝなも在るべき

○月ならば入れば又出づ缺くれば復も満なまし歎く空安き日も無く群雲の晴れず重なる思はし何時を限とも無きものからなべて世の掟の任々

祭 事 句

○故則の随々内外の柩の板は廣く厚く堅く作備へて種々の物をも漏るゝ事なく落つる事なく取添えて送り奉ると

○御柩の板は廣く厚く御幣は白和妙青和妙を眞神の枝も撓に取垂て拏持つ旗手の彌列々に吹立る笛の音に啼きつゝ親族家族諸々御柩の後先も繁らにい群列りて御供仕奉らくを

○青旗白旗立て列ね五百枝眞神搔き擔ひ吹き鳴らす笛も亂るゝことなく人々諸々御柩の

前後厳しく立ち列み護り送り奉る随々

○是の某の岡の上を朝露のさやけき庭夕風の涼しき所と掘る穴の内は保良々々に深く底つ石根に石垣杵築奥城の誌の文は動無き石に彫しめ添へて御柩は治め奉らむとす

○故式の随々式年祭仕奉ると靈舎の内外を清に祓ひ清め左右に眞榊の枝も多和々に照妙取結び小瓶には時節の花の色々挿はやして靈臺の御前を拜み奉らくを

○是の某の廣庭を假の齋場と祓ひ清め靈臺を齋き坐せ奉りて御酒御食種々の物共を捧奉り親族家族を始めて朋友教子等諸々伊寄り集ひ玉串の取々に額き拜み仕奉る状を

稱 德 句

○汝若子は性質直く勇ましく智識明らかにして善く父母の言を守りて學の業にも恪みましければ後々は必ず家を興しまさむものぞと生先頼もしく望みを懸けたりしを

○汝主はや主は御性質直く正しく忠實に坐して身を修め家を齊へましは言ふも更なり國の爲道の爲に身をも心をも盡しましければ親族家族朋友を始めて相識れる人の限百

年の齢をも重ね坐さなんと祈りつゝ在り來しを

○汝姫はや御性質清く温順に御容貌さへみやびに美はしく小學校女學校の學の業を卒へて女の修むべき技は大凡學び給ひ何年何月此の何某主に嫁ぎまして後は善く舅姑の君に事へましゝ事は更にも言はず心を盡して脊の君に仕へ男子何人女子何人を生みて善く養ひ育し召使人等をも顧み給ひ美らに家を齊へ治め内外の交にも篤かりしかば脊の君は内を顧み煩ふ事なく一向に其の務に恪みませる随々遠近の人等は汝姫の行を稱へて賢しき母善き家刀自としも敬ひたりきしかのみならず去にし何年我道の信徒となりましてよりは心の鏡眞明に教祖の御心を心として愈々益々婦の道を盡しましければ我大神等の恩頼を蒙ることも尋常ならずましけるを

○汝刀自はや其の心直く正しく其の性操に穩しく御子等も健かに成人まして家督美はしく取總ねましつれば今は世の中の事も清く離れて朝夕を安けく櫻咲く春の朝は鳥好み作れる庭に降立ちて見つゝ遊ばひ月清き秋の夕は言の葉の花の林に入交り心慰めうら安く坐つるものを

○現身の人の命は限有るものと千早振神の御代より定りて貴きも賤しきも遂に往く此の
一道は免れ難し然はあれども惟神なる其の靈は我大祖神の授け給ひ依し給へるも
のなれば死りては本つ幽冥に歸り尙遠く長く家をも子孫をも守り幸へ坐すべきものな
り

○かくて幽冥の神の員に入り神の御許に參上りなば此の現世に有りし間の善き惡しき行
狀深き浅き功の随々必ず其の魂は神の治め給はむ物なれば阿波禮汝の神靈も生涯
の功あれば如何に愛度き御賞をか蒙らむ故此の道の理をば思ひ違ふる事なく一筋に
神の御許に還り行かせや

○此の現世に在り經る人は其の身の品の貴き賤きに依らず其の心の賢き愚なるを論はず
世に大なる功を立て芳はしき名を後世に遺し命長く在經て遷り易る世の形をも見ん
事を欲せざる人は在らじ然は云へども或は功と名とは且々顯はるゝも命短くして其
の一世を全く竟へざる人有り或は命は長く一世の涯安く樂みて在るも後の世に遺すば

かりの功も無くて空しく我世を見果るもありて汝大人の如く是を悉に我身に集めて愛
て度く貴く全く我世を盡さむは甚難き事に在るらし

○安波禮顯現着生の一世の事をつくらと思ひ見れば各々其の志方是一道に有らねど
もとにもかくにも其道の爲に其の技の爲に種々心を盡し思を惱し朝に勤しみ夕に勞き
て且々も其功現はれ其の名立ちぬと思へば即て年老い命の限の期到るが如く思へば
敢果なく思へば頼無き人の世にはあれど又君の爲國の爲に將生子の爲に深く遠く思量
り忠に雄々しく立てし功直く嚴しく成せる事業は現身と共に失せず命と共に消えず絶
えず萬世に言繼ぎ語繼ぎて香細しき其名をしも傳ふべし又幽冥に入りて消えず失ざる
其の靈は天翔り國翔り國の爲にも家の爲にも必ず幸へ守り扶け導きて自然驗あらし
むる事あり

○式の随々遷靈の術仕奉らくを平らけく安らけく聞食して此の靈聖に奇き神靈を留め給
ひ移し給ひて遠長く家の守と鎮り坐し生子の八十連綿春秋に仕へ奉る御祭を美らに享

諾うべなひ坐ませと

○是これの劔けんは汝いまし主しが常つねに愛あて持もたし、物ものなれば遠とほ長ながき靈たま璽じと如此かく造つくり設たけ齋いはひ奉まらむと是この御み前まへに奉たてまつり置おきて靈たま移うつしの式のり仕しへ奉まる事こと状じやうを美うらに聞き食しして其その奇いしき神かみ靈たまは今いまより後のち是これの靈たま璽じにもたしだしに移うつし給たまひさやくに留とどめ給たまひて春はる秋あき遠とほく仕しへ奉まり行ゆかむ御み祭まつりをも享うけつ諾うべなひ給たまへと

○阿あ波は禮れい汝いまし姫ひめ靈たま神かみはや豫かねて穩おだしく聴きく坐まつる御み心こころの性さがの隨まく靈たま璽じに其その分わけ靈たまは留とどめ給たまひ移うつし給たまひて今いまより後のち繼つ々に仕しへ奉まらむ祭まつり事ことをも受うけ諾うべなひ給たまひ親おや族むら家か族むら諸もろ々くの捧た奉まつらむ涙なみだの露つゆの玉たま串くしをも幽かく冥りやうの道みちの裝まの髪かみ挿さしと見みそなはし給たまひて我われ大おほ祖そ神かみの導みちびき治をさめ給たまはむ任まに本もと靈たまは惑まどふ事ことなく一ひと筋すぢに神かみの御み許もとに還かへり鎮しづ坐ませと

○式のりの隨まく御み葬むすぶの式のり仕し奉まり今いまも御み柩つひ昇あげ齋いはひ員いん親おや族むら家か族むら諸もろ々く差さ立たつる旗はた手ての列つ々に護まもり送おり奉まらむと爲なるが故ゆゑに御み輿こ發したしの御み祭まつり仕し奉まらくを御み心こころ安やすらに聞き食しして玉たま銚さの道みちの長なが手てを大おほ船ふねのゆくらに退ひ出い坐ませと

○歴れき代だいの奥おく城じやう所ところを千ち代だいの住すまかと下した津つ石い垣がき動うぐ事ことなく安やすらに穩おだに鎮しづり坐ませと

○是これの家や内うち鏡かがみ如ごとく見みし明あらめ眞ま玉たま如ごとく妙たに美うはしく劔けん如ごとく猛たけ々々しく植う立たつる木こ立たち瑞みづ枝え瑞みづ々々しく賑にぎび立た榮さかえしめ給たまへと

○今いまより後のち櫻はな花はな彌や眞ま盛さかりに望もち月つきの彌や湛たんはしく御み靈たま幸さちへ守まもり助たすけ給たまひて是これ家いえの生うみ子この八や十じ連づ綿わた春はる秋あき遠とほく仕しへ奉まらす御み祭まつりをも美うらしく執と行こうはしめ給たまひ又また嚴いしく齋いはれ給たまへと

結 尾 句

○五さ月つき雨あめる、空そらの雨あめ雲ぐも鬱ふさ悒ふさしき心こころながらに雨あめと降ふる袖そでの涙なみだを搔か拂はひつ、悲かなみ慨なげひも白しろす

○齋いは主しゅ何なに某な夏なつの日ひの照てるや陽ひ影かげによられ伏ふす庭にわの夏なつ草くさうなかぶしうらびれつ、も畏おそみて宣のり奉まつらくと白しろす

○齋いは員いん諸もろ々く白しろ妙たの袖そで搔か列らね祭まつり場ばに庭にわ雀すずめ宇う受う須す麻あ里り居ゐて悲かなしみ歎なげきつ、も白しろす

第四章 文

例

歸幽奏上祭詞

掛卷も畏き天地金乃神の大廣前教祖生神金光大神の珍の御前に「職名姓名」畏み畏みも白
 さく
 年久く大神等の恩頼を蒙りし「姓名」い此日頃病の苦瀬に落ちて惱み苦しむたりしが今日
 を現世の限と幽冥に歸きぬれば大神等の御心に憐み給ひ恵み給ひて現世に在經し間に過
 犯しけむ罪事のあらむをば神直毘に直し神許しに許し給ひて惟神の理の随々神の御許に
 復り鎮らしめ給ひて遠く永く安く楽しく坐さしめ給へと御酒御饌種々の物を捧げ奉り置
 きて畏み畏みも白す

遷靈祭詞(一)

阿波禮某童男はや現世に生出てまし、後は最も愛て度く甚も健かに生立ち坐して在經し
 に如何なる枉事にや卒然に病氣發り漸々に重り行きて垂乳根の父母をはじめ兄姉の心
 盡しもその驗なくて遂に歸らぬ道に向ひましぬ阿那惜しきかも阿那痛ましきかも然はあ
 れど爲む術もなき事にしあれば現世の慣の随々葬儀執行はむとして今靈璽に御靈を遷し
 奉らくを平らけく安らけく聞食して速かに遷り鎮り坐せと申す

遷靈祭詞(二)

阿波禮「某」翁の御前に白さく
 汝翁はや惜しくも此の現世を退り坐しぬるかも悔しくも現身を隠し坐しぬるものかも阿
 那悲し阿那忌々然はあれど總て現身の人の靈は我大神の授け給へるものなれば死りに
 は本つ幽冥に歸り天地の神の御許に参昇り教祖神の廣き御恵を蒙りつゝ子孫を八十續に
 立榮ゆべく輔け幸へますべきものぞ故今ゆ後親族家族諸々が拜み奉らむ標と靈璽を造り
 備へて遷靈の式仕奉らくを平らけく聞食して速けく遷り鎮り坐せと白す

遷靈祭詞(三)

阿波禮「某」姫の御前に「職名姓名」敬ひて告白さく
 汝姫はや不意くも病の憂瀬に拘らひましければ親族家族諸々は一向に大神に乞祈奉り夜
 となく晝となく勞き看護ひつゝみかけ蒙りて病も怠り今一度は美しき本つ容姿をも見物

語をもせんものをと樂しみて待ちたりしに其の驗なく嗚呼此れの某月某日を現世の限り
と幽冥の神府に罷坐しぬ嗚呼悲しきかも嗚呼惜しきかも親族家族諸々は枕邊に侍ひ脚邊
に縮ひ夢となく現となく悲しき慕ひつれど盡させぬ事にしあれば遷霊の神術以て今より
御霊を靈聖に遷し奉らくを熟らに聞食して速に遷り留り坐せと白す

鎮靈祭詞(一)

「某」童女の靈の前に白さく

汝童女はや汝は未だいと幼稚くましつれば世の道理人の情の程は良くは知しめし辨かざ
りけむも現身の人の魂は皆大神の授け依し給へるものにして其の壽命には長きと短き
との區別こそあれ死りては幽冥の御掟の随々均しく神の位に鎮るべきものなり故今しも
かく汝靈を鎮奉らくを御心平穩に聞食して遠祖等の靈に依り從ひ教祖神の鍾愛を蒙り
つゝ遠永に鎮り坐せと種々の机代物を捧奉り置きて謹み敬ひも白す

鎮靈祭詞(二)

「某」の翁の靈の御前に「職名姓名」敬ひて告白さく

阿波禮現身の人の魂は總て我大神の授け給ひ依し給へる物にして生れては人と在るべき
眞の大道を悟し勤め現世の事終へては復幽冥の神府に立ち歸り瑞の御蔭に隠ひつゝ遠
長く神の位に鎮るべきものなり汝翁はや夙より我教祖神の廣く厚き恩頼を蒙りて家
の爲世の爲に立置給ひし功の多ければ今より「蓋の翁」と稱へ奉りて此の家の靈神と齋
ひ鎮奉れば子孫の遠き世の守此家の永き鎮と長久へ留坐せと御酒御饌種々の物を供奉ら
くを平らけく安らけく聞食せと白す

終祭詞(一)

「某」若子の柩の前に白さく

あはれ「某」の若子や垂乳根のみ親の君等のみ慈愛のまに／＼馴づき親しみこれの御部
屋を今かく様に裝飾なして汝の爲に悲しき御祭執行はむとは木綿襪かけても思ひ渡らざ
りけり汝若子はまだいと幼くましつれば大方の世の理物の意は良くは知しめし分ざり
けむ然は云へどその靈は惟神なる奇く尊きものにして今は幽冥の神のみ許に還りましつ
れば自然もに知しめすらむ此の現世に生出でて親となり子となるは因より深き契りあり
て我大神の議り授け給へる事なれば其の親の心に子を愛しみ子の心に親を慕ふ眞心もや

かて惟神なる誠の大道になむ故古の人も銀も黄金も珠も何にせむ勝れる寶子に及ばず
 と言ひ又人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に迷ふと歌ひき古も今も貴きも賤き
 も是れ人の眞心なれば汝若子が今かく思はず身失せ給へるをちゝのみの父の君ははそば
 の母の君を始め同胞もろく云はむ術せむすべ知らに思ひ惑ひて夢かとのみたどりつゝ
 亡骸をだに今暫し留め置かむと思へども現世の慣と日數の限もあるが上に一度出離りし
 靈の再び還らぬを如何にせむ故親族家族諸々悲み歎きつゝ今日しも葬儀執行はむとし
 て御柩を昇出奉らむとす汝靈も諾ひ聞召して送り奉らむ道の八十限平らけく安けく退り
 出てませと白す

終 祭 詞 (二)

思へば涙ぐましく云へば息づかしき「某」翁の柩の御前に「職名姓名」謹みて告白さく
 汝翁い思ほへず御身惱ましく病臥し坐つるによりては親族家族諸々は日頃信頼る大神に
 乞願奉り年頃かゝれる醫師の術を盡していかで〜今一度は御心爽快き給はむ事をと天
 津水仰ぎ乞祈伏して待つる甲斐もなく何とかも惜しき此世を背がひになして歸らぬ方に

は出坐つる故家人諸々云はむ術爲む術短らに歎き惑ひて亡骸をだに今暫し留め置かまく
 欲すれど現世の慣と日數の限もあれば泣く哭くも今日ほも葬儀執行はむと葬具設置へ
 捧げ持つ旗手の彌列々に親族家族を始め相識れる遠近の人等御柩の前後も繁らにい群
 列り御供仕奉らくを御心安らに聞召し諾ひ給ひて退り坐さむ道の八十限恙む事なく滞る
 事なく後も安けく出立坐せと御酒御饌種々の物供奉りて悲しみ歎かひつゝも白す

葬 場 祭 詞 (一)

是の葬場に暫し昇据安むる「某」童女の柩の前に白さく
 阿波禮悲しきかも阿波禮はかなきかも病の憂瀬に落ちては貴きも賤しきも老いたるも若
 きもその差別なく遂にその命の末期となりては又如何とも爲む術なし阿波禮汝童女はや
 俄に病重りて苗草の何歳を現世の限ともろくも消失せ坐しぬれば親族家族諸々は悲しみ
 歎かひつゝ哭く哭くも今日ほも葬儀執行ふとして青旗白旗種々の儀装物持ち連並め今し
 も道の限々恙む事なく送り參來て是の奥城所に收め奉らむと御酒御饌種々の机代物を供

へ奉り玉串の取々に拜み奉らくを聞食し諾ひ給ひて下津岩垣動きなく安く穩に鎮りませと白す

葬場祭詞(二)

玉銚の道の八十隈護り送り參來て是の葬場に暫し昇居安むる「某翁」の柩の御前に「職名姓名」敬ひて白さく
阿波禮現世は術なきものかも人世は果敢なきものかも病の憂瀨に落ちては貴きも賤しきも老いたるも若きも其の差別なく惱み苦しみ時の至りて命の終りぬるは如何とも爲む術こそなかりけれ嗚呼翁はも今し現世の事竟へて一世の別の來にけるかと漫に心も亂るゝを暫し忍びて現世に坐し、間の事蹟を言擧げて偲び奉らむ
翁はや先代の某翁の長男にして幼少より能く父母に事へて孝を盡し成長りては能く親族家族朋友に睦びて萬事實意にこそ坐しけれ去にし某年某月父翁の身退りましてよりは家督を繼ぎ家業を修め某年某月よりは何職に任けられ某年某日には推薦されて何職に就き

少かも私心なく萬公平に直く正しく其職を盡くし給ひしかば里人は更なり近隣の人々に至るまで其の勤勞を賞め稱へ其の功德を慕ひ奉りき然るに吉事に凶事い次ぐ世の慣とてか去にし某月中旬より不意も病に罹づらひ甚く苦しみましたければ親族家族諸々打集ひ種々に心を盡して大神等に乞祈奉り醫師に請ひつゝ看護ひつれど其の効なくあはれ某月某日齡何才を此の世の限りとして逝水の逝きて還らぬ八十隅路に隠れ去に坐しゝは悲しとも痛ましとも云はむ術なき事になも阿波禮阿波禮今は只其の靈の行方を大神に乞祈奉り亡骸は式の随々廣く厚く治め奉ると御前に御酒御饌種々の物供奉らくを御心穩に聞食し給へと白す
かくて御柩は今より親族家族寄り添ひて代々の奥城所に深く固く藏し奉り埋め奉らくを靈ながらに平らけく諾ひ給ひて常世の住所と安く穩に鎮り坐せと白す(火葬の場合)へかくて遺骸は今より迦具土に委ね御骨をば代々の奥城所に埋藏め奉らくを靈ながらに聞召し諾ひ給へと白す)

葬場祭詞(三)

是の齋場は暫し昇居安むる「某」刀自の柩の御前に「職名姓名」虔みて告白さく
 あはれ刀自の柩を護り送り來て今ほとく奥城に埋めむとして遙に刀自が一世の昔を
 顧み思へば種々に偲び奉らるゝ事あり汝刀自は御性質直く温順に御容姿さへみやびに
 美はしく小學校女學校の學びの業は更なり女の修むべき技は大凡學び給ひ某年月に此
 の何某主に嫁ぎまして後は善くみ親の君に事へて孝養を致し又心を盡して背の君に仕へ
 男子何人女子何人をあげて能く養ひ育し使人等の上にも厚く情を配りて美らに家を齊へ
 治め内外の交にも篤かりしかば夫の君は内を顧み煩ふ事なく一向にその務に勤しみませ
 る随々家業は愈々立榮え知れる限りの人等より賢しき母よき家刀自としも敬ひ稱へられ
 ましぬ然のみにあらず去にし某年月我が眞の大道に入信してよりは心の鏡眞明に教祖
 の御心を心として彌益々に婦の道に勵み進みましければ我大神の恩頼を蒙ることも尋常
 ならずましけるを如何なればか此れの某月の中頃より俄に病起り惱みましければ親族家
 族諸々は心を痛め思を焦し一向に大神に乞祈奉り醫師に請ひて看護の業に心を盡し、か
 ど其の効なく一昨日の夜半齡何才を此の世の限りと幽界に身罷りましぬあな悲しきか

もあな憂たきかも親族家族諸々は云はむ術爲む術知らに思詫びて心も空に鬱悒しく手足
 たゆげに縮ひぬれど限なき事にしあれば例の随々葬儀執行ひ机代物を御前に供置きて玉
 串の取々に拜み奉り永世の別を告白さくを聞食し諾ひ給ひて此の奥城の底津岩根を常世
 の住所と安く穩に鎮り坐せと白す

誄 辭

金光教何教會長「職名姓名」大人の御柩の御前に慎しみ敬ひて告白さく大人は何縣何郡
 何の里の産にして明治年月日何某主の長男として生出てまし御母を何子刀自と白しき幼
 少より某の性質素直にして賢しく學の道には特に志厚く齡十四歳の時郷里の小學校を
 卒へ直に某中學校に入學ましぬ成績は常に人に優れ卒業の時は縣知事より賞品をさへ得
 させ給ひぬかくて家業を繼ぎ何某主の女何子を妻として男何人女何人を擧げましぬ素
 より心寛く思慮深く善く親に事へ良く家業を勵みましければ家内和び睦み家門富榮え
 て其の名も世に聞え人にも重く用ゐられしからに或は何町衛生組合長或は學務委員など
 と名譽ある務に推薦されましけり去にし明治何年何月何日不意も重き病に罹りましつる

時始めて我道の信徒となりましけるが素より忠實に直なる御心は大神の御氣感にかなひましけむ家にも身にも顯著き種々のみかげ蒙りしものから遂には深き神縁厚き神道引の随々家をも身をも大神に捧げて教師の列に入り其の家を神の廣前と献げ給ひきこれ明治何年何月何日の事にして今の何教會所の濫觴になむかくて神徳日に輝き神比禮月に現はれて大人が教導に活かされ取次に救はるゝもの濱の砂の數へもつきず教會所の等級も年々に昇りて昭和何年何月には何等教會所となり職級は何教正に補され手續の出版も何ヶ所に及び數ある教會所數多の教師の中にて何教會所の何教師と數へ崇へらるゝ程道の爲にも世の爲人の爲にも大き功績を立て給ひぬ然るに現身は術なきものか去にし某月の中の頃ほひ御心地例ならずとて病臥し坐しければ親族家族信徒諸々は一向に大神に乞祈奉り醫師に請ひつゝ心を盡して看護の事につとめしに御壽の限りにや何月何日齡何歳を此の世の限りとして神のみ許に神上りましぬあはれ悲しきかもあはれ惜しきかも明日よりは慕はしき御姿は見えずやなりなむ今日よりは懇なる御言は聞えずやなりなむと心も空に惑ひつゝ今日にも葬儀仕奉り人々諸々此の御前に慕ひ寄來歎息の最中に

むせびつゝ教子總代「某」思ふ心の千々の一言誄び奉らくと白す

弔 辭

故金光教某教會所信徒總代何某翁の御柩の御前に金光教何教會所婦人會長「何某」謹みて告白さく

翁はや此の何教會所の開設當初よりの信徒にして年まねく信徒總代として道の爲教會所の爲に力をつくし給ひ常に淺信不徳なる妾等の爲に或は信心の先達として手本を示され時には師の君に代りまして懇なる御教を垂れさせ給ひしものから親はしき考叟よ懇なる長人よと慕ひ奉り殊に我某婦人會の創立に當りては後に立ち傍に添ひつゝ何くれと力を籍し給ひ其の後も絶えず好意を向け給へりしことは今も尙會員一同忘るゝことなく行末遠く大船の思ひ頼みてありしに不意も身失せましぬるかも惜しくも身死りましぬるかも八十八歳てふ高齢には坐しつれど皆人の心には尙百年の齡をも重ねてしかなと乞祈奉りつゝありへしものを明日よりは慕はしき御姿は見えずやなりなむ懇なる御言葉は聞えずやなりなむと心も空に悲しみ歎かゆるを暫時忍びて思ふ心の千々の一事言擧げ

て悼み奉らくと白す

葬後清祓

掛巻も畏き被戸大神等の御前遙に畏み畏みも白さく

今日の葬儀に與り會ひし諸人を始めて此の家内に在りと在る罪穢を朝の御霧夕の御霧を朝風夕風の吹き拂ふ事の如く祓ひ給ひ清め給へと白す事の由を天の班駒の耳彌高に聞食せと畏み畏みも白す

葬後靈祭詞 (一)

此の小床に安め奉り齋き奉る某郎子の靈神の御前に白さく汝郎子はや前途有爲の身をもちて惜らしくも病の爲に身失せましぬることかも親族家族諸々は夜晝知らに哭き悲しみ歎き呻吟ぬれど留むべき由もなく遮るべき術もなければ鬱悒れたる心を鎮めて今日はも葬儀執行ひ收め奉りぬ故家内に齋奉る御靈を慰め奉らむと御酒御饌種々の御饗物を供奉り親族家族寄集ひて御祭仕奉らくを平らけく安らけく聞食し諾ひ給ひて此家の守神と末遠長く守り恵まひ坐せと白す

葬後靈祭詞 (二)

是の小床に安め奉り坐せ奉る「謚號」翁の靈の御前に白さく汝翁い百年の齡を重ねて世の長人と名に負坐む事を朝夕に乞祈奉りしに如何なればか忽に此の顯世を打棄て百不足八十の限路を遙けき幽冥に罷り坐しぬる事よ親族家族諸々心も空に悲しみ惑ひ夜晝知らに悔しみ惜しみつれど現世の例と止むべくもあらねば御掟の随々葬の禮事漏るゝ事なく落つる隅なく事竟へ奉りぬ故今し後取り收め祓ひ清めて御祭仕奉るとして御酒御饌種々の味物を机代に置足らはして供奉らくを美らに安らに聞食し給ひて幸魂奇魂は子孫の八十次々に此家の守神と鎮り坐して内外の枉事なく八桑枝の繁立榮ゆる事の如く茂久榮に隆えしめ給ひ毎年の御祭をも絶ゆる事なく美しく仕奉らしめ給へと謹み敬ひも白す

十日祭奏上詞

掛巻も畏き天地金乃神の大廣前教祖生神金光大神の珍の御前に「職名姓名」畏み畏みも白さく

今日はしも「某」翁の十日靈祭執行はむとするを奏上げ奉らくを熟らに聞食し諾ひ給ひて

大祖神の廣く厚き御心にそが靈を憐み給ひ愛て給ひ教祖神の深き恩頼に限りなき歡樂を享け得しめ給へと御酒御饌種々の物獻げ奉りて乞祈奉らくと白す

十日祭詞 (一)

是の小床に坐せ奉る「某」翁の靈の御前に「職名姓名」敬ひて白さく
あはれ汝翁の御爲に人皆が悲しみ歎かひつゝ、仕奉りし葬儀の本末かつが事竟へぬと思ふ間に今日は早や日々並めて十日といふ日になりぬ故親族家族諸々寄集ひ式の隨々靈祭仕奉ると御前に御酒御饌種々供奉り各々玉串の取々に偲奉り拜奉らくを甘らに安ら聞食せと白す

十日祭詞 (二)

是の小床を伊豆の眞屋と被ひ清めて齋ひ奉り坐せ奉る「某」姫の靈前に「職名姓名」謹み拜みも白さく

姫はや白玉の眞玉なす清く和やかなる御心もて家内を修め齋へ夫君をして聊も憂あらし

め給はず御子等を愛て慈しみ撫て育して己がじゝ世に立たしめ給ひ家の基を彌廣に定め家運を彌遠に開き給ひて朝に薫る白菊の芳はしき御功を立て夕に照る月の清けき御名を留めて御心靜にも幽冥の神府に歸り坐ししは最も尊くしかすがに最も可惜しき事の極なりけりあはれ夫君を始め御子等親族等は今更に限ある人世を慨み嘆かひ行く水の逝きて歸來坐さぬ姫を戀しみ懐かしみ奉りつゝ、日夜分かず思ひうらぶれてのみ在るから早くも今日は十日祭仕奉るべき日としも成りぬあはれ天つ御空も時知りてや憂ひの雲低く垂れ悲みの雨も打ちしぐるゝ是の夕にしも御前を取治めて禮代の幣帛と御酒御饌海川山野の種々の味物を捧げ奉りて拜み奉る事の由を靈ながらも平らけく聞食し享け給へと白す斯く聞食しては今も行先も幽冥の高き尊き神の御位に穩ひに安らけく神鎮り坐して永久に限りなき御慈愛を蒙り某の家の守護の神と家族親族等が身をも彌遠に彌廣に守り幸へ坐せと謹み敬ひも白す

十日祭墓前祭詞

「某」翁の奥城の御前に「職名姓名」告白さく

あはれ汝翁の御柩を此の奥城の底津岩垣深く藏し奉り埋め奉りしは未だ昨日の如く思ほえるに日波はし早船の早くも流れて今日は早や十日となりぬ故靈璽の御前を齋ひ奉り治め奉りて其事も竟へぬれば之の奥城の御前をも拜み奉らむと御酒御饌種々の物供奉り親族家族諸々かく打集ひて瑞の玉串献奉らくを平らけく安らけく聞食し諾ひ給へと白す

五十日祭合祀祭奏上詞

掛卷も畏き天地金乃神の大廣前教祖生神金光大神の珍の御前に「職名姓名」恐み惶みも白さく

今日はしも何某の靈神の五十日靈祭執行ひ引續き合祀祭をも仕奉らむとする状を奏上げ奉らくを平に安に聞食し諾ひ給ひて大神等の高く尊き恩頼の隨々そが靈を憐み給ひ愛て給ひ此の某家の守神と安く平穩に鎮まらしめ給ひて子孫の末長く仕奉る春秋の靈祭をうむがしく享けしめ給へと御酒御饌種々の机代物を捧奉置きて畏み畏みも白す

五十日祭詞

言へば息衝かしき歎に聲むせび思へば搔暮す涙に目も見えぬものから「某」靈璽の御前

に「職名姓名」敬ひて告白さく

あはれ汝翁の身退り坐しつる事は夢に夢見る心地して幾度か見返せど信け難ねて尙存すものと在らぬ姿を偲びつゝ惜しむ心の淺ましく還り來ませと愚にも獨私に待つ程に十日二十日は昔と避り三十日四十日も昨日と過ぎて今日にははや百不足五十日といふ日になりぬ阿波禮汝翁の身退りましゝは夢にはあらで悲しき現なりけり故親族家族諸々寄集ひ式の隨々御祭仕奉ると種々の御饗物供奉り各々が玉串の取々に拜み奉り忍び奉らくを甘らに聞食し諾ひ給へと白す

合祀祭詞

此の靈舎に齋奉り鎮奉る「某」の家の遠祖世代祖親族家族の靈神等の御前に「職名姓名」敬ひて白さく

汝靈神等の子孫「某」身退り坐してより來經近く月日のいと早く今日は早や五十日といふ日になりぬれば此の靈舎に合祀り齋奉らくを相共に諾ひ給ひて家の内外に喪なく事なく家族諸々陸び和ぎ子孫の八十續に嚴八桑枝の如立榮えしめ春秋の御祭をも絶ゆることな

く怠る事なく年々に美しく仕奉らしめ給へと御酒御饌種々の御饗物共捧らくを相嘗に聞食し諾ひ給へと白す

廿日祭に卅日祭四十日祭五靈 祭詞

此れの靈床に安め奉り齋奉る某彦の靈神の御前に「職名姓名」謹みて白さく
阿波禮十日の御祭仕奉りしは昨日今日とのみ思へるを時の矢は飛鳥川流れて淀む事もなく今日は早や廿日の御祭仕奉るべき日とはなりぬるを以て更に想ふに今より後は世間にも家の業にも事繁く障多くて當る日に得仕奉り難ければ卅日四十日五十日の御祭をも併せて執行ひ珍の靈璽をも祖先等の鎮座す靈舎に合せ鎮め祀らむと親族家族諸々御前に來寄集ひ御酒御饌種々の物に時節の花をも差添へて供へ奉り拜み奉らくを御心平穩に聞召せと白す

辭別て此の靈舎に鎮坐す某家の遠祖世々祖親族家族の靈等の御前に白さく汝靈等も知らする如く某彦が身退りましてより未だ五十日には満たざるも家の業の繁くして親族家族にも障る節多きを以て今日しも五十日の御祭仕奉り竟て新靈主をこれの靈舎に合せ祀ら

ぐを聞食し諾ひ給へと白す

かく仕奉る狀を汝某彦の靈や御心も平穩に聞食し諾ひ給ひて世々の祖親族家族の靈等と相共に親しみ給ひ睦み給ひて教祖神の深き御鐘愛を蒙りつゝ幸魂奇魂は家内の守神と坐して子孫の末遠長く仕奉る折節の御祭を心足らひに享諾ひ給へと謹み敬ひも白す

百日祭 祭詞

此れの靈床に鎮奉り坐奉る某大人の靈神の御前に白さく

阿波禮汝大人の靈の思ほへず天翔り雲隠り坐しける事を思へば今も尙繁き思は杜の大木の千枝に五百枝に隙無き事の如く絶えぬ涙は木の下露の朝夕に乾かぬ事の如く百日と數ふる今日までも忘難に忍奉りて是の御前を拜奉り親族家族來寄集ひて仕奉る狀を汝靈神もさこそ知食すらめかく知食さは献奉る種々の御饗物を御心平穩に聞食し諾ひ給ひて教祖神の御許に鎮坐す奇魂の幸もて子孫は大木の瑞枝瑞々しく家門は木の下露の清く美はしく朝夕にい照輝かしめ給へと謹み敬ひも白す

一年祭 祭詞

此の靈床に鎮奉り坐奉る某彦の靈神の御前に白さく

武士の荒木の眞弓一筋に思ひ返せば久方の月毛の駒の甚早くも月日は來經行て今日はも
汝彦が惜しき此現世を遊りて幽冥の八十の限路に出立坐し去年の此月の今日なりけり親
族家族諸々は限無き月影を見ては清かりし其の御心を偲び清かなる風の音を聞きては高
かりし其の御功を仰ぎつゝ忘草忘るゝ日なく松虫の待つとは在らぬ今日ながら今日に
しなれば更に又懐しみ戀しみ思ふ心も添ひて供奉る御酒御饌種々の御饗物を御心安らに
聞食し諾ひ給ひて教祖神の珍の御元に隠ひろ坐す汝靈の奇しき幸に家の内外の事にも
立塵の騒無く親族家族諸々喪なく事なく子孫の末遠長く守り恵まひ坐せと白す

密葬祭詞

某の靈の前に白さく

あはれ某の靈や汝こそは如何なる禍事に相交り相口會ひ坐しけめ村肝の心を迷はし人並
の行外れて

1 自ら海川に溺れてはかなくも身退り坐しつる事はや

2 刑務所に容らえ病を得て身失せましぬる事はや

3 若草の妻をもまかず目交の愛しき子を置きて仇し女と歸らぬ方にぞ罷りましぬる

嗚呼現身の人の齡は限りありて大概は百年には足らずて身退る事多きを歎き悲しむ者澤
なるに汝靈の如く自ら世をば狭め命を縮めてかく異様に死ぬるは甚じく大祖神の神慮
にも違ひ教祖神の御教にも脊くものにしあれば今にしては汝靈も恥ぢ恐み惑ひ悲しみ
て坐すものと思ふものから大神等に見直し聞直しを乞願ぎ奉り神許し神宥めを乞祈奉り
つゝ式の随々葬儀仕奉らくを御心も慥々に聞召し給ひて元つ靈の清々しく隨神安く穩
に鎮り坐せと白す

墓碑建設祭詞

某の翁の奥城の御前に「職名姓名」謹みて白さく

汝翁の常世の住處と不穩に岩隠り坐すこれの塋域に今回千代の形見と拜み奉り人も知
るべく大石に御名彫附て彌高に彌堅固く築き立てその御祭仕奉る狀を平けく安けく聞召
し給ひて標の石の朽る事なく動く事なく風の音の遠き後の世に至るまで子孫の彌繼々に

眞心の道を辿り進みて其の名放らさず慎み敬ひ仕奉らしめ給へと御酒御饌種々の物を供奉り親族家族玉串の取々に拜み奉らくを和魂の和やかに享け諾ひ給へと謹み敬ひも白す

物故者慰靈祭詞

此の小床を假の靈床と被清めて招奉り坐奉る故何中學校教諭何某主を始めて何柱の教職員の靈神等及在學中物故坐し、生徒何某主を始め何柱の靈神等の御前に「職名姓名」敬ひて白さく

汝靈神等が臨終まで精神を籠め力を盡して恪み勤め勵み學びましける此の何中學校の學事はし大神等の大之恩頼の隨々學の庭の彌廣く教草花香はしく咲亂れ美はしき實をば結びつゝ國家社會に數多有爲の士を送り送りて今年にも創立何十年の記念の年を迎ふる事とはなりぬ故明日といふ何月何日を創立記念日として年毎に祝典仕奉り來し次の隨々今回はも縣知事を始めて縁故ある地方の賓客現在教職員在學生に數多の校友等遠近より來寄集ひて校連の隆昌を壽ぎ奉り師恩の深きを禮び奉らむとするに先立ちてその慶祝を現身ながらに享けまさざる汝靈等の爲に今日を生日の足日と齋定めて此れの齋場に招奉

り齋奉り靈慰め奉らむと御酒御饌種々の味物を横山の如置高成して捧げ奉り汝靈等の親族家族をも招奉り在校職員生徒諸々御前に並居列り玉串の取々に拜み奉り俥奉らくを私魂の和びに安らに聞食し諾ひ給ひて汝靈等がいそはきましゝ精神を受繼ぎ受傳へて教事に従ひます教職員は更なり數多の教子等の學業に至るまで幸く眞幸く靈幸へ給へと虔み敬ひも白す

布教功勞者慰靈祭詞

是の靈舎に坐奉り齋奉る故金光教何教會長何某大人の靈神故信徒總代贈權少講義何某彦靈神何某彦靈神全何某大刀自靈神四柱の靈神等の御前に今日の齋主「職名姓名」虔みて告白さく

大神等の高く尊き神稜威と汝靈神等の奇しく妙なる恩頼の隨々是の教會所の神比禮日に輝き月に現はれ信徒の數も年々に蕃息りて今年にも開教何十年てふ愛度き年を迎ふる事となりぬるを以て其祝祭を年毎の例の教祖大祭に合併せて明日といふ何月何日の朝日の豊榮登に仕奉らむとするに先立ちて今日の今宵を吉日の佳辰と齋定めて汝靈等が道の

爲教會所の爲に盡し給ひし功勞を稱へて拜奉り慰奉ると臨時の靈祭執行はむとして遙に在世當時の事蹟を偲び奉るに食物にも着物にも事々に事缺かせ給ひつゝも迷ひ惱める信徒等の爲に身も棚知らに取次の神業直く厳しくいそはきましつゝ道を拓き教を布き給へりし前教會長の大き功績は申すも更なり或は教會所開設に當りて信徒總代として御舎の購入に將地方廳の認可を得る爲に西に東に奔走り或は信心の後繼者を養ひ育てむとて道の若人等の爲に青年會設立の事に何くれとかくれたる御力を籍し給ひ或は吉備樂の會を作るとて自ら率先じて其の技を學び婦人會を誘ひて樂人を集め給ふ等道の爲教會所の爲に立て給ひ興し給ひし功勞の高く大きやかなるが今更に尊く仰ぎ奉らるゝぞかし殊に去し年これの市に迦具土の大き荒びありて許々太久の家居の焼失せにし時汝靈神等が興し給ひ後援給へりし青年會婦人會等の會員等がいち早く先立ちて罹災者の救護に或は救恤の爲に金錢や品物を募集歩き配布廻るなど紛れなき大き働をなしつることは世の人々に大神等の神比禮の如何に畏く我道の教の如何に美はしきかを示現しつる眞の道開きにしていづれか汝靈神等の大き功勞にあらぬものやはあるかく偲びかく稱へ奉りつゝ禮自

の物と御酒御饌種々の味物を捧奉り親族家族を始め信徒諸々御前に群集ひて拜み奉らくを平げく安らげく聞食し諾ひ給ひて汝靈神等が生涯思を懸け力を盡し給へりし道の爲教會所の爲に愈々益々靈幸へ給ひ明日の御祭事麗しく仕奉るがに靈ながらに扶ひ輔け給へと鶴自物頸根突抜て拜み奉らくと白す

招魂祭詞

此の某山の山ふところ松籟の清める眞區を巖の岩座と鎮坐す何某靈神を始めて何柱の靈神の御前に「職名姓名」度みて告白さく
 阿波禮汝靈神等が大君の任のまに／＼海行かば水漬く屍山行かば草むす屍額には矢は立つとも脊には立てじと醜の狂夫共をば或は山の瀬毎に追討め川の瀬毎に追伏せ或は大艦小艦に乘組みて醜の軍艦をば海の底の石塊と討沈めて大き勳功を立て給ひつゝも不意敵の矢彈に的らえ或は悪しき病の氣に罹ひまして護國の鬼と化り給へりし高き榮譽を稱へ奉り大き功績に禮び奉ると年毎の例の随々これの里の在郷軍人會並に愛國婦人會國防婦人會の主催にて今日の佳日の美日に御祭仕奉る禮自の幣帛は由貴の御酒鏡の餅飯を初め

て海川山野の種々の味物を取揃へ御前に置高成て献奉り笛吹き琴弾き遊びの業をも仕へて御心を歡嬉し奉らくを春の日のほがら／＼に聞食し諾ひ給ひて今しはし非常時のさ中の荒浪を克伏打開きて彌が上なる隆昌を皇國の上に計らむと國內舉りて緊りに緊り瞋みに勉みてある事態を靈ながらに見し諾ひ給ひて天翔り國翔り靈幸へ給へと白す

招魂祭々文

故陸軍歩兵大佐正何位勳何等功何級何某命の靈何某靈何某靈他何柱靈神等の御前に何市長「何某」虔み敬ひて告白さく

現世に生れ出でし蒼生の榮譽はその種類は色々にありその階級は様々にあれど敷島の大和國に生れ出て武士の臣の男と數へられ戰場に出て立ちて皇の醜の御楯皇國の貴き礎とたとへその身は退るとも立てし功績を末遠永く後の世に語りつき云ひつゝ稱へらえ偲ばゆるこそよなき名譽にはあれ實にや汝靈等は時こそ違へ態をこそ異にすれ均しく戦役にあづかりておふなく君の御爲御國の御爲に力の限を盡して身退りましぬるものなれば人の中の人にして又高きが中の高き榮譽を荷はせ給ふ益良武夫とこそ稱へつべ

けれ故年毎の例の随々今日の佳日に汝靈神等の爲に御祭仕奉ると市民諸々來寄集ひてかく様に偲び奉りかく様に稱へ拜み奉らくを英の靈等天翔り國翔り享け諾ひ給へと白す

春(秋)季 靈祭 詞

是の祖靈舎に安奉り鎮奉る故金光教何教會長何某大人の靈神を始めて是の教會所に所屬の教徒何某彥靈神何某姬靈神他幾柱の靈神等の御前に白さく

今日はしも皇朝廷にては皇祖等歴代の皇靈の大御前を齋奉らせ給ふ生日の足日にしあれば此の御前をも拜奉るとして御酒御饌種々の味物を机代に置足はして供奉らくを平らに安らに聞食し諾ひ給ひて大祖神の深く厚き御愛撫を蒙り教祖神の廣く高き御蔭に隠るひ坐して家々の遠永き守護神と鎮り子孫の八十續に至るまで信神の眞心を以て君父とに事へ奉り負持てる氏の名穢さず父祖の名落さず家業を繼ぎ足らひ家門高く立榮えしむべく堅磐に常磐に守り幸へ給へと齋主「職名姓名」謹み敬ひて白す

祖 靈 祭 詞

此の某家の氏神と持齋く遠祖世代祖等親族之靈神を始めて何某彥靈神何某老翁靈神何某

大乃自靈神何某童男靈神等の御前に「職名姓名」謹みて白さく
 年毎の例の随々今日の生日の足日に是の家の守神と鎮坐す汝靈神等の靈祭仕奉ると御酒
 御饌魚菜種々の物に時節の花をも折添へ親族家族諸々御前に打集ひて拜奉らくを御心和
 やかに聞食し諾ひ給ひて某老翁の始め給ひ入信り給ひし真心の道は子孫の末の末まで迷
 ふ事なく失ふことなく彌續々に教傳へて家内の者等一つ心に家業を勵み勤め御祖の君等
 の依し給ひ貽し給へる家の財産をば散す事なく失ふ事なく萬世まで受傳へ押擴めて年毎
 の御祭美はしく賑々しく仕奉らしめ給へと虔み敬ひも白す

祖先朝暮拜詞

掛卷も恐き我氏の神と持齋く遠つ祖歴々の親等親族家族諸々の御靈の神等の御前を拜み
 奉りて白さく

嗚呼氏の神等の高く尊き御恩頼を嬉しみ辱なみ仰ぎ奉りつゝ吾等が家の産業と取行ひ成
 務むる萬の事業等を日に異に過つ事なく害ふ事なく彌進みに進ましめ給ひて家内の者等
 睦び和ぎ合ひて子孫の彌次々に家にも身にも煩はしき事なく病しき事なく夜の守り日の

守りに廣く厚く守り幸へ給へと恐み惶みも白す

同略拜詞

言卷も恐き此の家の幸魂奇魂と持齋く吾が遠つ祖歴々の祖等親族家族諸々の靈の神等の
 宇豆の御前を謹しみ敬ひ拜み奉らくと白す

玉襪掛けて祈らな世々の祖於夜の御祖の神の幸ひを

祖先贊詞

世々の祖は吾が家の神吾が神と心盡して齋き奉らな心盡して齋さ奉らな尊き御祖の神等
 よ子孫の爲に家の柱を鎮め立て給ひ裔子の爲に世の生業を守り助け給ひ幽冥の現えぬ界
 に座坐せども御愛の御心は現世に易らせ給はず幸魂の眞佐伎く幸へ給ひ奇魂の奇びに恵
 み給ひて志は眞木の柱の動きなく産業は結ぶ網目の弛びなく真心清らに瞋み勉めしめ給
 ひ親族家族和らぎ合ひて日に異に心安く樂ましめ給ひ終に現世の事竟へて神の御府に參
 らむ時には必ずしも迎へ執り給ひ御愛を蒙らしめ賜はむものと神の御規の妙なるを恐み
 謝なみ御祖の恵の臚げならぬを嬉しみ悦び白す事を御心も涼かに聞き食し給へと白す

阿奈奇びの御祖の御靈
阿奈尊との御祖の神

改式祭奏上詞

掛卷も畏き天地金乃神の大廣前教祖生神金光大神の御前に「職名姓名」謹み敬ひ畏み畏みも白く

言卷は畏かれど我皇御國はし靈幸ふ神代より惟神なる皇國風に據りて萬の事等執行ひ來しを中世より外國の他教の傳はりて内日刺す都を始めて天離る鄙の國邊に至るまで次々に布弘り國民の悉年久く其の教に依りて葬儀執行ひ其の法以て世々の祖等を祭りつゝ在經しを明治の大御代に萬廢れたるを起して古に復し給へる中にも神祭の御式はし大御國風の最も重き大御式にしあればとて神代より惟神傳はり來し隨々興し給ひ定め給ひて天下の公民等に從ひ改めよとの詔勅を宣らせ給へるは實に畏き極になむ故此の何某はし年頃我眞の大道に入信り神と皇上との大御惠の深く厚きを明め悟るものから天皇の詔勅を畏み奉り教祖の神訓を忝み奉りて今回本教の式に改めむと今日の生日の足日に改式祭

執行はむとする状を奏上奉らくと御酒御饌種々の味物を献奉らくを慈し愛しと聞食し給ひて此の家の遠祖世代祖親族家族の靈等を今日よりは神府に召上げて限なき歡嬉を受け得しめ給ひ子孫の八十續き迄茂久榮に立榮えしめ給へと畏み畏みも白す

改式祭遷靈詞

此れの何の家に持齋く遠祖世代祖親族家族之靈神「何々」之靈神等い今日はも汝靈神等の改式祭執行はむとして斯く新しく造り備へし珍の靈璽に天翔り國翔り來て寄集ひ遷り鎮り坐せと白す

改式祭詞

此れの靈舎を祓ひ清めて齋奉り坐奉る何の家の遠祖世代の祖等親族之靈神を始めて「何某」之靈神等の御前に「職名姓名」謹みて告白さく

阿波禮汝靈等の身退り坐し、時は佛法以て葬儀執行ひたりしを此の家の主人「某」が早くより我教祖の御教を蒙りて高く尊き恩頼を仰ぎつゝ、天地の眞理を悟るものから他國の異しき道以て世代の祖等を斯く狀に祀らむは最も忌々しと本教の儀式以て子孫の末遠永く

仕奉らむとして今日はも汝等の御靈を改祭り鎮め奉ると御饗物には御酒御饌種々の味物を供奉り拜み奉る事の状を相諾ひ聞召し給ひて今日よりは教祖の大神の廣き御蔭に隠ろひ彌高に神の位に鎮り坐して限り無き歡樂を受け得給ひつゝ子孫の八十續まで夜の守日の守に守給ひ幸へ給へと謹み敬ひも白す

改式祭墓前祭詞

此れの奥城所に天翔り寄り坐す何の家の遠祖世代祖等親族諸々の靈神等の御前に齋主「姓名」謹み敬ひて告白さく

汝等の身退り坐し、時は佛葬以て葬儀執行ひ佛法以て年々のみ祭仕奉り來しを今回某主が我教祖神の御教を尊信び天地の大理を悟り得しものから本教の式の隨々家内に鎮り坐す靈神の改式祭執行ひ己に其の事竟へぬれば今かく親族家族諸々率る連並めて各々も八十玉串の取次に拜み奉らくを空津靈も阿奈嬉しと諾ひ坐して今日よりは此の奥城所を干世に變らぬ清き忌庭と轉樂しく鎮り坐せと白す

改碑式祭詞

此の奥城所を常の住所と鎮り坐せる何家の遠祖世代祖等親族諸々の靈の御前に白さく汝等の身退り坐し、時は他國の佛法以て葬儀執行ひ佛式以て御墓造り仕奉り來しを今回「某」主が本教の式以て靈を改祭り標の石碑をも改造りて子孫の末遠永く參拜み仕奉らむとす故この状を慈し愛しと見し諾ひ給ひて伊豆の靈を寄せ給ひ親族家族が仕奉る時々の御祭をも嬉し樂しと享け諾ひ給へと謹み敬ひも白す

謚號の撰定は左表による

例		格			號			謚		
皇族	命	命	公	君	君	命	命	命	命	
	親任	公	君	君	君	君	命	命	命	
勅任	大人	貴	貴	貴	貴	貴	貴	貴	貴	
	奏任	彦	比	比	比	比	比	比	比	
判任	老	老	若	大	大	大	大	大	大	
	庶民	老	若	大	大	大	大	大	大	
一般教徒	女	女	女	女	女	女	女	女	女	
	女	女	女	女	女	女	女	女	女	

註 彦、姫、以上ハ年齢ヲ問ハズ

老翁、老叟ハ七十歳以上 翁媪ハ五十歳以上

大郎子、郎子、大郎女、郎女ハ、丁年以上、但シ大郎女、郎女ハ未婚者

大刀自、刀自ハ三十歳以上 但シ配遇者アリシモノ

有功有徳ノ者ハ一等若シクハ二等ヲ昇スコトアリ

但シ特殊ノ場合ヲ除キ命ノ謚號ハ用ウルコトナシ

謚號考案規準例

- 一 尊稱 神皇御大高主根等(神皇御ノ三八皇族ニ限ル)
- 二 美稱 眞若玉 太別嚴活足豊細美 彌等
- 三 徳識 奇長幸孝壽知賢 香柱等
- 四 功績 立興榮昌功績等
- 五 職掌 道教文武等
- 六 性質 眞心明清正直實忠誠廣厚重速敏健
雄英等 和妙照映等
- 七 容貌 居住の山川 野原 丘岳 里村 字 等の名
- 八 地名 居住の山川 野原 丘岳 里村 字 等の名
- 九 四季 (春) 霞 鶯 花 梅 若草 (夏) 螢 菖 青葉
(秋) 露 月 紅葉 稻 (冬) 雪 霜 氷 冬草
- 〇 枕詞 荒妙の(藤原) 足引の(山田) 夏草の(小野)

附 録 支那事變關係祝詞祭詞其他

國威宣揚祈願祭祝詞

掛卷も文に畏き天金地乃神の大廣前教祖生神金光大神の宇豆の御前に「職名姓名」畏み畏みも白さ
く
東洋の平和を重みし國際の正義を尊び國々其の幸福を共にせむとするは掛卷も畏き御代御代の天皇
の大御謨にして皇が御國の堅石に常石に動きなき國是にこそありけれ斯く在るが中に彼の支那の
國はし同心に其の平和を圖り互に其の幸福を願つべき國情なるを如何なる痴心かも事毎に此の大
御謨に逆らひ此の國是を無視して正義を紊し誠實を害ひ平和を破りて愧づる事なく無禮く善なき
事のみ多かりしが殊にも先づ頃ほひ彼の國の軍人等が痴業によりて不慮も支那事變起りて頑に僻
み曲りたる彼の國人等は中々に皇が大朝廷の廣き深き御面向に順ひ奉らぬのみか却りて我を侮り貶
しめ陰かに軍備をさへ嚴かに固め戰を挑み來て今は施すべき術なく日は一日夜は一夜ごなも忌
々しく只ならぬ事態に陥りぬるは慨しことも慨く嘆はしことも嘆はしき事の極みなりけり故大前に忌回
り清回り仕へ奉りて禮代の幣帛には御酒御食種々の味物を供へ奉りて仰ぎ乞ひ祈み奉らくは彼の國

人等上となく下となく一日一時も速く頑なに僻める心を改めおろかに迷へる思を覺りて大き廣き高き尊き皇が大御心のまにまに相倚り相圖りて永久に變ることなく動くことなき眞の平和の基を廣く遠く定めしめ給ひ國々睦び人々和らぎて幸ある世に復らしめ給ひ又鐵も溶くるなる夏の眞盛を遠き國邊に正義の保障平和の守護と雄々しくも奮ひて立てる皇が大御軍人諸々が身に病ましき事なく恙ましき事なく各もく其の任務に忠實に仕へ奉らしめ給ひて芳はしき功績を擧げ得しめ給ひ其の家族等が家にも身にも喪なく事なく苟にも後顧の憂ひあらしめ給はず斯くて國民己がじし家の業に俗み勵みつゝ皇が大朝廷に五十榎八桑枝の如く仕へ奉らしめ給ひて皇國の大稜威を四維八紘に伊照り輝かじめ給へと畏み畏みも乞ひ祈み奉らくと白す

國威宣揚大祈願祭祝詞

掛卷も文に畏き天地金乃神の大廣前教祖生神金光大神の宇豆の御前に「職名姓名」畏み畏みも白さく恐かれど明治天皇の御製に「四方の海みな同胞と思ふ世になど浪風のたちさわぐらむ」と御歎かせ給ひしが此は亦代々の天皇命の大御心にぞありける安波禮今回の支那事變はもよ其の由來する所遠く深じこかや去し七月七日の夜北京の郊外なる蘆溝橋の閘をつきて支那兵の突如我に加へたる不法射撃に依りて事件は起りにけりと聞えしが抑々北支の地は或時は特殊地域となりなむとして東亞

の平和の爲に喜ばしく思ひたりしも東の間にして彼國人共の無禮舉動の容し難きもの數多有りたりしも皇軍は之を忍びに忍びて宥め許したりしを猶止まずして轉有りけり故皇軍人は布豆久美憤りて終に醜の軍勢を打誅め攘ひしが尙懲りたる色なく却りて陰々に其勢を増し無禮行爲陽にして度々襲ひ敵爲すのみか外國に詐言を作り設けて正義き我皇軍を惡様に言陷れむと事謀るなど惡みても餘りある此穢き心を淨め得ずば東洋の平和は謂ふも更なり世界の平和も望むべくも有らずなも是を以て我皇軍人は家を忘れ身も柵知らに今し支那の荒野に或は險じき山に眠らす休まず剩へ飢ゑを恐ひに忍び乏しきに堪へに堪へつゝ夜晝知らに此處彼處に襲ひ來る敵の軍を排退け討滅し今は全土に其の膺懲の聖戦を開きて攻むれば取らざるなく戦へば勝たざるなく其の偉大なる勳功輝ける名譽は古今の史上に其の類を無かるべき斯くて北支の生命線なる保定滄州等我れに歸し尙も要害の地を次々に占領せりあはれ其間の皇軍の勞苦は如何ばかりなるらむ如此思へば己等如何でか其勞苦の千々の一をだに報いざらまじ功めて國威の宣揚を請禱ぎ奉ると共に軍人諸々が身に恙ましき事なく武運の長久を乞祈奉らんと教師諸々を率ゐ連並め斯くも今日の生日の足日に禮自の幣帛と御酒御饌を始め海川山野の種々の物を八取の机代に置高爲して御祭仕奉らくを吉備の樂琴の調平に笛竹の音の安らに聞食し相諾ひ給ひて伊行き向へる益荒健男等心剛く雄々しく身健かに病じき事なく傷つく

事なく奮ひ進みて服はぬ者共を事向け和し日の御旗進む行手は海に陸に將空に伊向ふ敵なく速けく事件和ぎ安く静けき國と成幸へ給ひて天皇命の大稜威を天耀し國耀し奉らしめ給ひ皇軍人等各もく命眞幸く高き勳功を立てしめ給ひ芳はしき名を顯さしめ給ひて天地に伊照輝く大き譽を報命白さしめ給へと恐み恐みも聞え奉らくと白す

昭和十二年十月九日

教祖大祭祝詞

掛卷も畏き天地金万神の大廣前教祖生神金光大神の宇豆の御前に「職名姓名」恐み恐みも白さく恐かれど天地の大祖神はし大神徳を天が下の限り人の悉に配り辛へ給ふが随々世は進み人は榮往きて其の神徳の中に生さるゝを世の人知らざりけるを今は昔安政の御代教祖生神神現はれ給ひて陰陽道の日柄方位の吉凶に惑ひて其の行手に多米良ひ相性相剋の迷信に囚はれ其の立所を失へるを阿波禮と教諭し説破りつゝ實に「神は我本體の大祖にして信心は親に孝行するもおなじ事」なる眞理を神訓へ神導き給へるが随々病めるは癒され煩へるは拂れつゝ身を立て家を興さしめ給ひつゝ今は海の内外を掛けて神號を稱へ奉る信徒は濱の眞砂の計へも盡きすぞ有りける安奈尊と安奈恐と故今日はしも年毎の例の教祖大祭を仕へ奉らんと禮代の弊帛には由伎の御酒御饌を始め海川山野の

種々の物を百取の机代も多和々に置高成して捧げ奉らくを笛竹琴の調樂しく立舞ふ乙女のさまも悠然に開食し給へと白す

斯く仕奉りて更に白し上げ奉らくは恐かれど皇が大御代は手長の御代の足御代と御坐すが中に先つ頃より無道き支那の國人共穢き舉動をのみ重ねて重き條約を破りて顧みざるもの一度二度ならずして彼地に屯營せる皇軍を侮り輕しめ奉る所爲のみつゝのりしかば遂に膺懲の皇軍を次々に遣されて支那全土も今は聖戰場と化るに至りしが連戦連勝して大稜威は輝きに輝き給へるはいとも畏し東洋永遠の平和の爲め彼等悉に一日も早く其の非を悔い改むべく幸へ給へ斯くて去し八月に慰問使を北支を始め彼處此處に差遣しぬるを安波禮と開召し給ひて喪なく事なく慰問の事竟へて立歸らしめ給へ將教義講究所金光中學校の教事はし其の趣旨を彌張りに張らしめ給へ今日しも山を越へ海を渡りつゝ是の齋場に參來集へる千萬の信徒をはじめ誠あるも障る事ありて得參來すて遙に御名を稱へて拜み奉れる者共に至るまで各もく皇軍入の武運長久を祈奉ると共に「我身は我身ならず皆神と皇土との身とおもひ知れよ」この御神訓を銃後の唯一の守として立働きに働きつゝ出征ける益荒健男をして後顧の憂を絶ち露の思念をも懐かしめざるべく守り幸へ給へと恐み恐みも稱辭竟奉らくと白す

昭和十二年十月十七日

月次祭祝詞

一七〇

掛卷も畏き天地金乃神の大廣前教祖生神金光大神の珍の御前に「職名姓名」畏み畏み白さく
今更に言擧げ奉らむは畏かれど大祖神の神徳はし天照る日影のい照り輝き教祖神の恩頼はし天津
水のい行き亘らひその神徳に活きその恩頼に救はるゝ者日に月に藩息り行くが中に此の教會所の
神比禮年々に輝き渡り坐しぬる事を嬉し奉り辱み奉るご今日の生日の足日に月次祭仕奉る禮代
ご由貴の御酒御饌種々の味物を机代に置高成して捧げ奉らくを平らけく安らけく聞食し諾ひ給ひて
言卷も畏かれど八紘を蔽ひて宇ごな給ふ深く厚き大御心の隨々近く隣せる支那の國ごは殊に誼を
厚うし相補ひ相扶けて互にその榮を圖ることこそ東洋平和の基なれと思召すものからかねてより種
々の條約を結び定めて好を修め給ひてあり經しに如何なればか禮無く暴戻なる舉動事毎にしてわけ
ても去年の夏蘆溝橋に事變起りてよりは目に餘り心に諾けかぬる事のみ頻にして黙し難かりければ
遂に膺懲し悔い畏ましめ給はむごて皇軍を發し給へりしに海に陸に將空に進み進みて天津北京上海
を始め彼の國の主要なる都市を次々に攻略り去年の暮には敵國の首都なる南京をさへ陥落れ彼の國
民政府の亂夫共をして怖じ畏ましめ皇軍の威武を四方の國々にまで輝かしむるに至りしは實に畏し

ごも畏きごこの極みになむかくて皇軍の征きし地域には彼國人達の自然なる心ごとして我國人ご互に
手を携へて西洋の邪惡なる思想を防ぎ東洋の正しき本然の道に據り立ち眞の平和を樹立てむごて中
華民國臨時政府の組織せられ日ご共に堅實なる成長を遂げつゝある事の頼母しきよ然はあれごもこ
の事はや我國にはいまだかつて在經し事なき大きな事共にして成るも成らぬも我國人諸々の心一
つに在る事にしあればごて去年の秋よりは政府の主唱にて國民精神總動員の行はれ舉國一致堅忍持
久以て彼國の長期抗戰に對應せむの心構をかため我道にても教會所の悉にその委員會の設けら
れ信神に基きて負那負那君の御爲國の御爲に役立ち仕へんと緊り勵みてあり我國の斯く堅き決意の
あるをも得悟らで國民政府の痴者共懲りすまに尙種々の戲業を企て反抗挑戰むごを休めざるが故
に掛卷も畏かれど皇朝廷にては一月十一日御前會議を開かせ給ひ同十六日に支那事變に對する我皇
國の強く正しく不動の決意を國の内外に聲明し給ひぬ阿那尊きかも阿那畏きかも我皇國は今しかく
も重大なる時節に直面きに向きてあれば我道の教信徒は言ふも更なり國民の悉々我身は我身ならず
皆神と皇上ごの身と思ひ知れよごの神訓の隨々軍に従ふご郷に在るごの區別なく君の御爲國の御爲
になりぬべく各もくの勤務家業を身も棚知らに勤め勵みて報公の誠をつくさしめ給ひ天皇陛下の
大稜威に副ひ奉らしめ給へご畏み畏みも白す

一七一

紀元節當日祭祝詞

一七二

掛卷も畏き天地金乃神の大廣前教祖生神金光大神の珍の御前に「職名姓名」畏み畏みも白さく
百足らず八十日はあれど是の二月中の一日はしも掛卷も畏き皇御祖神倭磐余彦尊い豊葦原の瑞
穂の國を安國と平けく知食せと言依し給ひし天津御祖神の神命のまに／＼國中に荒ぶる神等を神間
はしに問はし神攘ひに攘ひ給ひて八紘を掩ひて宇とせむと宣らせ給ひて都を開き給ひ奠め給ひ天壤
と日月と共に窮りなき天津日嗣の天津大御業を創め給ひ建て給ひし最も尊き最もめでたき日なるを
以て今日の朝日の豊榮上りに御前を忌回り清回り仕へ奉りて禮代の大幣帛を置足はし捧げ奉りて稱
言覽へ奉らくは天皇の手長の大御代を茂しの御代の足らしの御代に常石に堅石に齋ひ奉り天下穩
ひに國民安らけく殊には今回の支那事變に海に陸に仕へ奉りて在る皇が大御軍人等が武運長く久
しく武名廣く高く在らしめ給はむは更なり國民諸上が上下が下に至るまで一心に相結び相扶
けて皇が大御門に忠實に仕へ奉らしめ給ひて皇が大御心の隨々亞細亞の洲に春永久に四方の海浪長
閑けかるべく守り幸へ給へと畏み畏みも白す

大 祭 祝 詞

掛卷も綾に畏き天地金乃神の大廣前教祖生神金光大神の御前に齋主「職名姓名」恐み恐みも白さく

畏かれど天地の大祖神の御神徳に因りて萬の物生り出で、人生かされ物皆進み行くものなる道理を
知らで世人は在らぬ邪の道に迷ひし世に我が教祖現はれ給ひて人は皆天地の道理に合ふ信心を爲す
べきものぞとて神と皇上との大道を開き給ひし大御教事は青海原打つ敷波の彌瀆ごりに擴ごり行き
つゝあるぞ尊き限りなりける故今日の生日の足日に國威宣揚武運長久の祈願の御祭に併せて年毎の
恒例の大祭を奉仕らむと禮代の大幣帛には由伎の御酒御饌を始め海川山野の種々の味つ物を八取の机
代に置高成して捧げ奉らくを吉備の樂琴の調べ平けく吹く笛の音の安らけく聞食し給へと白す
斯く仕奉りて白し奉らくは去年にも聞け奉り乞ひ願ぎ奉りたる支那事變はし漸々に廣ごり事繁くな
り敵軍未だ空想の夢醒めず悔改むる状も有らねば我が皇軍は彌々兜の緒を引き締め益々鐵砲の火蓋
を切り放ちつゝ武運奇しく雄々しく尊き戦果を挙げつゝ今ゆ後は我が帝國は彼の新なる中華民國臨
時政府維新政府の礎、確く眞木柱高く築き立て相携へ國交を厚くし新しき國經營業をも助け成さむ
とするに依りては愈々國民舉りて肇國知らし召し、嚴し大御代を仰ぎ奉り八紘を掩ひて宇と成し給
ふ大御旨を戴き奉りて赤き誠の心を以て「我身は我身ならず皆神と皇上との身とおもひ知れよ」と
の御神訓を各も各も頂に捧げ奉りつゝ天津日嗣の大御業を仰ぎ扶翼け奉らしめ給ひ東洋の平和を彌
遠永に復さしめ給へと乞ひ祈み奉らくと白す

一七三

斯くて部下教會所の敷事はし能く御神慮に適ひて前立嚴しく御手代り尊く仕へ奉らしめ給ひつゝ白地にも道に違ふ事なく夢怠る事なく天地の眞の道を雲の八重垣彌遠に鹽の八百路の彌廣に布き施し得しめ給ひ又教義講究所の修行をら中學校の學業をら彌張りに張り彌進みに進ましめ給ひて行手に過あらしめす守り幸ひ給ひ今日是れの齋場に參來集へる信徒は言ふも更なり海山遙に遠く大神名を仰ぎ稱へ奉りて在らむ氏子諸に至るまで喪なく事なく家業を務め締りて君の御爲國の御爲となりぬべく家門高く榊葉の立榮わしめ給へと吉備の乙女の立舞ふ狀のゆかしく聞食し諾ひ給へと恐み恐みも稱辭竟へ奉らくと白す

昭和十三年四月十七日

天長節奉祝祭詞

掛卷も文に畏き天地金乃神の大廣前教祖生神金光大神の御前に今日の齋主「職級氏名」畏み畏みも白さく
 百足たらず八十日は在れども是の四月の下の九日はしも掛卷も畏き
 天皇の神降誕坐し佳き日の佳き辰にあれば今日の朝日の豊榮昇りに御前に忌回り清回り仕へ

奉りて豊御酒豊御食種々の味物を禮代の物と机代に置足はし捧げ奉りて仰ぎ壽ぎ伏し乞祈み奉らくは天皇の大御命は天地日月と共に窮り無く彌若に御若に給ひ彌復ちに御復ち給ひ皇が大稜威は天つ日の伊照り徹らぬ隈なく皇が大御徳は大地の伊行き到らぬ處なく殊には今回の支那事變に皇が大御軍に參加りて攻め戦へる御軍人等の武運長く久しく仇なふ輩を悉に膺ち罰め順らふ輩を次々に言向け和して東洋の平和を永久に復さしめ給ひ又國民諸々は國民精神總動員の御趣旨を愈々厚く諾ひ益々に堅く守りて難きに堪ふる心を養ひ久しきに恐ぶ力を鍛へて赤き心の誠心を新に奮ひ起して皇が大御門に忠實に仕へ奉らしめ給ひて天皇の手長の大御代を茂の御代の足の御代に堅石に常石に齋ひ奉らしめ給へと畏み畏みも白す

支那事變戦病死將兵弔慰祭詞

是の齋場に神籬立林して暫時招ぎ奉り座せ奉る言卷も忌々しき故陸軍少將從四位勳三等倉永辰治郎命故海軍中佐從五位勳六等岩井庸男命を始め奉り支那事變の爲め皇國を護りの神となり坐し陸海軍人諸々の命の御前を「職名姓名」偲び拜み奉りて白さく
 海往かば水漬く屍山往かば草生屍と言立し大君の邊にこそ死なめこの我武士の精神は上津御代より世々の祖先の守り來れる大日本精神なりけり阿波禮隣邦支那の國人はもよ如何に國柄の定まりなき

に依るとは言へ人道を紊り國際の道義を無視せる行爲は恰も人間ならぬ鬼畜てふものにも異らざるべし抑々今回の支那事變たる彼は早くより北支に黒き心を潜め事を構へ事毎に暴慢不遜を極め戦を挑むこと其數を知らざりけるが我は隱忍自重波風を立てしめじと義を泰山の重きに取りて動かざりしに偶々蘆溝橋の事變突發り續きて起りたる通州の凶變は悲しくも其端緒を爲すに至り終に皇軍は陸に海に空に膺懲の火蓋を切るの止むなきに至れりかくて南苑張家口等の主要戦に至る迄絶わてなき有利に展開せられ難攻不落と頼めりし保定滄州等を陥れ平地泉の占領に依りて全く北支の生命線を制壓せるものと聞いたり阿波禮英靈等はや恐くも大元帥陛下の股肱と頼ませ給へる大御心に副ひ奉らまくと海には制海權を握り又艦上砲撃を以て陸戦と呼應し擁護の任務に勞苦き給ひ陸には如何なる堅き要塞も身を挺して之を抜き鐵なす城壁を爆彈背負ひて霞たばしる彈雨の中を一向に上りに上りて我攻進路を開きつゝ鬼神を泣かしめらるゝもの有り將航空飛行の妙技は膺懲の聖戦をして最も力あるものと仰がしめらるゝもの有り斯くの如く海に陸に空にと身も棚知らず命を鴻毛の輕きに比し身を輝く玉と碎き給ひ芳はしき花と散り給ひ又閃く稻妻と消ぬ給ひしも有りけり安波禮其の立て給ひし大勳功は金鷄と輝きて皇國の光たるべく其の殘し給ひし高き名譽は武士の鑑と萬代掛けて照りや輝くべけむ斯くて伊豆の靈等は大本精神の顯現者として稱へ奉るべかりけり故

今日の生日の足目を以て汝英靈等の御名を仰ぎ御功を偲び奉りつゝ慰靈の御祭仕奉らまくと禮代の幣帛には御酒御饌を始め海川山野の種々の物を八取の机代に横山のごと置高成して奉らくを吉備の樂琴の調平に笛竹の音の安らに開召給へと白す

斯く仕奉りて尙も偲び奉らくは恐れれど汝命等は勅旨の隨々靖國の神社に齋ひ奉り鎮め奉り坐さしめ給ふものなれば靈魂ながら今しも彼地の野に山に誓ひ戦へる戦友の前後に立ち給ひて夜となく晝となく守りに守り給ひ今日之の齋場に百官有司等其の御績と譽を稱へ奉り偲び奉り給へるを思へば現世に残れる親族家族等も上なき名譽と忝なみ奉るを汝命等は如何に心足らひに思ほし給ふらん斯れば其の身こそ草生す屍水漬く屍となり給ひぬとも高き功芳はしき名は何時の世にか消ぬ果つべき安波禮是れに勝れる譽やは有る安波禮之に越したる名やは有る然れば汝命等は各も各家を守の神と立たせ給ふは言ふも更なり天翔り國翔りつゝ現世に彌増して廣く遠く皇國を護の神と座し坐せと恐み恐みも白す

昭和十一年十月八日

戦病死將兵葬祭詞

あはれ官位勳功氏名諡號(を始め奉りて〇〇柱の御軍人)等の英靈神諸々の御前に金光教(致會名)

教師稱號氏名謹みて告白さく

東洋の平和を重みし國際の正義を尊び國々親み人々和みて其の幸福を偕にせむことも思ほし召すは我が御代御代の天皇の大き廣き高き尊き宏謨にして皇が御國の動きなき國是にし在るを支那の國の國人等は其處をし悟らす此處をし無視して却りて我を輕しめ侮り敵ひ斥けむとすることを以て年普く國民教育の本旨とさへ爲し來れるのみか我が御國體と本より相容れず我が御國風と始より相背ける彼の共產主義なども名くる賢しらに言立つる惡しき思想に心を傾けて我を傷け損はむとする企圖の漸々に露骨に成り以て來て遂に今回の事變を誘發す事とし成れるは慨しとも慨く憤ろしとも憤ろしき事にこそ在りけれ掛卷も畏き皇が大朝廷には斯く無禮く善なく拗け曲りたる徒輩を膺ち罰め懲しめ曉して東洋の平和を天地の共動く事なく彌定めに定め國々の幸福を日月と共に隅なく彌順ちに願たむと名も神ながら思ほし召して大御軍を發し給ひ進め給へる事はし畏しとも畏く尊しとも尊しあはれ汝「謚號」等はや皇が大御命を畏みて額には矢は立つとも願みはせじと伊豆の雄武び踏み武びて乏しきに堪へ難きを冒して彌奮ひに奮ひ彌進に進みて敵の肝を寒からしめ皇が御軍の武き御名を天に走せ芳はしき譽を他に轟かためて遂に去し 月 日に某地の會戰にして高き御功を立て雙び無き御名を留めて戰歿給ひしは雄々しき事極みなりけり故今日しも御

葬儀仕へ奉るごして御前を懇ろに厚く治め奉りて禮代の物と種々の味物を捧げ奉りて盡きせぬ御訣別を告げ奉らくと八十玉串取り取りに拜み奉る狀を平けく安けく享け給へと白す

斯く仕へ奉りて告げ白さくは汝「謚號」等い固より君と國とに捧げ奉り給へる身なれば今更に何をか惜み何をか嘆かむ御生命こそ荒野の末に果て給ひけめ現身は東洋平和の守護國際正義の保障と立たせ給ひ英靈は皇朝廷の遠の御楯食國の永き鎮護と靖國の神社に堅石に常石に神鎮りに鎮り給ひ神榮に榮わ給ひて掛卷も畏き皇が大朝廷の大御祭を享け給はむ事はし實に日本男子とある身の此上なく限りなき名譽とこそは仰ぎ上らるれあな由々しきかもあな尊きかもあはれ汝「謚號」等よ今斯く告げ奉る事の由を眞詳に所聞食して今よりは高き尊き神の御列に直進みに進み給ひて戰友の君等を始めて陸に海に將た空にご日夜分かす武び奮ひ攻め戦ひて在る皇が御軍人等の上を天翔り普ねく守り導き給ひて其武運を彌遠に彌廣に成し幸へ給へと畏み畏みも白す

弔

辭

今次ノ事變起ルヤ君乃チ勇躍挺身遠ク異域ニ皇師ニ從ヒ奮戦力闘以テ君國ニ殉セラル忠勇義烈誰カ感憤セザルモノアラシヤ

今ヤ皇威赫々トシテ八紘ヲ照シ皇軍ノ士氣烈々トシテ四表ニ震フ東亞ノ天地正義ノ靈氣漲リ平和ノ

光明ヲ仰クノ日期シテ待ツヘシ君以テ瞑スヘキナリ爰ニ恭シク玉串ヲ奠メテ敬弔ノ意ヲ表ス英靈尙クハ饗ケヨ

金光教本部

昭和十二年 月 日

弔 辭

陸軍歩兵少尉正八位贈中講義萩原金道君ノ靈前ニ告ク今次ノ支那事變勃發スルヤ君ハ勇躍召ニ應シ挺身遠ク異域ニ皇師ニ從ヒ去ル十一月八日山東省鳳凰鎮附近ノ激戦ニ於テ攻撃命令ヲ受クルヤ敵彈ヲ犯シ隊長トシテ奮戦力闘克ク頑強ナル敵ヲ制壓シ名譽ノ戦死ヲ遂ゲ以テ君國ニ殉セラルソノ忠勇義烈誰カ感憤セサルモノアランヤ今ヤ敵ノ首都陥落シ中華民國新政府亦成立セラレ皇威赫々トシテ八紘ヲ照シ皇軍ノ士氣烈々トシテ四表ニ震ヒ東亞ノ天地ニ正義ノ靈氣漲リ平和ノ光明ヲ仰クノ日近キニアラントス君以テ瞑スヘキナリ爰ニ金光教本部ヲ代表シテ恭シク玉串ヲ奠メテ敬弔ノ意ヲ表ス英靈尙クハ饗ケヨ

招 魂 祭 詞

言卷も思々しき

明治二十七八年役明治三十三年北清事變明治三十七八年役大正三年乃至九年役滿洲及上海事變等に或は戦死し或は病の爲に身失せ給ひし諸の英靈等の御前

今回の支那事變に身失せ給ひし

故陸軍少將從四位勳四等加納治雄命

故海軍中佐從五位勳四等栗本敏樹命を始め奉り戦病死將兵諸の英靈等の御前に齋主 職名氏名 謹

み敬ひも白さく

櫻咲く今日木綿崎山に齋く皇國護りの神と立たす英靈等の年毎の恒例の御祭仕奉るに當りて言擧げ

奉らん

恐かれど日出づる大皇國は肇國知ろし食しし神日本磐余彦天皇八紘を掩ひて宇と爲さんこの大詔の随々御歴代の 天皇は海の内外を問はず人と云ふ人を撫で給ひ國と云ふ國を惠み給ふ大御心なるに如何なればか頑 狂 穢き支那の軍等は何の理由もなく我が皇國に射向ひ來りて人道に背くのみならず東洋の平和を搔亂しければ帝國は止む事を得て其の膺懲の皇軍を起し給ひて海に陸に空にと敵を撃滅しつゝ直進めに進め坐すが中に可惜敵の打出す矢彈に或は病の爲に水漬く屍草生す屍と消ね坐しは哀しども慨しき極みにぞある然はいへど現身の世に在る人誰かは一度は死なでやは有

る大和男子として功も無く徒に朽ちなむ事は恨みならずや此を思へば汝命等は大君の御楯食國の守護と高き功を立てまじしぞ尊き限りなる安波禮其の功の光輝きて早くも彼の國を統治むべき新政府の漸々に完く成らんとする形勢を靈ながらに御覽しては如何に心よと思欲し召すらん阿波禮汝英魂は掛卷も畏き 天皇が大命以て別格官幣社靖國神社に國を護りの神と齋かれまして久永に國の御祭を享け給はむものぞかし阿那尊と阿那畏と故今日の生日の足日に金光町在郷軍人分會と力を協せ心を一にして毎年の恒例の招魂祭を執行ふと共に汝等の慰靈祭を仕へ奉らくと立てし神籬の御前を忌廻り清廻りて禮代には御酒御饌を始め海川山野の種々の味つ物を八足の机代に置高成して奉らくを吉備の樂琴の調平に吹く笛の音の安らに聞食し給へと白す

斯くて現世に遺れる親族家族等は更なり陸海軍大臣には弔電を寄せられ岡山縣知事を始め岡山福山兩聯隊區司令官各隊長官公吏より名だる人々學校長生徒兒童等も參り來て汝英魂等の高き勳功を尊み稱へ奉り禮び奉れば猶も在りし世に彌増して神御魂天翔り國翔り皇朝廷を常磐に堅磐に幸く眞幸く守り奉り給ひ今も虎伏す唐土の戰場に在りて汝等の高き志を繼げる戰友等の前後に立ちて國の御爲世の爲に力の限り心の限りを盡さしめ給ひ又各も各もが家の譽彌高に芳はしき御名彌廣に守り幸へ給へと乞祈奉らくを吉備の乙女の立舞ふ狀の床しく諾ひ座し坐せと恐み恐みも白す

昭和十三年四月十一日

御靈神祭祭詞

掛卷も畏き故管長金光山神大道立別命金光登勢一子大明媛故教監金光四神貫行之君等又故副管長金光正神金吉之君を始め奉りて道の眞柱と立たせ給ひにし靈神等諸の宇豆の御前に今日の齋主職名姓名謹み敬ひて白さく

始めを重みし終りを慎むは人生の宗とある道にこそあれ實にや年に月に開け進み行く目前の我が道の御榮を仰ぎ奉るにつけても先づ仰ぎ尊び偲び敬ひ奉らるゝは汝命等の大き廣き高き芳はしき御功になもありけるあはれ其の御功や遙照の峰に生ふる松の葉の數へも盡きす沙美の浦回に打寄する小石の擧げも敢へぬが中に汝登勢一子大明媛はし我か教祖の神の後へに立たして釜の御柱の影高くゆかしく懇ろに厚く仕へ奉り給ひ専ら内つ御事を治め整へ給ひ輔ひ給ひしは實に世の婦人とあり教師の妻とあるべき道は斯くこそ其の龜鑑を垂れ其の模範を示させ給へる事の績は今更に稱へ奉らむも尊し汝山神の命四神の君又正神の君より始めて道の眞柱の君等には生神の神ながらなる御導のまゝ共に心を合せ力を協へ給ひて或は道の綱を執り總ねて制度を立て設備を整へ規模を弘めて外に道の勢を彌張りに張り彌進めに進め給ひ或は取次の御業を神ながら承け繼がして神比禮日に新に月に

